

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 260

西 加 茂 遺 跡

一般県道清音真金線道路改良工事に伴う発掘調査

2022

岡山県教育委員会



1 溝1遺物出土状況（東から）



2 溝1出土遺物

序

本書は、一般県道清音真金線道路改良工事に伴い昭和58年度に発掘調査を実施した、西加茂遺跡の発掘調査報告書です。

総社市清音と岡山市北区吉備津を結ぶ一般県道清音真金線の改良工事は、交通混雑の緩和及び交通安全の確保などを目的として計画され、現在、同所は主要地方道箕島高松線との重用区間になっています。岡山県教育委員会では、この工事路線内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて関係機関と協議してまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分についてやむを得ず記録保存の措置を講じることとし、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、西加茂遺跡は弥生時代から中世にかけての集落跡であることが明らかとなりました。特に、弥生時代後期から古墳時代前期の大溝で多量の土器が出土したことは、多くの人々がこの集落で生活を営んでいたことをうかがわせます。

この周辺には、弥生時代から古墳時代の大規模集落跡である加茂遺跡、矢部南向遺跡や津寺遺跡、また、弥生墳丘墓である楯築遺跡や鯉喰神社遺跡等が存在しており、当地は吉備の中核地であったと考えられます。今回の調査では、この地域を考える上で重要な成果を得ることができました。

諸事情により報告書刊行が遅れおりましたが、ようやくここに刊行の運びとなりました。本書が地域の歴史研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また、学術研究のための資料として、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に当たりましては、岡山県岡山地方振興局（当時）及び地元住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 大橋 雅也

例　　言

- 1 本書は、一般県道清音真金線道路改良工事に伴い、岡山県岡山地方振興局（当時）の依頼を受け、岡山県教育委員会が発掘調査を実施した西加茂遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した西加茂遺跡は、岡山市北区加茂（旧岡山市加茂）に所在する。
- 3 発掘調査は昭和58年5月12日～6月29日に岡山県教育庁文化課（当時）職員 松本和男・浅倉秀昭、昭和59年2月6日～2月29日に同職員 二宮治夫・中野雅美が担当して、実施した。調査面積は1,900m²である。
- 4 本書の作成・執筆・編集は、令和2・3年度に岡山県古代吉備文化財センター職員 澤山孝之が担当した。
- 5 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 6 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花房1325-3）に保管している。

凡　　例

- 1 本書に用いた高度は海拔高、北方位は磁北、経緯度は世界測地系による。
- 2 遺構図・遺物図の縮尺は、個々に明記している。
- 3 第5・6図の遺構全体図は、遺構名に以下の略称を用いている。
　竪穴住居：住　　掘立柱建物：建　　井戸：井　　土坑：土
- 4 遺構番号は、種別ごとに通し番号としている。
- 5 遺物番号は、種類ごとに通し番号としている。また、土器以外の遺物はその材質を示すため、番号の頭に以下の略号を付している。
　土製品：C　　石器：S　　鉄器：M
- 6 遺物図のうち、中軸線の両側に白抜きのあるものは、復元図が不確実のものである。
- 7 土層の色調は、調査担当者の記述による。また、遺物の色調は、「新版標準土色帖」2002（農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修）、「新版色の手帖」2002（永田泰弘監修 株式会社小学館）に準拠している。
- 8 第2図の周辺遺跡分布図は、国土地理院の「電子地形図25000」を使用し、加筆したものである。
- 9 本書で使用した時期区分は、「津寺遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」98 岡山県教育委員会 1995の編年対比表を参照して表記し、概ね、鬼川市Ⅲ式併行を弥・後・Ⅲ、オノ町Ⅰ・Ⅱ式併行を弥・後・Ⅳ、下田所式併行を古・前・I、亀川上層式併行を古・前・II等とする。それ以外の時期は一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて文化史区分・世紀などを併用している。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境.....	1
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過.....	5
第1節 調査に至る経緯.....	5
第2節 発掘調査の経過.....	5
第3節 報告書作成の経過.....	6
第4節 日誌抄.....	6
第5節 発掘調査及び報告書作成の体制.....	6
第3章 発掘調査の成果.....	9
第1節 遺跡の概要.....	9
第2節 古墳時代前期以前の遺構・遺物.....	13
第3節 古墳時代中期以降の遺構・遺物.....	54
第4節 まとめ.....	59
遺構一覧表.....	62
新旧遺構対照表.....	63
遺物観察表.....	63
図版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)	1	第35図 溝1出土遺物⑪ (1/4)	37
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2	第36図 溝1出土遺物⑫ (1/4)	38
第3図 調査区全体図 (1/1,000)	9	第37図 溝1出土遺物⑬ (1/4)	39
第4図 T 1 ~ 7 断面図 (1/60)	10	第38図 溝1出土遺物⑭ (1/4)	40
第5図 1 A · 1 B · 1 C · 2 A · 2 B · 3 A区 遺構全体図 (1/300)	11	第39図 溝1出土遺物⑮ (1/2 · 1/3)	41
第6図 3 B · A · B区遺構全体図 (1/300)	12	第40図 溝2 (1/60)	41
第7図 竪穴住居1 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	13	第41図 溝2出土遺物① (1/4)	42
第8図 竪穴住居2 (1/60)	13	第42図 溝2出土遺物② (1/4)	43
第9図 竪穴住居3 (1/60)	14	第43図 溝3 (1/60)	43
第10図 竪穴住居4 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	15	第44図 溝3出土遺物 (1/3 · 1/4)	44
第11図 竪穴住居5 (1/60)	16	第45図 溝4 (1/60)	44
第12図 竪穴住居6 (1/60) · 出土遺物 (1/3 · 1/4)	17	第46図 溝4出土遺物① (1/4)	45
第13図 竪穴住居7 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	19	第47図 溝4出土遺物② (1/4)	46
第14図 竪穴住居8 (1/60)	19	第48図 溝5 · 6 (1/60)	47
第15図 竪穴住居8出土遺物 (1/4)	20	第49図 溝7 (1/60)	47
第16図 竪穴住居9 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	21	第50図 溝8 (1/60) · 出土遺物① (1/4)	47
第17図 竪穴住居10 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	21	第51図 溝8出土遺物② (1/4)	48
第18図 竪穴住居11 (1/60)	22	第52図 溝8出土遺物③ (1/4)	49
第19図 竪穴住居12 (1/60)	22	第53図 溝9 · 10 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	50
第20図 竪穴住居13 (1/60)	23	第54図 溝11 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	51
第21図 竪穴住居13出土遺物 (1/4)	24	第55図 遺構に伴わない遺物① (1/4)	52
第22図 竪穴住居14 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	25	第56図 遺構に伴わない遺物② (1/4)	53
第23図 炉1 · 土坑1 (1/30)	25	第57図 挖立柱建物1 (1/60)	54
第24図 溝1 (1/60)	26	第58図 炉2 (1/30)	55
第25図 溝1出土遺物① (1/4)	27	第59図 土坑2 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	55
第26図 溝1出土遺物② (1/4)	28	第60図 土坑3 (1/30)	56
第27図 溝1出土遺物③ (1/4)	29	第61図 溝12 (1/60)	56
第28図 溝1出土遺物④ (1/4)	30	第62図 溝13 (1/60)	56
第29図 溝1出土遺物⑤ (1/4)	31	第63図 溝14 (1/60) · 出土遺物 (1/3 · 1/4)	56
第30図 溝1出土遺物⑥ (1/4)	32	第64図 溝15 (1/60)	57
第31図 溝1出土遺物⑦ (1/4)	33	第65図 溝16 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	57
第32図 溝1出土遺物⑧ (1/4)	34	第66図 溝17 (1/60)	57
第33図 溝1出土遺物⑨ (1/4)	35	第67図 溝18 (1/60)	57
第34図 溝1出土遺物⑩ (1/4)	36	第68図 溝19 · 20 (1/60) · 溝20出土遺物 (1/4)	57
		第69図 遺構に伴わない遺物③ (1/3 · 1/4)	58

卷頭図版目次

図版目次

図版 1	溝 1 出土遺物 3
1 穫穴住居 3 (東から)	図版 8
2 穫穴住居 5 (南から)	溝 1 出土遺物 4
3 穫穴住居 6 (南から)	図版 9
図版 2	溝 1 出土遺物 5
1 穫穴住居 7 (南から)	図版 10
2 穫穴住居 8 (南から)	溝 1 出土遺物 6
3 穫穴住居 10 (北西から)	図版 11
図版 3	溝 1 出土遺物 7
1 穫穴住居 11 (西から)	図版 12
2 穫穴住居 11 中央穴断面 (南から)	溝 1 出土遺物 8
3 穫穴住居 13 (西から)	図版 13
図版 4	溝 1 出土遺物 9
1 溝 1 遺物出土状況 (南から)	図版 14
2 溝 2 遺物出土状況 (北西から)	溝 2 出土遺物
3 掘立柱建物 1 (南から)	図版 15
図版 5	溝 2・4・8 出土遺物
空穴住居 4・6・8・13 出土遺物	図版 16
図版 6	遺構に伴わない遺物 1
溝 1 出土遺物 1	図版 17
図版 7	遺構に伴わない遺物 2、土製品・石器・鉄器
溝 1 出土遺物 2	

表 目 次

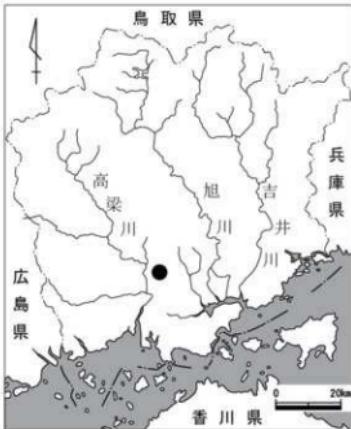
表 1 文化財保護法に基づく提出書類一覧	8	表 3 新旧遺構対照表	63
表 2 遺構一覧表	62	表 4 遺物観察表	63

第1章 地理的・歴史的環境

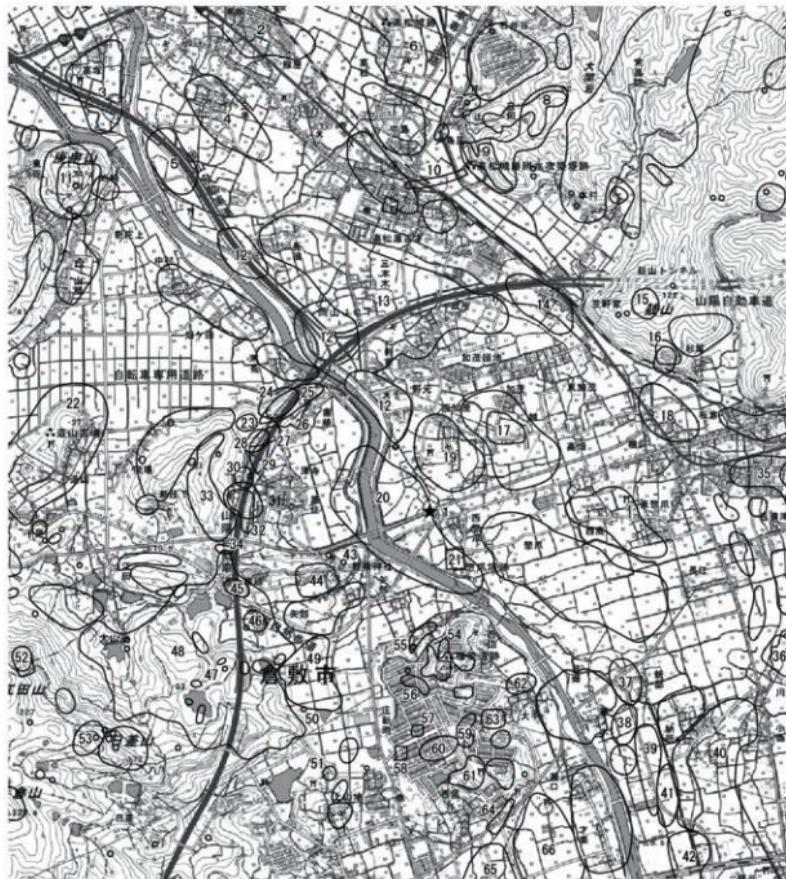
西加茂遺跡（第2図1、以下同図番号）は岡山市北区加茂（旧岡山市加茂）に所在する。行政的には、岡山市北区の西端に当たる高松地域に属し、倉敷市矢部と接している。地勢的には、西方の日差山山塊、東方の吉備中山山塊に挟まれた足守川左岸の沖積平野に位置する。足守川は箇ヶ瀬川水系の最大支川であり、吉備高原の黒嶺（岳）南麓に当たる岡山市北区河原・間倉、加賀郡吉備中央町黒山に源をもつ。流路は北から浮田川・大溪川・日近川等と合流し、谷底平野を形成しながら瀬戸内丘陵を南流する。平野部に入ると、鬼城山・経山山塊に源を発する血吸川・砂川や総社平野の南縁を巡る前川と合流して流域を広げる。本遺跡周辺は自然堤防と後背湿地で形成された同川の氾濫原であったと推定され、多くの集落がこの自然堤防（微高地）上に営まれたと考えられる。その後、流路を南東方向に変えて下流域に向かうと、総社市井尻野の高梁川に設けられた湛井堰から取水する湛井十二ヶ郷用水の灌漑地域となる。最下流では備前国と備中国を東西に分かつ境目川と合流し、足守川自体は岡山市南区古新田地先で箇ヶ瀬川に吸収され、最終的に児島湖に注ぐ。ただし、中世末頃までは、岡山市北区庭瀬・撫川周辺で本土と児島を隔てていた内海（吉備穴海）に通じていたと推定される。

本遺跡の周辺において、最も古い生活の痕跡は旧石器時代に遡る。矢部堀越遺跡（45）では角錐状石器が、雲山遺跡（29）や甫崎天神山遺跡（25）ではナイフ形石器が、吉備津杉尾西遺跡（16）ではナイフ形石器や角錐状石器が出土している。また、上東遺跡（65）ではサヌカイト製の石核がみつかっている。縄文時代では、伊能軒遺跡（49）で草創期の有茎尖頭器が出土し、矢部奥田遺跡（46）や若宮神社東遺跡（51）から早期の押型文土器が出土している。定住の痕跡が明らかになるのは中期後半以降で、中期～後期を主体とする黒住遺跡（27）、中期後半～後期前半を主体とする矢部奥田遺跡・矢部貝塚（46）、後期後半～晩期前半を主体とする甫崎天神山遺跡が認められる。また、吉野口遺跡（35）では竪穴住居や垣状構造からなる晩期中葉の集落が確認されており、上東中島遺跡（64）では、晩期末の土器やサヌカイト石器、剥片が多く出土し、周辺に集落の存在が推定される。

弥生時代には、沖積平野の安定した微高地で定住が認められ、集落が形成され始める。本遺跡周辺の前期の集落は不明瞭であるが、遺物が出土した遺跡として、津寺遺跡（12）、新邸遺跡（37）、川入遺跡（40）、上東遺跡がある。本格的な集落形成は中期以降であり、津寺遺跡・加茂政所遺跡・津寺三本木遺跡（13）、加茂遺跡・矢部南向遺跡（20）、上東遺跡で確認されている。中期末には、雲山遺跡・後池内遺跡（30）、前池内遺跡（32）、矢部堀越遺跡・矢部奥田遺跡・若宮神社東遺跡の



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



1 西加茂遺跡	2 小山馬禰遺跡	3 高原遺跡	4 三手遺跡
5 三手（向原）遺跡	6 福中高松城跡	7 御崎山跡	8 石井山跡
10 高松城水攻め築堤跡	11 庚申山跡	12 津寺遺跡	9 蛙ヶ鼻跡
13 加茂古道跡・津寺三木本道跡	14 高松原古才道跡・立田道跡	15 鶴山城跡	
16 吉備津村尾西道跡	17 加茂城跡	18 吉備津奥田道跡	19 幸利神社遺跡
20 加茂道跡・矢部南向道跡	21 猿爪塚跡	22 造山古墳群	23 雲山鳥打1～3号墓・雲山鳥打道跡
24 雨崎天神山古墳群	25 雨崎天神山道跡	26 雨崎天神山城跡	27 黒住道跡
28 雲山古墳群	29 雲山道跡	30 後池内古墳・後池内道跡	31 前池内古墳群
32 前池内道跡	33 黒住山古墳群	34 鷺境埴輪群	35 吉野口道跡・吉備津田潤後道跡
36 伝賀陽氏船跡	37 新郡道跡・新郡貝塚	38 鷺ノ溝道跡	39 佐生田道跡
41 拱無堂道跡	42 中瀧川道跡	43 鶯喰神社道跡	44 矢部道跡
46 矢部奥田道跡・矢部貝塚	47 矢部大塙古墳	48 矢部古墳群	45 矢部堀越道跡
51 若宮神社東道跡	52 鷹巣城跡	53 日差山城跡	49 伊能軒道跡
55 向山17号墳	56 半依古墳群	57 王墓山女岩道跡	50 邑庭池上古墳
59 泰井西古墳群	60 大池上古墳群	61 真宮古墳群	54 橋築道跡
63 日烟魔寺（赤井堂屋敷）	64 上東中嶋道跡	65 上來道跡	58 王墓山辻山田道跡
			62 岩倉道跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

ように丘陵上や丘陵裾部にも小規模集落が認められる。遺跡数が飛躍的に増加するのは後期以降で、集落規模も大型化する。平野部の集落としては、高塚遺跡（3）や津寺遺跡、加茂政所遺跡、加茂遺跡があり、拠点的な集落が形成される。これらの集落をみると、高塚遺跡では銅鐸や貨泉、加茂政所遺跡では銅鏡、矢部南向遺跡では小銅鐸や銅鏡の青銅器が出土している。また、加茂遺跡では朱に閼わる遺物が出土しており、津寺一軒屋遺跡（13）では県内最古の可能性がある鍛冶遺構がみつかっていることから、他地域の集落と比較して文化的優位が認められる。なお、上東遺跡では波止場状遺構、もしくは祭場と評価される突堤状遺構が発見されている。一方、足守川右岸には、甫崎天神山遺跡や王墓山辻山田遺跡（58）の集団墓や、雲山鳥打1～3号墓（23）や鯉喰神社遺跡（43）、楯築遺跡（54）、王墓山女房岩遺跡（57）の墳丘墓が、平野を取り巻く丘陵上に集中して築かれる。これらの墳丘墓からは特殊器台・特殊壺が出土し、楯築遺跡と鯉喰神社遺跡では弧帶石もみつかっている。

古墳時代に入っても、弥生時代後期の拠点的な集落は継続し、津寺遺跡ではさらに規模が拡大する。出土遺物量も増加し、特に、非在地系土器や豊富な鉄器の出土から他地域との交流拠点としての性格が窺える。ただし、こうした集落も前期後半には縮小、もしくは廃絶していく。前期古墳としては、足守川右岸域で郷境墳墓群（34）や矢部大塹古墳（47）がみられ、日差山の丘陵北東部の矢部古墳群（48）の矢部42号墳では特殊器台形埴輪が出土した。その後、足守川流域では、三須丘陵と黒住丘陵に挟まれた広い谷の中央から突き出した低丘陵上に吉備最大の造山古墳（22）が築造される。この造山古墳群の造山第1号古墳（柳山古墳）では馬形帶鉤が出土したと伝わり、造山第5号古墳（千足古墳）の石室内では直弧文石障が確認されている。古墳時代中期に入り、津寺遺跡は著しく縮小したが、高塚遺跡はこの段階に再拡大する。同遺跡から出土した韓式系土器や初期須恵器、朝鮮半島系の特徴を持つ鐵鎌等から渡来人との関わりが推測され、集落規模の拡大との関連が示唆される。中撫川遺跡（42）でも陶質土器が出土している。中期古墳では、倉敷市庄新町に所在する王墓山丘陵上に築かれた法伝山古墳や眉庇付冑・短甲埴輪が出土した西の平古墳がある。

古墳時代後期には、王墓山丘陵で群集墳が展開する。向山古墳群は丘陵北東部に17基所在し、向山17号墳（55）では人骨片・須恵器・土師器・金環・鐵鎌が出土している。また、大池上古墳群（60）は丘陵南西斜面に10基、真宮古墳群（61）は丘陵中央部の尾根上南端に11基所在する。半俵古墳群（56）は丘陵中央部尾根上に4基所在し、半俵3号墳では円筒埴輪棺が出土している。特に、赤井西古墳群（59）の王墓山古墳（赤井西1号墳）は貝殻石灰岩を石材とした家形石棺が出土し、四仏四獸鏡や金銅装馬具の副葬が認められた。一方、日差山から派生する尾根の末端には琵琶池上古墳（50）が築かれ、横穴式石室から少なくとも13体分の人骨が確認されている。また、黒住山古墳群（33）の黒住山17号墳（高坪古墳）では、須恵器・鐵鎌・鐵釘・耳環・玉類・鐵滓が出土している。

7世紀前半には、二段築成の方墳で外護列石が巡る二子14号墳が倉敷市二子に築造されている。また、前池内古墳群（31）の前池内5号墳では、つまみ部に「官」の逆字が押印された須恵器の杯蓋が出土しており、有力首長層が官人として組み込まれていく様子が窺える。集落では、高塚遺跡で規模の縮小が認められる一方、津寺遺跡、加茂政所遺跡、矢部南向遺跡、川入遺跡や高松原古才遺跡・立田遺跡（14）は規模の拡大がみられる。津寺遺跡、加茂政所遺跡では、奈良県奥山久米寺跡との同範関係が注目される飛鳥期の軒丸瓦が出土している。特に、津寺遺跡は鍛冶関連の遺構や遺物が確認され、鍛冶集落としても位置付けられる。さらに、同遺跡では水利管理や集落保護を目的とした大規模な護岸施設が築かれている。7世紀後半には、王墓山丘陵の東麓に日畠廐寺（63）が築かれ、倉敷市

二子に所在する二子御堂奥古窯跡群で焼成された瓦が使用された。

古代に入ると、本遺跡周辺では、惣爪庵寺（21）が建立され、塔跡の心礎や奈良時代の瓦が確認されている。また、旧山陽道の「津幌駅家」の可能性がある矢部遺跡（44）も所在する。津寺遺跡では南北124m、東西94mの範囲を巡る二重の区画溝内で建物群が発見されており、備中国都宇郡衙の周辺部と推定されている。本遺跡と近接する幸利神社遺跡（19）はその遺跡地と考えられる。川入遺跡では平城宮式瓦の出土から公的港湾施設の可能性が指摘されている。この他、吉備津田淵後遺跡（35）では平安時代後半から鎌倉時代の瓦類が出土し、近辺に寺院が存在していた可能性が考えられている。集落はあまり解明されていないが、吉野口遺跡、矢部南向遺跡で建物が認められ、吉備津奥田遺跡（18）では奈良～平安時代の羽口・鉄滓が出土している。

中世に入ると、高塚遺跡、三手遺跡（4）、三手（向原）遺跡（5）、津寺遺跡、矢部南向遺跡、吉野口遺跡がみつかっている。三手遺跡や津寺遺跡では、溝で区画された屋敷地内に建物群がみられ、輸入陶磁器を副葬する土坑墓も確認されることから、やや上位の農民層の集落と考えられる。三手（向原）遺跡では、窓状構造や窯道具がみつかり、集落内の土師器生産が推測される。伝賀陽氏館跡（36）は、吉備津神社の神官を務めた在地豪族の賀陽氏の館跡と評価されている。戦国時代になると、天正10（1582）年の備中高松城水攻めに関わる城館跡も少なくない。備中高松城跡（6）や高松城水攻め築堤跡（10）では発掘調査が行われ、城の存続期間や築堤の構造等の知見が得られている。また、石井山陣跡（8）、蛙ヶ鼻陣跡（9）は羽柴秀吉、鼓山城跡（15）は羽柴秀吉・秀長、御崎山陣跡（7）は堀尾茂助が陣を敷いたとされる。一方、加茂城跡（17）、日畠城跡（62）がいわゆる「境目七城」に当たり、庚中山陣跡（11）、甫崎天神山城跡（26）、鷹巣城跡（52）、日差山城跡（53）は毛利方の陣城と伝わる。

参考資料

- 「王墓山遺跡群」倉敷市教育委員会 1974
- 「足守川加茂A遺跡 足守川加茂B遺跡 足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 岡山県教育委員会 1995
- 『新修倉敷市史』第一巻考古 倉敷市史研究会 1996
- 「吉野口遺跡」岡山市教育委員会 1997
- 「津寺遺跡5」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 岡山県教育委員会 1998
- 「高塚遺跡 三手遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 岡山県教育委員会 2000
- 「三手向原遺跡」岡山市教育委員会 2001
- 『改訂岡山県遺跡地図』（第6分冊岡山地区）岡山県教育委員会 2003
- 「日畠庵寺」「倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告』第11集 倉敷市教育委員会 2005
- 「佐生田遺跡2 中撫川遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』202 岡山県教育委員会 2006
- 「中撫川遺跡3」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』220 岡山県教育委員会 2009
- 「津寺（加茂小・体育館）遺跡」岡山市教育委員会 2009
- 「上東中嶋遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』226 岡山県教育委員会 2010
- 『岡山県中世城館跡総合調査報告書 第2冊－備中編－』岡山県教育委員会 2020

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

西加茂遺跡は岡山市北区加茂（旧岡山市加茂）に所在する。調査対象地は、現在の県道270号清音真金線と県道73号（主要地方道）箕島高松線の重用区間で、新黒住橋から約300m北東に位置する交差点付近（第2・3図）に当たり、現在もその周辺は、発掘当時とあまり変わらない田園風景が広がっている。本遺跡の西方約200～300mには、足守川河川改修工事に伴い発掘調査を実施した加茂遺跡・矢部南向遺跡（足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡）が位置しており、その成果から、この周辺の地表下には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての極めて高い遺構密度をもつ集落遺跡が存在していることが明らかになっている。

発掘調査に至る端緒となったのは、昭和58（1983）年4月22日に、一般県道270号清音真金線の道路改良工事に伴う側溝掘削工事において、岡山県教育委員会文化課（当時）職員が工事立会中に遺構を発見したことによる。側溝の掘り方は幅4m、深さ1.4mを測る計画であったことから、確認した遺構は少なかったものの、工区が微高地部分にかかる掘削作業であったため、一旦工事を中止させる判断をした。そして、側溝部分に該当する箇所の発掘調査を実施して、記録保存の措置をとることとした。4月23日には岡山県岡山地方振興局（当時）と協議し、T1～7の試掘調査（第4図）を実施した後、発掘調査を実施することになった。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は昭和58年5月12日～6月29日と昭和59（1984）年2月6日～2月29日の2回に分けて実施し、各調査には、岡山県教育委員会文化課職員2名が担当した。調査区の設定は、複雑な形状を呈する道路の側溝部分であったため、対象地を大別・細分して対応した（第3図）。

前期の調査は対象地の北側であり、対象面積は1,000m²であった。調査に当たっては、これらを1・2・3区と大別し、さらに、各区をA・B、及びC区に細分した調査区を設定した。試掘調査の成果を基に、表土・造成土・近世以降の水田層等を重機で掘削した後、中世包含層から人力で掘削を行いながら遺構の検出・記録作業と遺物の取り上げを進めた。作業に当たっては、道路工事と農業用水への配慮に腐心したが、計画通り終了した。面積的に限られた範囲であったが、弥生時代～中世の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・炉・土坑・溝の遺構と同時期の遺物を確認することができた（第5・6図）。

後期の調査は主に対象地の南側と北側の一部であり、対象面積は900m²であった。調査に当たっては、これらを東から順にA・B・C区と大別した調査区を設定した。作業は前期と同様に重機と人力により掘り下げを進めた。その結果、弥生時代～中世の竪穴住居・炉・土坑・溝の遺構を検出し、同期の遺物が出土した（第6図）。なお、C区では、東西方向に伸びる旧山陽道の一端を認めることができたが、後世の搅乱により大部分が消滅していた。

第3節 報告書作成の経過

報告書の作成は、令和2年4月1日から令和4年3月31日にかけて、岡山県古代吉備文化財センター職員1名が担当した。遺物は復元・実測・浄書作業を行い、一部は写真撮影を実施した。対象遺物数は、整理箱（コンテナ）に換算して114箱であった。遺構は発掘調査で記録した実測図の浄書作業を行い、あわせて掲載用写真の選別を行った。浄書作業については、遺物実測図を手書きトレース、遺構実測図等をデジタルトレースで行った。なお、発掘調査後に遺物の洗浄・注記・復元・実測作業の一部に着手しており、平成20年度内にも一部実施していた。こうした先行作業の成果については、可能な限り活用した。

遺構・遺物の浄書作業が終了次第、削付作業を行い、原稿執筆・編集作業、及び遺物等の収納を進めた。原稿執筆においては、「岡山県埋蔵文化財報告14」、「岡山県埋蔵文化財報告15」、及び「埋蔵文化財発掘調査実績報告」の記載を参考にした。

本書では土器・瓦340点、土製品3点、石器5点、鉄器2点、遺構は竪穴住居14軒、掘立柱建物2棟、井戸1基、炉2基、土坑3基、溝20条を掲載している。なお、調査区の区割り・表記については、発掘調査時のものをそのまま使用した。

第4節 日誌抄

発掘調査		報告書作成	
昭和58年		令和2年	
5月12日（木）	発掘調査開始	4月1日（水）	報告書作成開始
6月29日（水）	発掘調査終了	令和4年	
昭和59年		3月31日（木）	報告書作成終了
2月6日（月）	発掘調査開始		
2月29日（水）	発掘調査終了		

第5節 発掘調査及び報告書作成の体制

昭和58年度		課長代理（芸術文化係長事務取扱）	
岡山県教育委員会		吉本 唯弘	
教育長	佐藤 章一（～7月15日）	文化財主幹	高原 健郎
	宮地 輝夫（7月16日～）	課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）	
岡山県教育庁		河本 清	
教育次長	石原 義治（～7月15日）	主任	遠藤 勇次
	肥塚 稔（8月1日～）	文化財保護主査	松本 和男（調査担当）
文化課			二宮 治夫（調査担当）
課長	早田 憲治	文化財保護主事	浅倉 秀昭（調査担当）
課長代理	橋本 泰夫		中野 雅美（調査担当）

令和2年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 高見 英樹

文化財課

課長 小林 伸明

参事(文化財保存・活用担当)

大橋 雅也

総括参事(埋蔵文化財班長)

柴田 英樹

主幹 河合 忍

主事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 小見山 晃

次長(総務課長事務取扱)

佐々木雅之(～10月14日)

参事(文化財保護担当)

龜山 行雄

<総務課>

課長 甲元 秀和(10月15日～)

総括副参事(総務班長)

甲元 秀和(～10月14日)

総括主任(総務班長)

多賀 克仁(10月15日～)

主任 多賀 克仁(～10月14日)

主任 井上 裕子

<調査第二課>

課長 澤山 孝之(整理担当)

令和3年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 池永 亘

文化財課

課長 小林 伸明

副参事(文化財保存・活用担当)

尾上 元規

総括主幹(埋蔵文化財班長)

河合 忍

主幹 松尾 佳子

主事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長(総務課長事務取扱)

浅野 勝弘

参事(文化財保護担当)

龜山 行雄

<総務課>

総括主幹(総務班長) 多賀 克仁

主任 井上 裕子

<調査第二課>

課長 澤山 孝之(整理担当)

整理協力者

石材鑑定 鍵本茂之(岡山大学)

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘届（旧法98条の2）

番号	岡山県		種類及び名称	所在地	面積 (m ²)	目的	主体者	担当者	期間	文化庁	
	文書番号	日付								文書番号	日付
1	849号	58.5.6	集落・官衙 推定遺跡 西加茂遺跡	岡山市加茂 西加茂	1,000	一般県道清音 ～真金線の側 溝建設工事に伴 う記録保存	県教委教育長 佐藤章一 岡山市内山下 2-4-6	松本和男 浅倉秀昭	58.5.12～ 58.6.30	58委保記第 2-1596号	58.7.21

埋蔵文化財発掘通知（旧法98条の2）

番号	岡山県		種類及び名称	所在地	面積 (m ²)	目的	主体者	担当者	期間	文化庁	
	文書番号	日付								文書番号	日付
1	5332号	59.2.8	集落・官衙 推定遺跡 西加茂遺跡	岡山市加茂 西加茂	900	一般県道清音 ～真金線側溝 建設工事に伴 う発掘調査	県教委教育長 宮地暢夫 岡山市内山下 2-4-6	二宮治夫 中野雅美	59.1.26～ 59.2.29	59委保記第 2-603号	59.4.19

埋蔵文化財の鑑査（旧法61条、旧法100条）

番号	岡山県		物件名	出土土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
	文書番号	日付						
1	教文理 第3986号	58.11.2	土器（弥生土器、土師器、須恵器他）整理箱100箱、平瓦2点、鐵器（鐵鎌）4点	岡山市加茂 西加茂	58.5.12～ 58.6.29	岡山県教育委員会 教育長 宮地暢夫	岡山市内山下2-4-6 岡山県知事 長野士郎	岡山県教育 庁文化課 分室

※文化財保護法の条文は、発掘調査当時

参考資料

浅倉秀昭「5 西加茂遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14 岡山県教育委員会 1984

二宮治夫「6 西加茂遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』15 岡山県教育委員会 1985

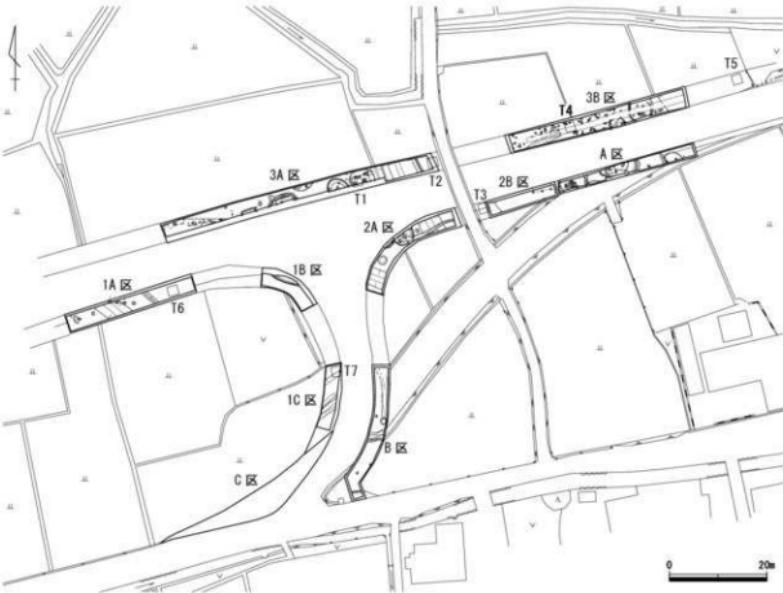
第3章 発掘調査の成果

第1節 遺跡の概要

西加茂遺跡は足守川左岸に位置する。調査前は水田が広がっており、地表の標高は約3mであった。同遺跡の西方約200~300mには足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡が所在している。この3遺跡では発掘調査により、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする竪穴住居を220軒確認しており、集落遺跡として極めて高い遺構密度を示している。

現在、「改訂 岡山県遺跡地図」(第6分冊 岡山地区)・「おかやま全県統合型GIS(地理情報システム)」では、この3遺跡を岡山市北区加茂から倉敷市矢部にかけて広がる「加茂遺跡・矢部南向遺跡」として扱っており、西加茂遺跡もこの一角を占めるようなかたちとなっている(第2図)。この「加茂遺跡・矢部南向遺跡」の範囲にはいくつかの微高地が存在し、当時の吉備の中核を構成するこうした集落が営まれたと推測される。

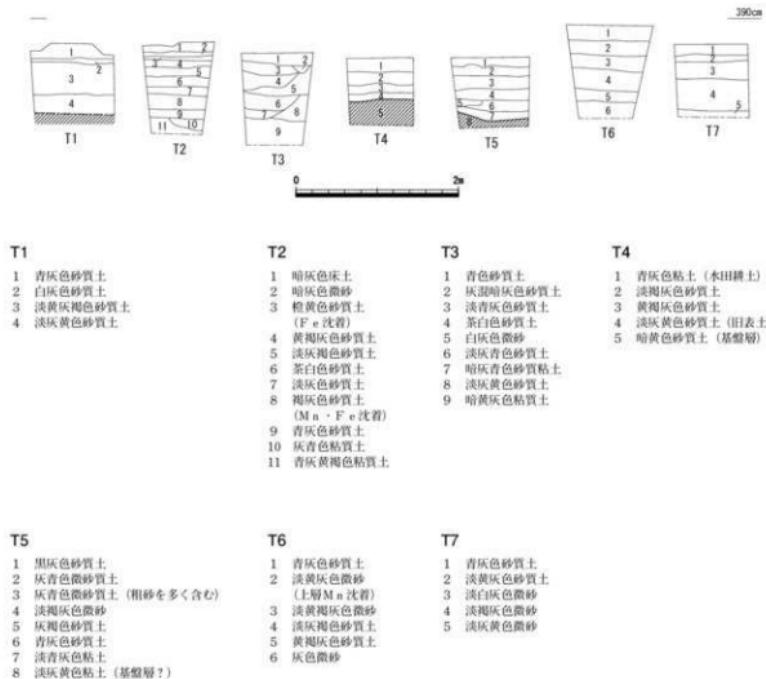
西加茂遺跡は第2章第2節で述べたように、昭和58年度に調査が2度行われている。その結果、古



第3図 調査区全体図 (1/1,000)

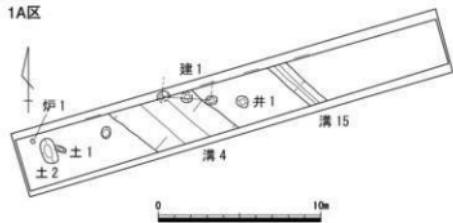
墳時代前期以前の遺構として、竪穴住居14軒（竪穴住居1～14）、炉1基（炉1）、土坑1基（土坑1）、溝11条（溝1～11）を検出している。また、古墳時代中期以降の遺構としては、掘立柱建物2棟（掘立柱建物1・2）、井戸1基（井戸1）、炉1基（炉2）、土坑2基（土坑2・3）、溝9条（溝12～20）を検出している。ただし、調査対象地が主に道路側溝箇所であったため、おそらく、同遺跡の実態は今回の遺構数に表せていないほどの遺構密度であったと推定する。

古墳時代前期以前の各遺構の状況をみると、竪穴住居は2A・3A・3B、及びA区で確認している。多くの重複や切り合い関係が認められており、時期は新旧の土器が混在する可能性があるため特定は難しいが、概ね弥・後・Ⅲから古・前・Iにかけてである。平面形態は推定を含めて、円形（不整円形含む）11軒（竪穴住居3～5・7～14）、隅丸方形1軒（竪穴住居6）、方形2軒（竪穴住居1・2）である。また、柱穴は複数軒で検出しているが、主柱穴の関係は判然としなかった。この他の床面施設をみると、中央穴・土坑は5軒（竪穴住居5・6・9・11・13）、土坑（ポケット）は3軒（竪穴住居4・6・8）で確認でき、高床部が伴うもの（竪穴住居13）と焼土面（竪穴住居7）が伴うものを各1軒確認している。炉と土坑は1A区で各1基を検出しているが、性格は不明である。



第4図 T 1～7断面図 (1/60)

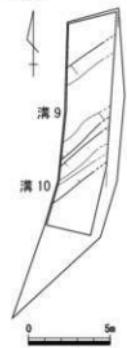
1A区



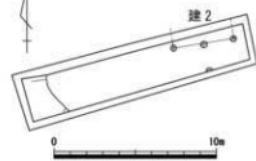
1B区



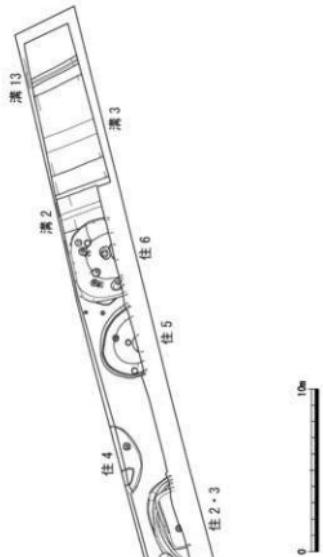
1C区



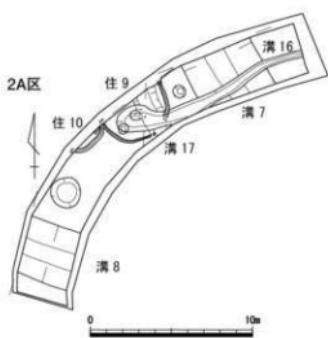
2B区



溝13



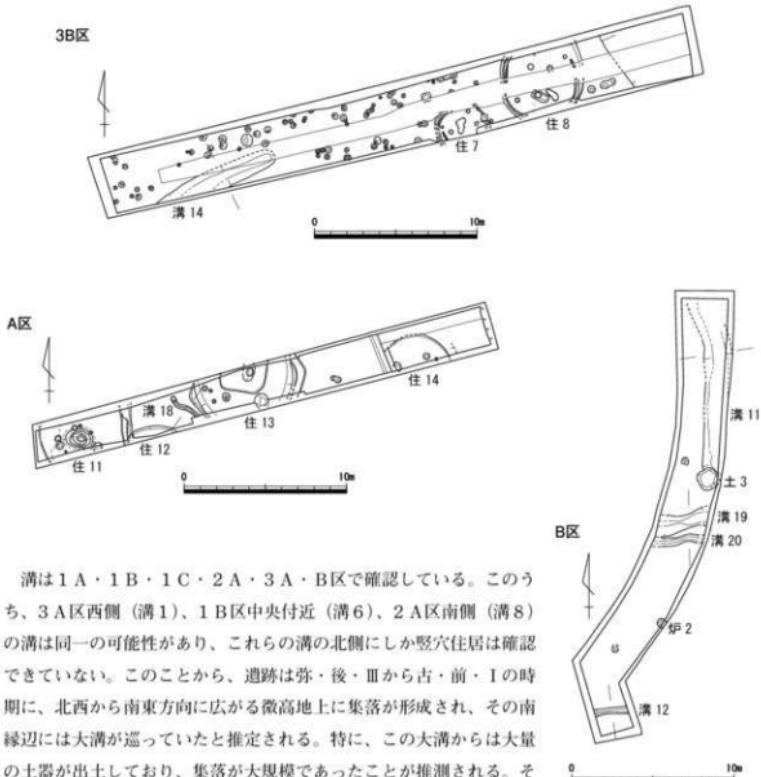
2A区



3A区



第5図 1A・1B・1C・2A・2B・3A区遺構全体図 (1/300)



溝は1A・1B・1C・2A・3A・B区で確認している。このうち、3A区西側（溝1）、1B区中央付近（溝6）、2A区南側（溝8）の溝は同一の可能性があり、これらの溝の北側にしか竪穴住居は確認できていない。のことから、遺跡は弥・後・Ⅲから古・前・Iの時期に、北西から南東方向に広がる微高地に集落が形成され、その南縁辺には大溝が巡っていたと推定される。特に、この大溝からは大量の土器が出土しており、集落が大規模であったことが推測される。そして、こうした遺跡の盛期は、最も近接する位置にある足守川加茂B遺跡の集落相と類似している。出土遺物をみると、壺8や鐵鎌M1（竪穴住居6）は、当地の集落の性格を考える上で重要といえる。

古墳時代中期以降の各遺構の状況をみると、前代と比較して遺構密度は希薄であるが、中世に至るまで掘立柱建物・井戸・炉・溝が検出され、一定の人の活動が窺える。掘立柱建物は1A・2B区で各1棟確認している。梁の柱間寸法から同一規格とも推察できるが、調査所見によれば、前者（掘立柱建物1）が奈良時代、後者（掘立柱建物2）が中世であるとする。井戸は1A区で1基、炉はB区で1基、土坑は1A区（土坑2）とB区（土坑3）で各1基検出しているが、性格等は不明である。溝は1A・2A・3A・3B・A・B区で確認している。ただし、屋敷地を区画するような明確な溝の存在は判然としない。一方で、2A区の溝（溝16）端部には土坑状の窪みが認められ、底面から獸骨が出土している。集落内に導水した施設の可能性も考えられる。出土遺物をみると、奈良時代の軒平瓦339が注目され、都宇都の官衙（津寺遺跡）や駅家（矢部遺跡）等の公的施設整備に伴う、本遺跡周辺の瓦葺建物の本格的な導入を物語る資料として示唆に富む。

第6図 3B・A・B区
遺構全体図 (1/300)

第2節 古墳時代前期以前の遺構・遺物

竪穴住居

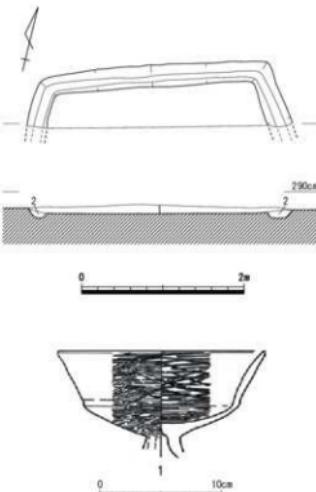
竪穴住居1 (第5・7図)

3 A区中央付近に位置する。残存状況は調査区境のため遺構南側の約8割近くが欠損している。なお、遺構埋土の層序は認められたが、土色・土質についての詳細は不明である。平面形は方形と推定され、規模は長軸280cm、床面標高は263cmを測る。床面では中央穴・土坑、土坑（ポケット）、焼土面、高床部、柱穴は検出できなかったが、壁体溝は確認できた。

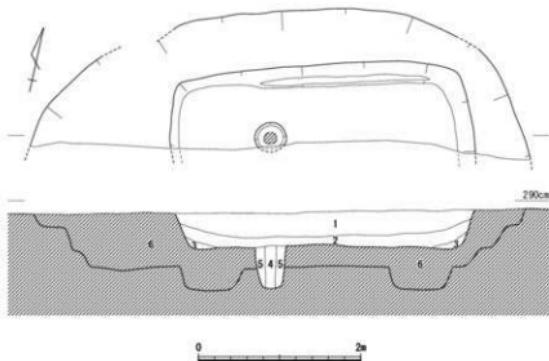
遺物は弥生土器の高杯1の他、壺または甕・鉢・製塙土器の破片等が出土している。高杯1は杯部下半から逆ハ字状に開く口縁部をもち、外面はヨコ方向の丁寧なヘラミガキを施す。また、精製粘土を使用していると思われる。時期は弥・後・IVと考えられる。

竪穴住居2 (第5・8図)

3 A区中央付近に位置し、竪穴住居1の東約2mに当たる。残存状況は調査区境のため遺構南側の約6割近くが欠損している。なお、遺構埋土の層序は認められたが、土色・土質についての詳細は不明である。調査時の認識では、竪穴住居3が廃棄された後に第6層に対



第7図 竪穴住居1 (1/60)・
出土遺物 (1/4)



第8図 竪穴住居2 (1/60)

応する埋土を基盤として、ほぼ同じ場所に一回り小さい竪穴住居2を作ったと推定している。平面形は方形で、規模は長軸345cm、床面標高は236cmを測る。床面では中央穴・土坑、土坑（ポケット）、焼土面、高床部は検出できなかったが、壁体溝は確認できた。また、柱穴は1本検出した。遺物は弥生土器の壺または甕・高杯・鉢の破片等が出土している。時期は弥・後・IVと推定される。

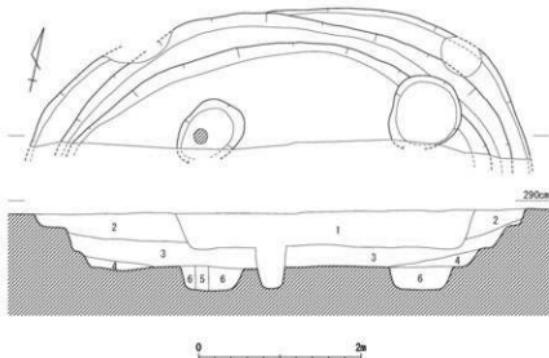
竪穴住居3（第5・9図、図版1-1）

3 A区中央付近に位置し、竪穴住居1の東約2mに当たり、先述した竪穴住居2と重複する。残存状況は調査区境のため造構南側の約7割近くが欠損している。また、調査時の認識では、平・断面の状況から複数回の建替を想定している。第1層が竪穴住居2、第2～6層がこの竪穴住居に関連する埋土と推察される。なお、造構埋土の層序は認められたが、土色・土質についての詳細は不明である。平面形は円形で、規模は直径610cm、床面積は29.2m²と推定される。床面標高は209cmを測る。床面では中央穴・土坑、土坑（ポケット）、焼土面、高床部は検出できなかったが、壁体溝は確認できた。また、柱穴は2本検出しているが、いずれも深さが浅いことから、築造初期の竪穴住居に伴うものと思われる。遺物は弥生土器の壺または甕・高杯・鉢の破片等が出土している。ただし、竪穴住居2の埋土から混入した遺物の可能性もある。時期は弥・後・III～IVと推定される。

竪穴住居4（第5・10図、図版5）

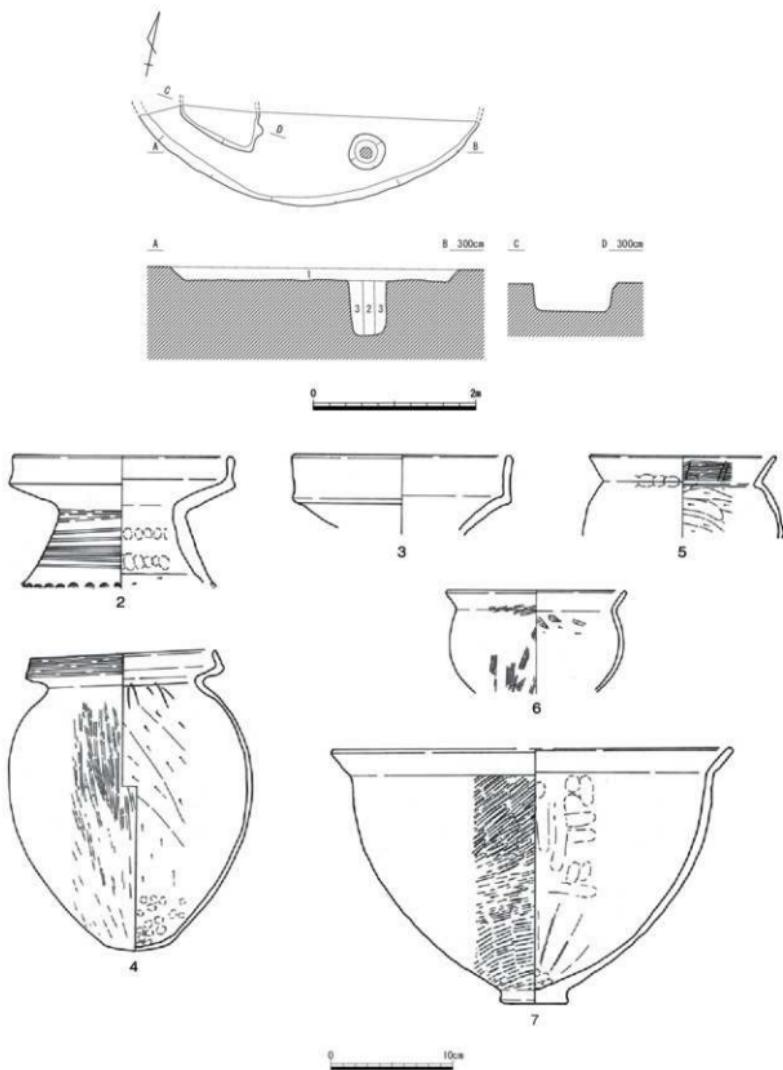
3 A区中央付近に位置し、竪穴住居2・3の北東約1mに当たる。残存状況は調査区境のため造構北側の約8割近くが欠損している。なお、造構埋土の層序は認められたが、土色・土質についての詳細は不明であった。平面形は円形で、規模は直径500cm、床面積は19.6m²と推定される。床面標高は263cmを測る。床面では中央穴・土坑、焼土面、高床部、壁体溝は検出できなかったが、土坑（ポケット）は確認できた。この平面形はほぼ長方形、断面形は箱型を呈し、規模は長軸約104cmと推定され、短軸約50cm以上、深さは35cmを測る。また、柱穴は1本検出している。

遺物は弥生土器の壺2・3、甕4・5、鉢6・7の他、高杯の破片等が出土している。このうち、壺2は内傾する頸部に沈線文9条と肩部に刺突文が認められる。壺3とともに上方に大きく立ち上がる二重口縁をもつ。甕4は口縁部に凹線文5条が認められ、底部は丸みをもつ。被熱痕跡とススがみ



第9図 竪穴住居3（1/60）

られ、また、ひずみが大きい。甕5は胴部から短く屈曲して外方に開く口縁部をもち、端部は丸く取れる。鉢6には被熱痕跡とススがみられる。鉢7は平底から大きく湾曲する胴部をもち、外面には左下がりのタキメが認められる。時期は弥・後・IVと考えられる。



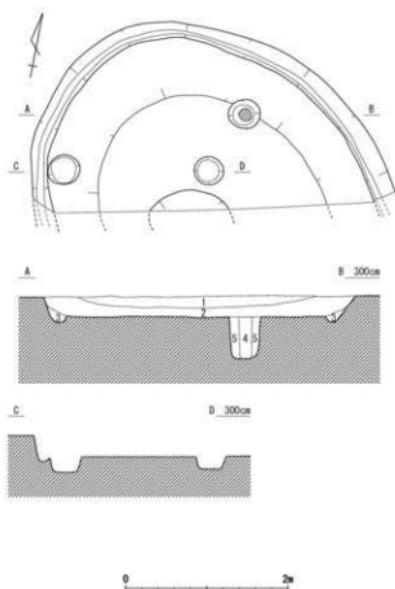
第10図 穂穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居5（第5・11図、図版1-2）

3A区中央付近に位置し、竪穴住居4の南東約3mに当たる。残存状況は調査区境のため遺構南側の約5割近くが欠損している。なお、遺構埋土の層序は認められたが、土色・土質についての詳細は不明であった。平面形は不整円形で、規模は直径410cm、床面積は13.2m²と推定される。床面標高は252cmを測る。床面では土坑（ポケット）、焼土面、高床部は検出できなかったが、楕円形の中央穴・土坑と壁体溝は確認できた。ただし、中央穴・土坑の規模は不明である。なお、床面の中央部がやや高くなっている。また、柱穴は3本検出しているが、柱痕跡を残す1本と他の2本では、深さが異なっている。遺物は確認できていないが、時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと推定される。

竪穴住居6（第5・12図、図版1-3・5・18）

3A区中央付近に位置し、竪穴住居5の東約1mに当たる。残存状況は調査区境のため遺構北・南側と合わせて約4割近くが欠損している。なお、遺構埋土の層序は認められたが、土色・土質についての詳細は不明であった。平面形は隅丸方形で、規模は長軸470cm、床面積は17.3m²と推定される。床面標高は230cmを測る。床面では中央穴・土坑が確認でき、平面形は楕円形、断面形は二段掘りの逆台形であり、規模は長軸80cm、短軸64cm、深さ54cmである。また、中央穴・土坑の南側にも浅い土坑状の窪みが認められる。さらに、土坑（ポケット）が確認でき、平面形は楕円形、断面形は浅い二段掘りの箱形で、規模は長軸70cm以上、短軸54cm、深さ35cmである。一方、焼土面、高床部や壁体溝は確認できなかった。柱穴は合計7本を検出している。

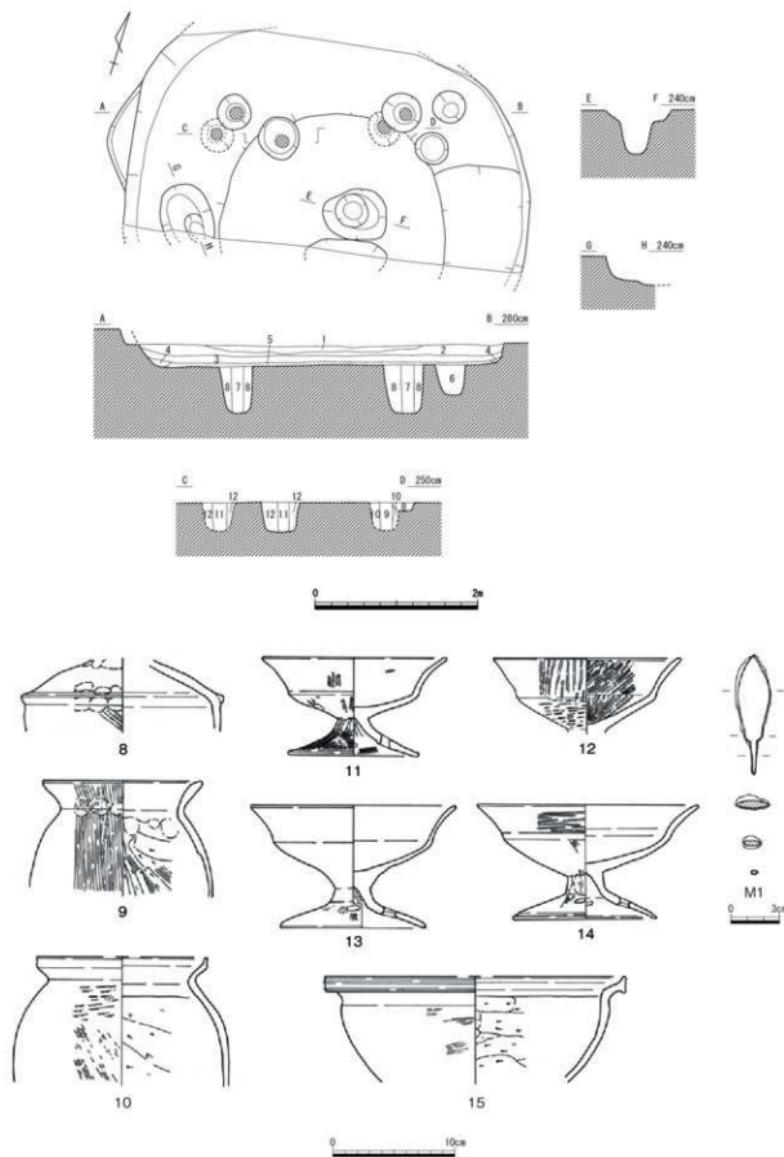


第11図 竪穴住居5（1/60）

遺物は弥生土器の壺8、甕9・10、高杯11～14、鉢15と柳葉形の鐵鎌M1の他、鐵鎌の一部と思われる鐵製品の破片が出土している。このうち、壺8は小形の特殊壺と思われ、胴部に刻み目を施した後、断面三角形の細い突帯を貼り付けている。突帯下の体部には平行斜線文またはハケメ状の痕跡がみられる。赤色顔料は認められない。甕9は胴部から短く湧曲して外方に開く口縁部をもつ。甕10は口縁部を上方に拡張させて、端部は引き上げている。高杯11～14は杯部下半から大きく外反して開く口縁部をもち、精製粘土を使用していると思われる。また、高杯11・13・14の脚部には円孔4個がみられる。なお、これらの高杯は同一柱穴内から出土している。鉢15にはススがみられる。時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと推定される。

竪穴住居7（第6・13図、図版2-1）

3B区中央付近に位置する。残存状況は調査区境のため遺構南側とトレンチ掘削のため遺構北側と合わせて約4割近くが欠損している。



第12図 穂穴住居6 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/4)

る。平面形は円形で、規模は直径280cm、床面積は6.2m²と推定される。床面標高は282cmを測る。床面では焼土面と壁体溝を確認したが、中央穴・土坑、土坑（ポケット）、高床部は検出できなかった。ただし、中央穴・土坑は推定箇所に擾乱がみられ、実態は不明である。柱穴は2本を検出している。

遺物は弥生土器の台付壺16、高杯17、鉢18・19の他、甕等が出土している。このうち、台付壺16と鉢18・19は精製粘土を使用していると思われる。高杯17は杯部下半から内傾する口縁部に凹線文5条が認められる。鉢18は胴部からやや内傾する口縁部をもつ。鉢19は平底で、外方に伸びる胴部から上方に立ち上がる口縁部をもつ。時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと推定される。

竪穴住居8（第6・14・15図、図版2-2・5）

3B区東側に位置し、竪穴住居7の北東約1.5mに当たる。残存状況は調査区境のため遺構南側とトレンチ掘削のため遺構北側と合わせて約3割近くが欠損している。平面形は円形で、規模は直径420cm、床面積は13.8m²と推定される。床面標高は230cmを測る。床面では中央穴・土坑、焼土面、高床部が確認できなかったが、土坑（ポケット）と壁体溝は検出した。この土坑（ポケット）の平面形は隅丸方形、断面形は二段掘りの逆台形であり、規模は長軸108cm、短軸57cm、深さ50cmである。この東側には不定形の窪みも認められる。柱穴は4本を検出している。

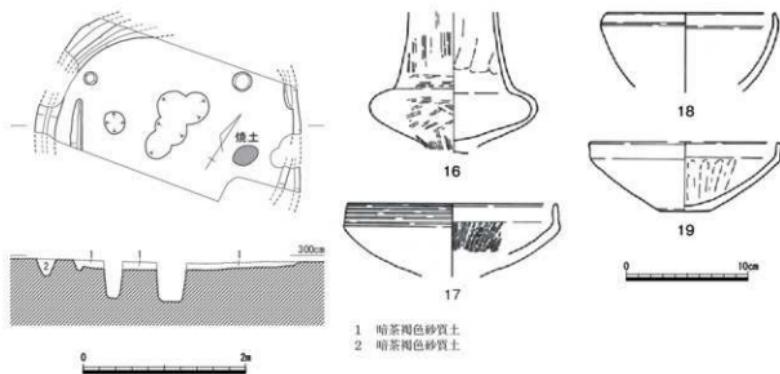
遺物は弥生土器の壺20・21、甕22～24、高杯25・26、鉢27、台付鉢28等が出土している。このうち、壺20は上方に立ち上がる二重口縁に凹線文が4条認められ、器面に赤色顔料がみられる。壺21は球体を呈する胴部に穿孔状の痕跡がみられ、口縁部は短く屈曲して外方に開き、端部は上方を肥厚させて引き上げている。また、ひずみが大きい。甕22は胴部から短く外反してわずかに拡張した口縁部をもつ。甕23は被熱痕跡とススがみられる。甕24は深鉢状を呈する長胴の体部をもつ。高杯25・26は杯部下半から大きく外反して開く口縁部をもち、精製粘土を使用していると思われる。鉢27はミニチュア土器で、ほぼ完形である。台付鉢28は球体を呈する甕形の胴部をもち、口縁部に凹線文が2条、脚部に円孔が5個、脚端部に凹線文が2条認められる。時期は弥・後・Ⅲと推定される。

竪穴住居9（第5・16図）

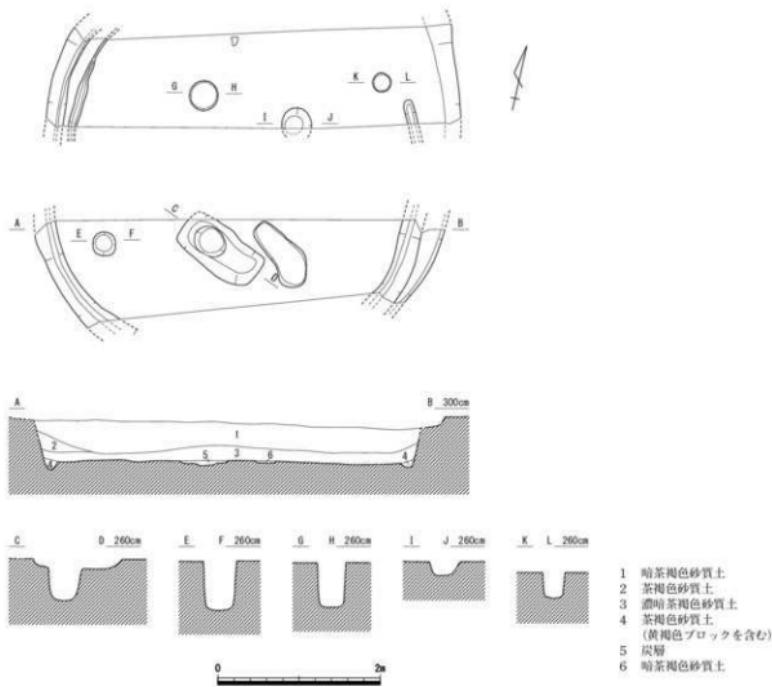
2A区中央付近に位置する。残存状況は調査区境のため遺構北側と後世の溝16・17のため遺構中央付近と合わせて約4割近くが欠損している。なお、遺構埋土の層序は認められたが、土色・土質についての詳細は不明である。平面形は円形で、規模は直径410cm、床面積は13.2m²と推定される。床面標高は235cmを測る。床面では中央穴・土坑と壁体溝が確認できた。この中央穴・土坑の平面形は梢円形、断面形は椀形であり、規模は長軸70cm以上、短軸61cm、深さ18cmである。土坑（ポケット）、焼土面は確認できなかった。柱穴は1本検出した。遺物は甕29の他に、壺・高杯・鉢の破片等が出土している。時期は弥・後・Ⅲと推定される。

竪穴住居10（第5・17図、図版2-3）

2A区中央付近に位置し、竪穴住居9と東接する。残存状況は調査区境のため遺構北側の約9割近くが欠損している。なお、遺構埋土の層序は認められたが、土色・土質についての詳細は不明である。平面形は円形で、規模は直径340cm、床面積は9.1m²と推定される。床面標高は270cmを測る。床面では中央穴・土坑、土坑（ポケット）、焼土面、高床部、柱穴は確認できなかったが、壁体溝と土器溜まりを検出した。遺物は弥生土器の壺30、甕31・32、高杯33・34の他、鉢の破片等が出土している。このうち、壺30は上下に拡張した口縁部に凹線文が2条認められる。甕31は二重口縁をもち、被熱痕跡とススがみられる。高杯34はタテ方向の暗文状のヘラミガキがみられ、精製粘土を使用していると思



第13図 穫穴住居7 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第14図 穫穴住居8 (1/60)

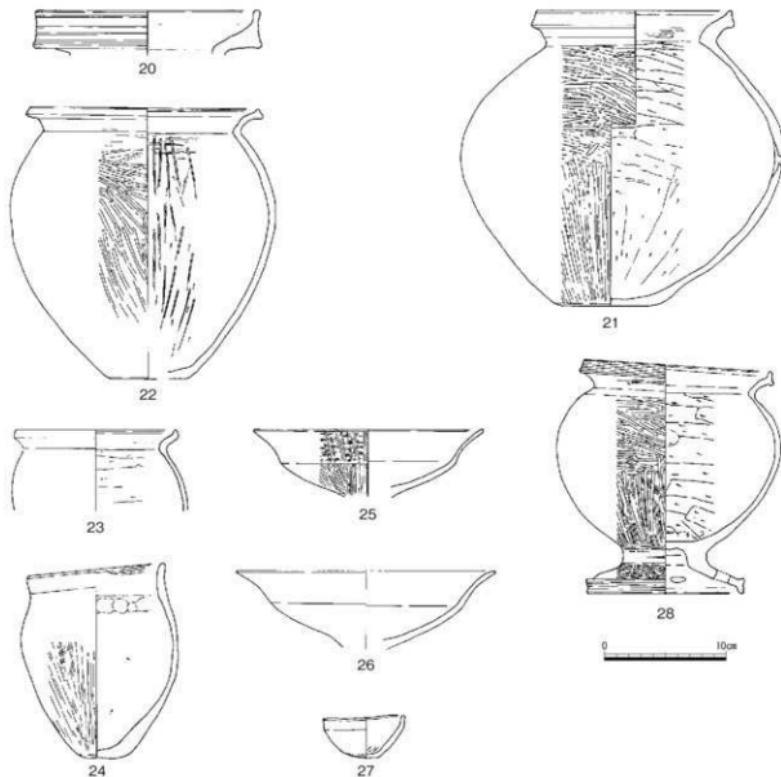
われる。時期は弥・後・Ⅲと推定される。

竪穴住居11（第6・18図、図版3-1-2）

A区西側に位置する。残存状況は調査区境のため遺構北・南側と合わせて約6割近くが欠損している。また、調査時の認識では、少なくとも3軒の住居の重複を想定している。平面形は円形で、規模は直径500cm程度と推定されるが判然としない。床面標高は270cmを測る。床面では中央穴・土坑と壁体溝が確認できる。この中央穴・土坑の平面形は椭円形、断面形は逆台形を呈しており、周囲に土堤が巡る。規模は長軸126cm、短軸92cm、深さ48cmである。土坑（ポケット）、焼土面、高床部は確認できなかった。柱穴は大小6本検出した。遺物は弥生土器の壺・甕・高杯・鉢の破片等が出土している。時期は弥・後・Ⅳと推定される。

竪穴住居12（第6・19図）

A区西側に位置する。竪穴住居11と西接しており、調査時の認識では、竪穴住居12が竪穴住居11を切っているとみている。残存状況は調査区境のため遺構南側の約9割近くが欠損している。平面形は



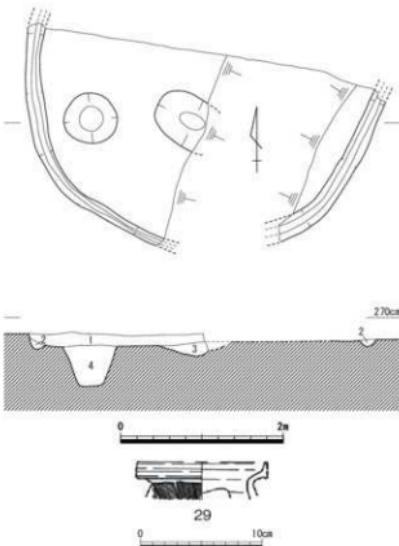
第15図 竪穴住居8出土遺物 (1/4)

円形で、規模は直径600cm、床面積は28.3m²と推定される。床面標高は264cmを測る。床面では中央穴・土坑、土坑（ポケット）、焼土面、高床部、壁体溝、柱穴は確認できなかつた。遺物は弥生土器の壺・甕・高杯・鉢の破片等が出土している。時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと推定される。

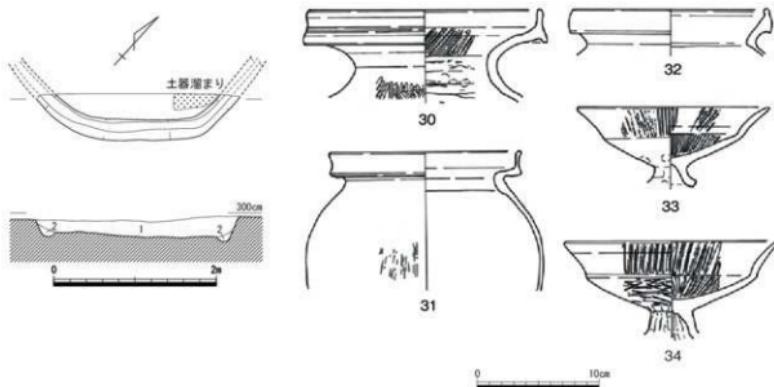
竪穴住居13（第6・20・21図、図版3-3-5）

A区中央付近に位置し、竪穴住居12の北東約2mに当たる。また、調査時の認識では、少なくとも4軒の住居の重複を想定している。残存状況は調査区境のため遺構北・南側と合わせて約5割近くが欠損している。平面形は円形で、規模は直径540cm、床面積は22.9m²と推定される。床面標高は240cmを測る。床面では中央穴・土坑が確認でき、平面形は梢円形、断面形は二段掘りの逆台形で、規模は長軸70cm以上、短軸72cm、深さ48cmである。また、床面欠損部の北側を除く、東・南・西側では高床部が確認できた。なお、土坑（ポケット）、焼土面、壁体溝は確認できなかつた。柱穴は大小5本検出した。

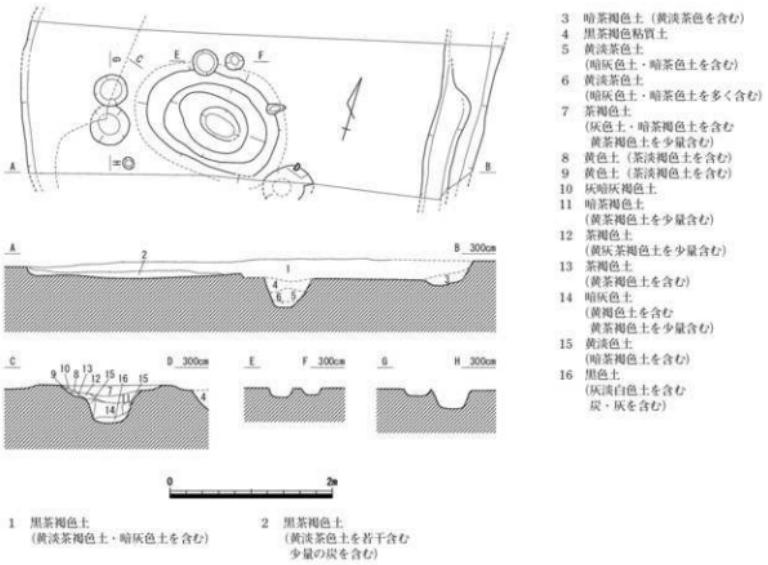
遺物は弥生土器の壺35・36、甕37、高杯39



第16図 竪穴住居9 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第17図 竪穴住居10 (1/60)・出土遺物 (1/4)

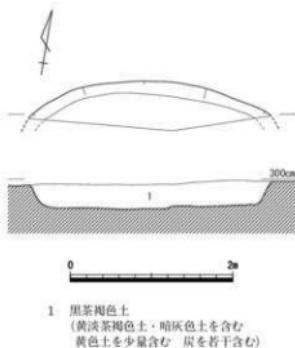


第18図 竪穴住居11 (1/60)

～41、鉢42～44、及び土師器の壺38の他、鉄製品の破片や焼土塊が出土している。このうち、壺35は胴部から直立する口縁部をもち、精製粘土を使用していると思われる。壺36は内傾気味に立ち上がる二重口縁に凹線文が3条みられる。壺37は胴部から内傾気味に立ち上がる二重口縁に凹線文が2条認められる。壺38は胴部から上方に立ち上がる二重口縁に沈線文が9条認められる。高杯39は逆ハ字状に開く、高杯40は大きく外方に開く口縁部をそれぞれもつ。また、高杯40は脚部に円孔が、高杯41は脚部に円孔4個がみられ、高杯39～41は精製粘土を使用していると思われる。鉢42は底部から外方に伸びる、鉢43・44はゆるく湾曲する胴部から内傾気味に立ち上がる口縁部をそれぞれもつ。鉢44は口縁部に凹線文が3条認められる。また、鉢42～44はほぼ完形である。時期は弥・後・IV～古・前・Iと考えられる。

竪穴住居14 (第6・22図)

A区東側に位置する。残存状況は調査区境のため遺構南側と当時の用水路のため遺構西側と合わせて約4割近くが欠損している。平面形は円形で、規模は直径440cm、床面積は15.2m²と推定される。床面標高は255cmを測る。床



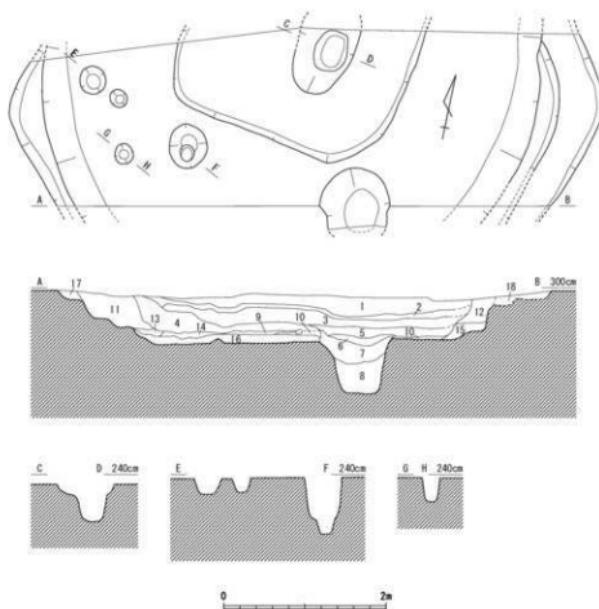
第19図 竪穴住居12 (1/60)

面では中央穴・土坑、土坑（ポケット）、焼土面、高床部、壁体溝は確認できなかったが、柱穴を3本検出した。遺物は弥生土器の壺45の他に、甕・高杯・鉢の破片等が出土している。壺45は胴部から内傾気味に細長く立ち上がる口縁部をもち、精製粘土を使用していると思われる。時期は弥・後・IVと考へられる。

炉

炉1（第5・23図）

1 A区西側に位置する。残存状況は炉床面のみが確認できる程度である。平面形は橢円形で、規模



- | | |
|-----------------------------------|---------------------------|
| 1 淡灰色土 (暗茶褐色土を含む 黄茶色土を少量含む) | 10 黒灰色粘質土 (黄茶色粘質土を含む) |
| 2 喷青灰色粘質土
(暗茶褐色土を含む 炭化物・焼土を含む) | 11 暗灰色土 (暗黄色土・茶褐色土を含む) |
| 3 喷茶褐色土 (黒褐色粘質土を含む) | 12 喷茶褐色土 (黄淡褐色土を含む) |
| 4 黑灰色土 (暗黄茶褐色土を含む 炭を若干含む) | 13 黄淡茶褐色土 (暗灰色粘質土を含む) |
| 5 黑茶褐色土 (暗茶褐色土を含む) | 14 喷灰色土 (黄茶褐色土を含む) |
| 6 黑色土 (黒褐色土を含む 炭を含む) | 15 喷茶褐色土 |
| 7 喷灰褐色粘質土 (淡黄色粘質土を含む) | 16 黄茶褐色土 (黑灰色土を含む 炭を若干含む) |
| 8 黑灰褐色粘質土 | 17 黑茶褐色土 (淡黄色土を若干含む) |
| 9 喷灰褐色土 (黄茶褐色土を含む) | 18 黑茶褐色土 |

第20図 積穴住居13 (1/60)

は長軸27cm、短軸17cmであり、厚さ約3cmの焼土が認められる、床面標高は347cmを測る。遺構に伴う遺物は出土していない。調査所見に準じれば、時期は弥生時代後期とされる。

土坑

土坑1（第5・23図）

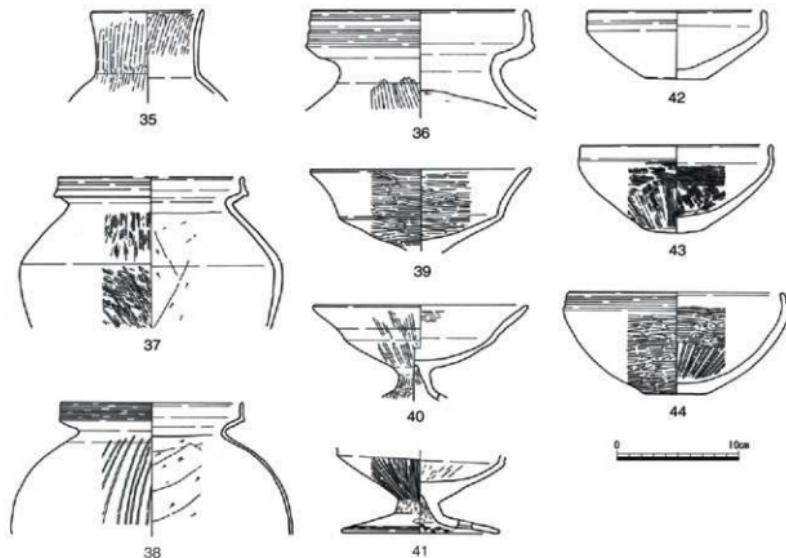
1A区西側に位置する。残存状況は土坑2に西側の一部が切られている。平面形は椭円形、断面形は二段掘りの逆台形を呈しており、規模は長軸約80cm、短軸32cm、深さ27cm、床面標高は305cmを測る。遺構に伴う遺物は出土していない。調査所見に準じれば、時期は弥生時代後期とされる。

溝

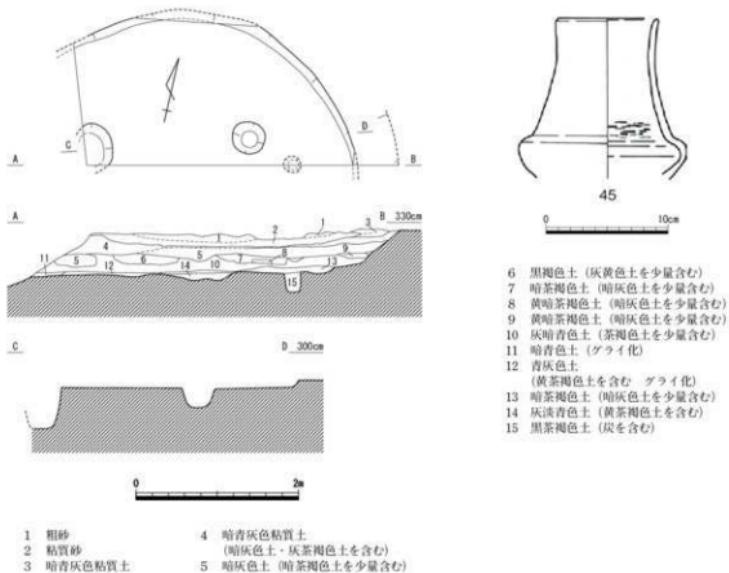
溝1（第5・24～39図、巻頭図版、図版4-1・6～14・18）

3A区西側に位置する。流路は北西—南東方向である。残存状況は調査区境のため遺構南側は欠損している。断面形は逆台形と推測され、規模は上端幅280cm以上、深さ115cm以上、床面標高は168cm以下を測る。調査所見に準じれば、溝1は溝6・8と同一溝とされる。その場合、水流はやや蛇行していたと思われる。

遺物は弥生土器の壺46～78、台付壺79～81、甕82～85、87～126、高杯127～146、鉢147～186、203～206、台付鉢187～202、製塙土器207～215、手焼き形土器216～218、及び土師器の甕86と土製円板C1、石鏃S1、スクレーパーS2・3等がまとまって出土している。また、サヌカイト片、桃



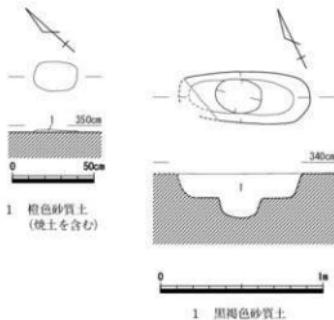
第21図 穂穴住居13出土遺物（1/4）



第22図 積穴住居14 (1/60)・出土遺物 (1/4)

核、炭片等が出土している。

壺46～57は胴部から短く内傾する頸部をもち、ここから外方に開いて、上方に大きく立ち上がる二重口縁をもつ。壺46は口縁部に沈線文12～13条（螺旋状？）、肩部に刺突文が認められ、器面に赤色顔料がみられる。壺48は口縁部に凹線文6条、肩部に刺突文がみられる。壺49は口縁部に凹線文7条が認められ、器面に赤色顔料がみられる。壺51は内傾する頸部に沈線文16条（螺旋状？）、肩部に刺突文が認められる。口縁部は頸部からやや浅い盤状に開いている。壺53・54は口縁端部が下方にも拡張されている。壺53は口縁部に凹線文2条がみられる。壺55は口縁部に丁寧なヘラミガキが施され、斜格子文と凹線文3条が認められる。壺56は口縁部の立ち上がりが内傾しており、鋸歯文内に斜格子文を充填している。壺57は口縁部に波状文5～6条と沈線文2条がみられる。



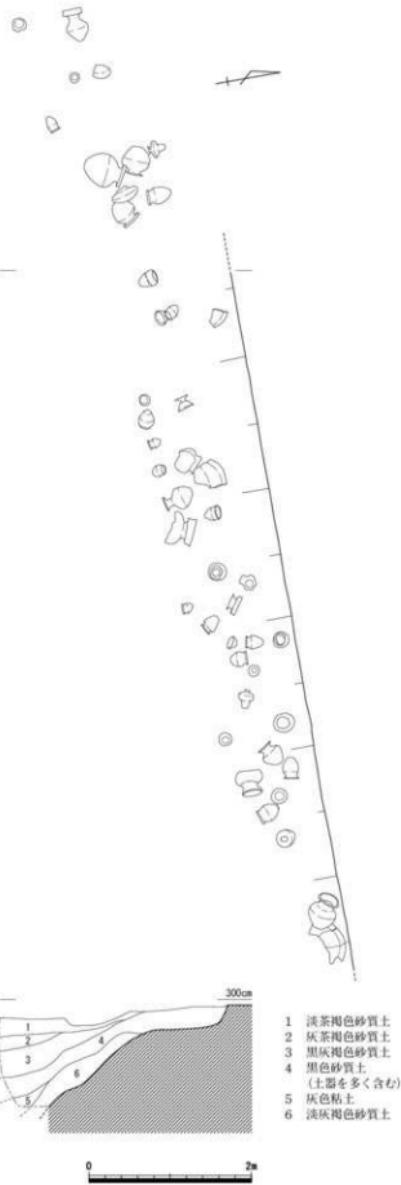
第23図 炉1・土坑1 (1/30)

壺58～65は胴部から緩く湾曲、あるいは長く内傾する頸部をもち、ここから外方に開いて、口縁部は上方に立ち上がる、または上下に拡張・肥厚する端部をもつ。壺58は口縁部に四線文3条がみられる。壺61は口縁部に四線文4条が認められ、器面に赤色顔料がみられる。壺63は丁寧なハラミガキが施され、頸部に沈線文6条、肩部に刺突文がみられる。壺64は頸部に沈線文3条、肩部に刺突文が認められる。

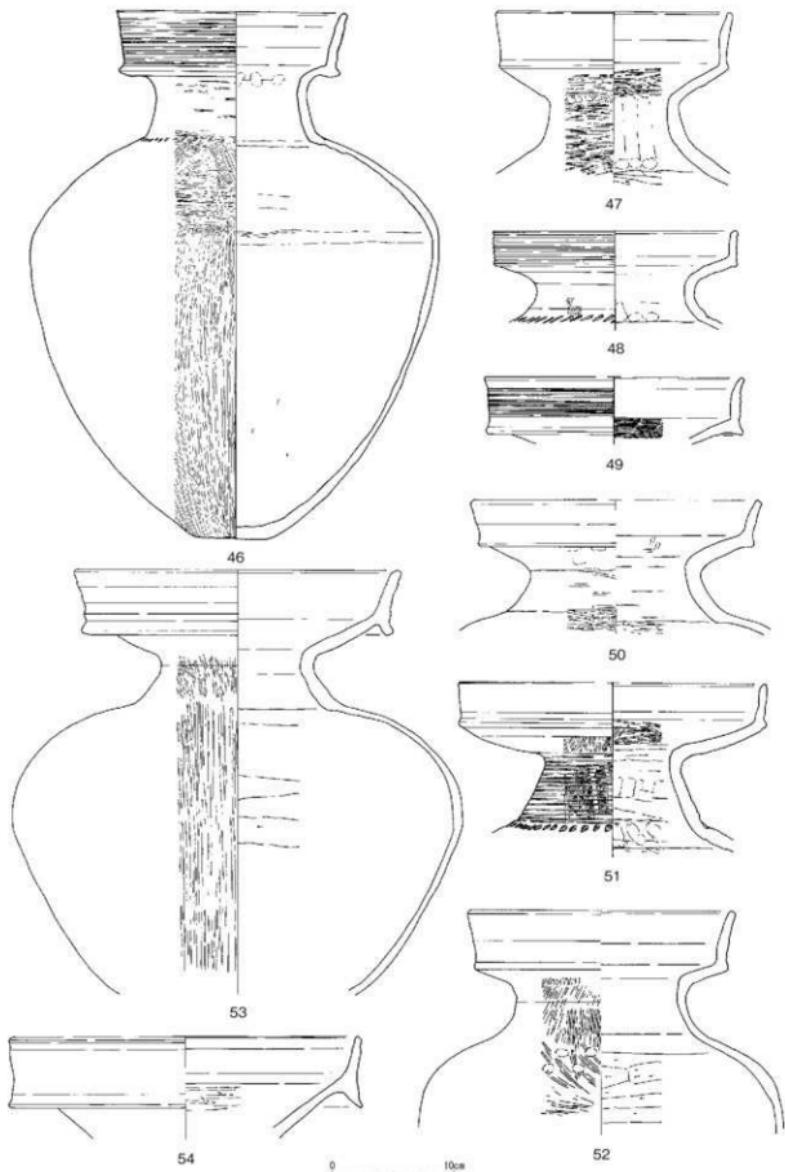
壺66～69は胴部から短く屈曲した頸部をもち、口縁部は上方に立ち上がる、または上下に拡張・肥厚する端部をもつ短頸広口壺である。壺70～74は短頸広口壺の胴部と推測され、壺73は器面に赤色顔料がみられ、壺74もその可能性がある。壺75は球体、壺76は梢円体を呈する胴部から短く立ち上がる口縁部をもつ短頸直口壺である。壺77・78は小形の直口壺であり、精製粘土を使用していると思われる。

台付壺79～81は梢円体の胴部から内傾する口縁部をもつ。台付壺79は脚部に円孔4個、台付壺81は円孔がみられる。また、台付壺80・81は精製粘土を使用していると思われる。

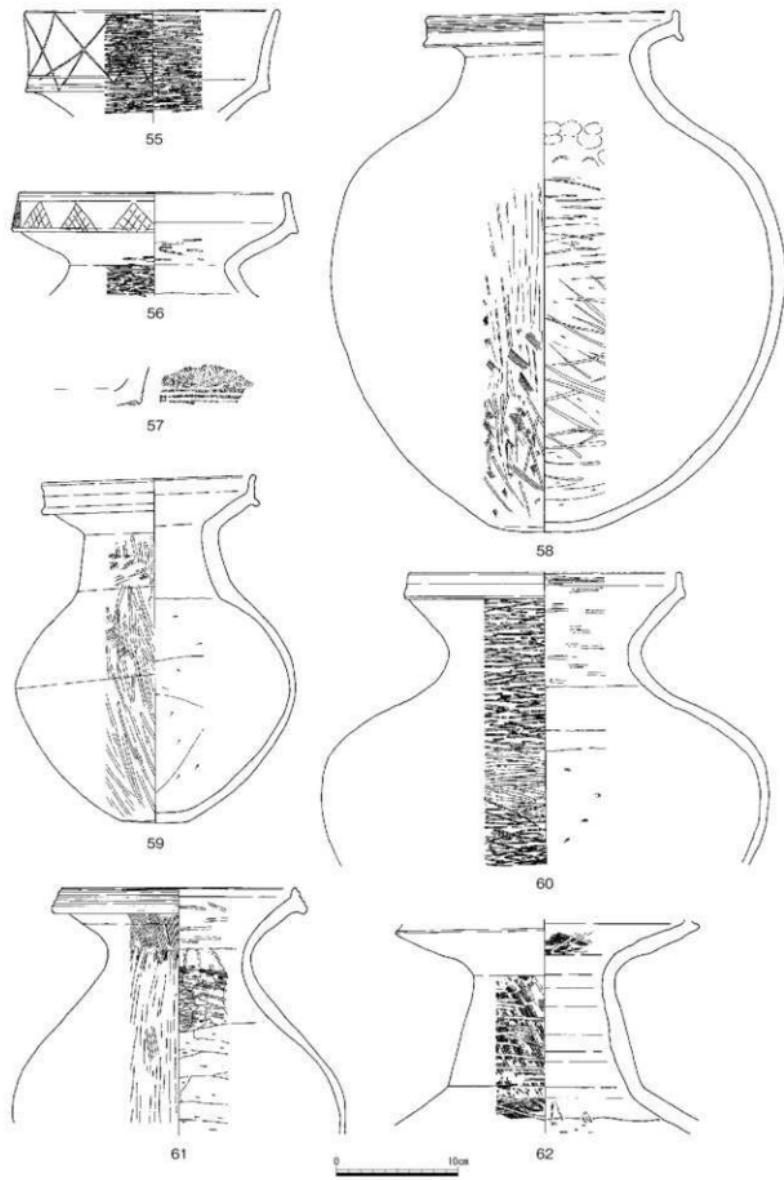
壺82～110は胴部から短く湾曲、あるいは屈曲して、上方に大きく立ち上がる二重口縁、または上下に拡張・肥厚する口縁端部をもつ。壺82～86は上方に大きく立ち上がる二重口縁に四線文・沈線文を施している。壺82は長胴・平底であり、口縁部に四線文3条が認められる。ひずみが大きい。壺83も長胴・平底であり、口縁部に四線文3条がみられ、被熱痕跡とススが認められる。壺84は短胴・平底であり、口縁部に四線文3条が認められる。壺85は短胴と思われ、口縁部に



第24図 溝1 (1/60)



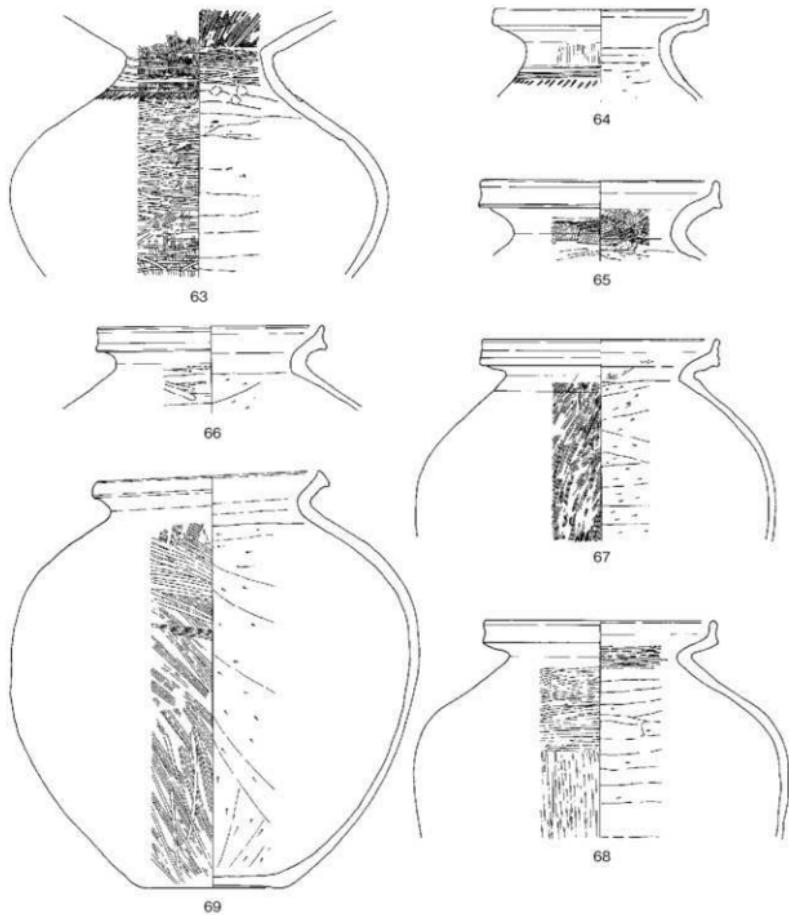
第25図 溝1出土遺物① (1/4)



第26図 溝1出土遺物② (1/4)

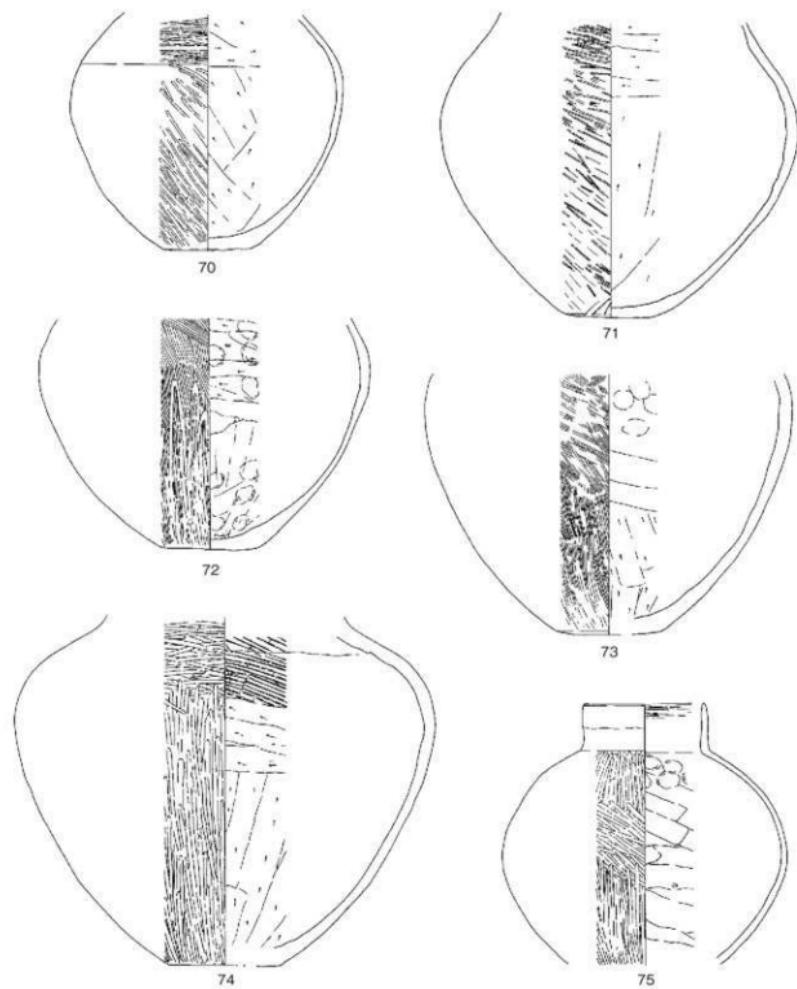
凹線文3条がみられ、被熱痕跡とススが認められる。一方、土師器の甕86は長胴・丸底であり、底部に穿孔が確認できる。口縁部に沈線文8条、肩部に刺突文がヨコに2か所みられる。また、被熱痕跡とススが認められる。

甕87～92は二重口縁にヨコナデを施している。甕87は小形品である。甕88は口縁部が内傾している。甕90はほぼ完形であり、底部に穿孔がみられ、被熱痕跡とススが認められる。甕91は口縁部に凹線文4条がみられ、器面に赤色顔料の塗布の可能性がある。甕93～99は上下に拡張・肥厚する口縁端

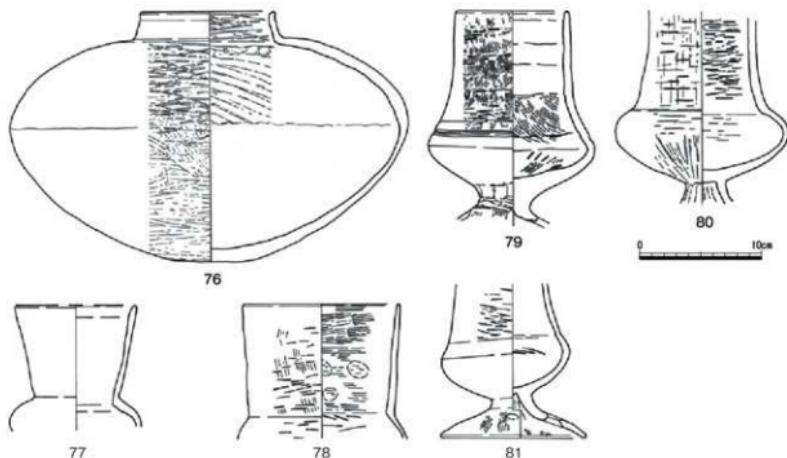


第27図 溝1出土遺物③ (1/4)

部をもつ。甕96は口縁部に凹線文3条がみられる。甕97は口縁部に凹線文4条がみられ、被熱痕跡とススが認められる。甕98は口縁部に凹線文2条がみられる。甕99は小形の胴部からヨコ方向に短く屈曲して上下に肥厚する口縁部に凹線文1条がみられる。甕100～110は口縁部を上下に拡張・肥厚させ



第28図 溝1出土遺物④ (1/4)



第29図 溝1出土遺物⑤ (1/4)

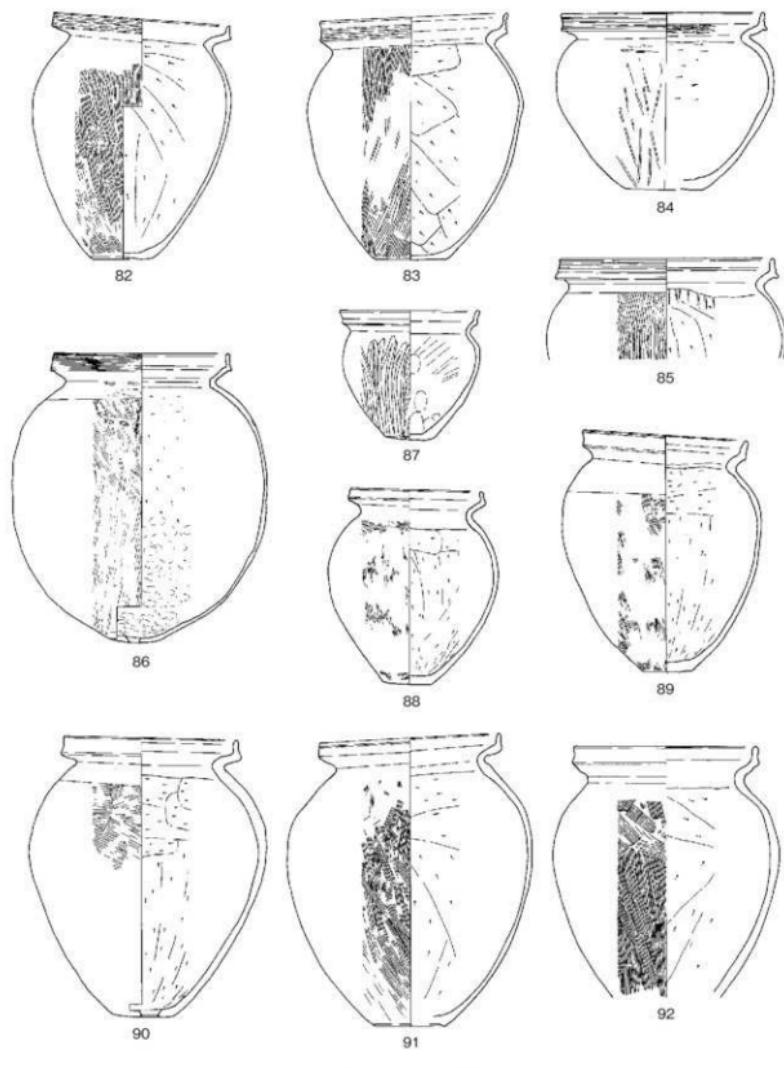
て、端部は引き上げている。甕100は小形品であり、口縁部に凹線文1条がみられる。甕106は口縁部に凹線文1条がみられる。甕107・110は被熱痕跡とススがみられ、甕110はひずみが大きい。

甕111～126は胴部から短く湾曲、または屈曲して外方に開き、口縁部は拡張や肥厚しない端部をもつ。甕111ほぼ完形である。甕112は胴部に比べて長く外方に開く口縁部をもつ。甕115はタタキメがみられる。甕119・120はあまり丸みがみられない長胴の体部をもつ。甕121はほぼ完形であり、胴部にタタキメや穿孔がみられる。甕122は下膨れした長胴の体部をもつ。甕123は深鉢状を呈する胴部をもち、底部に穿孔がみられる。甕124はタタキメがみられる。甕125・126は胴部から短く屈曲して外方に伸びる口縁部をもつ。なお、甕111・112・116・117・121・122・124は被熱痕跡とススがみられる。

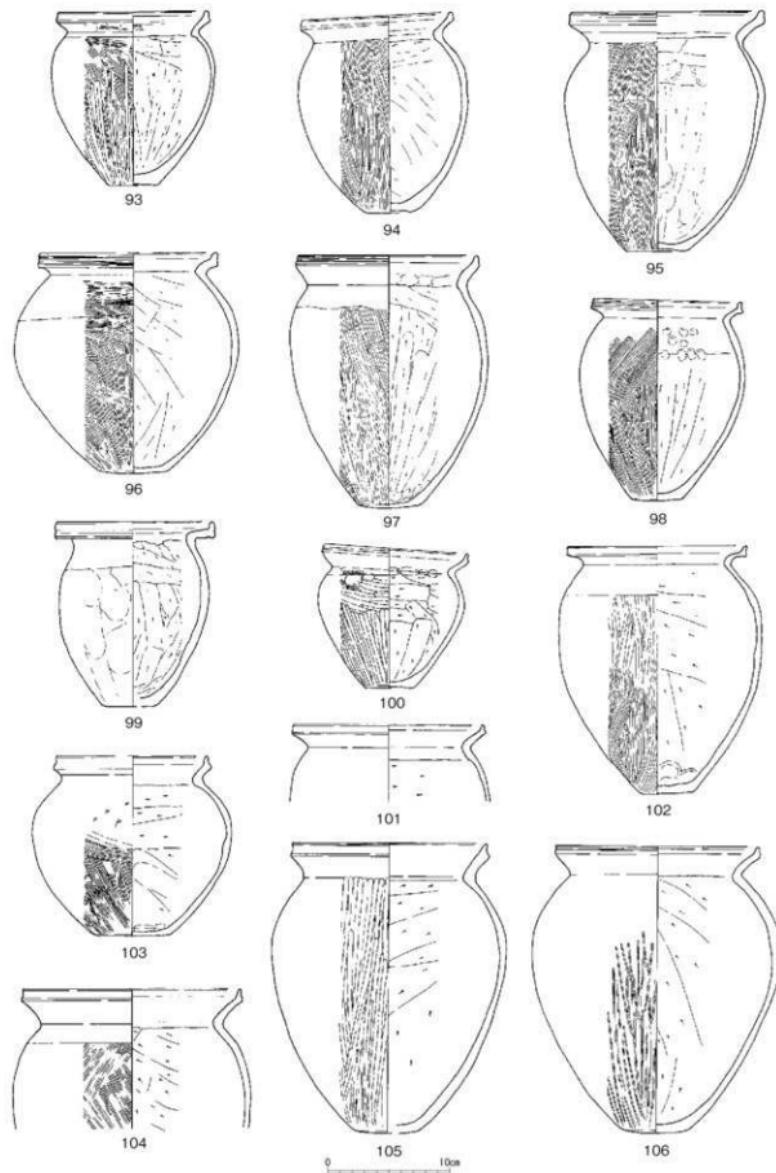
高杯127～131は杯部下半から逆ハ字状に開く口縁部をもち、ヨコ方向のヘラミガキを施す。高杯129は完形である。高杯132～135は杯部下半から大きく外反して開く口縁部をもち、タテ方向のヘラミガキを施す。高杯133はほぼ完形である。高杯136～142は楕・皿状を呈する杯部から外方に開く、または立ち上がる口縁部をもつ。高杯141は口縁部に凹線文がみられる。高杯143・144は楕状を呈する杯部から立ち上がる二重口縁をもつ。高杯145は杯部下半から外方に開く口縁部に屈曲した端部をもつ。高杯146は装飾高杯であり、口縁部に鋸歯文と波状文3条がみられる。また、高杯127～133・136・138・140～142・144は脚部に円孔4個、高杯135・137は脚部に円孔の痕跡が認められる。さらに、高杯127～130・132・134・135・137～140・143・144・146は精製粘土を使用していると思われる。

鉢147～159は平底で、湾曲して立ち上がる胴部から上方、または内傾気味に立ち上がる口縁部をもつ。鉢160は丸底で、湾曲する胴部から口縁部が伸びる。鉢161～163は平底で、外方に立ち上がる胴部から口縁部が伸びる。鉢164～170は平底で、湾曲気味に立ち上がる胴部から短く外方に屈曲する口縁部に、上下に拡張・肥厚する端部をもつ大形品である。鉢165・169は口縁部に凹線文が3条、鉢170は2条認められ、鉢165は器面に赤色顔料がみられる。鉢171～178は平底で、やや胴張りの体部

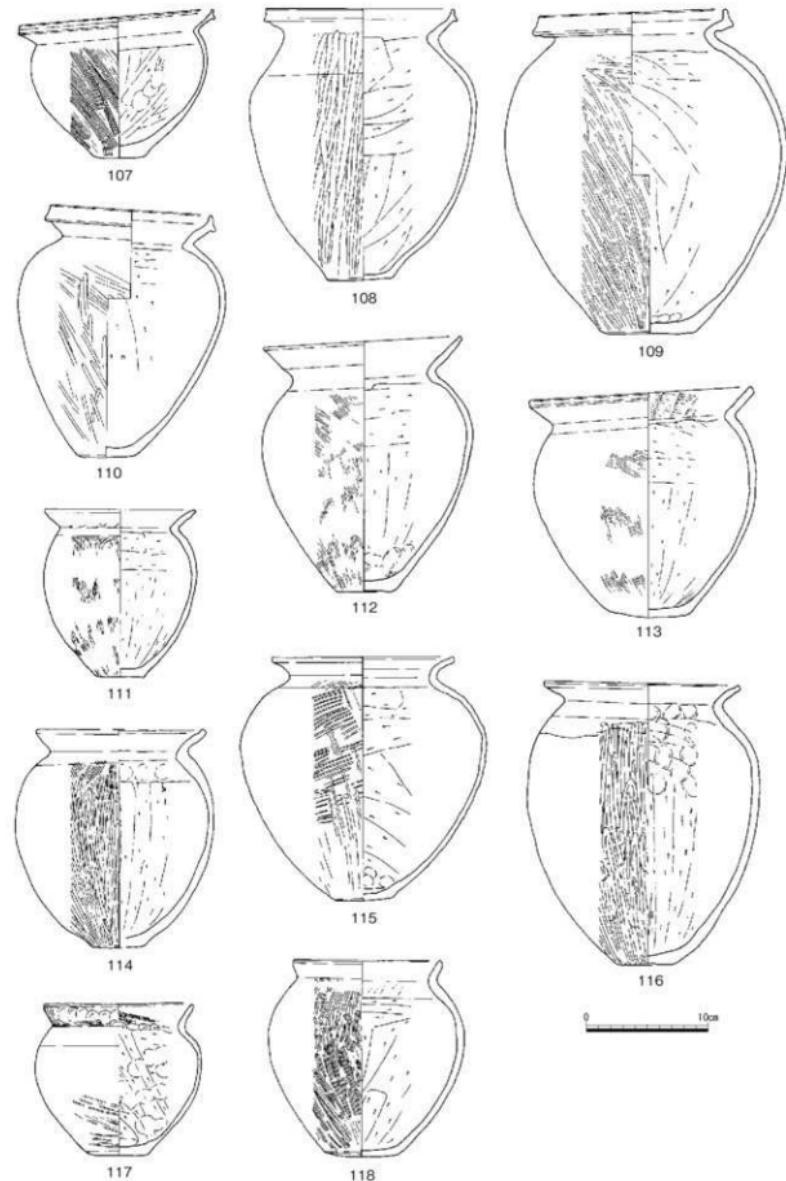
から立ち上がる二重口縁をもつ。鉢171は口縁部に凹線文1条、鉢175は凹線文5条、鉢176は凹線文3条がみられ、鉢178は底部に穿孔が認められる。鉢179～183は湾曲する胴部から短く屈曲する口



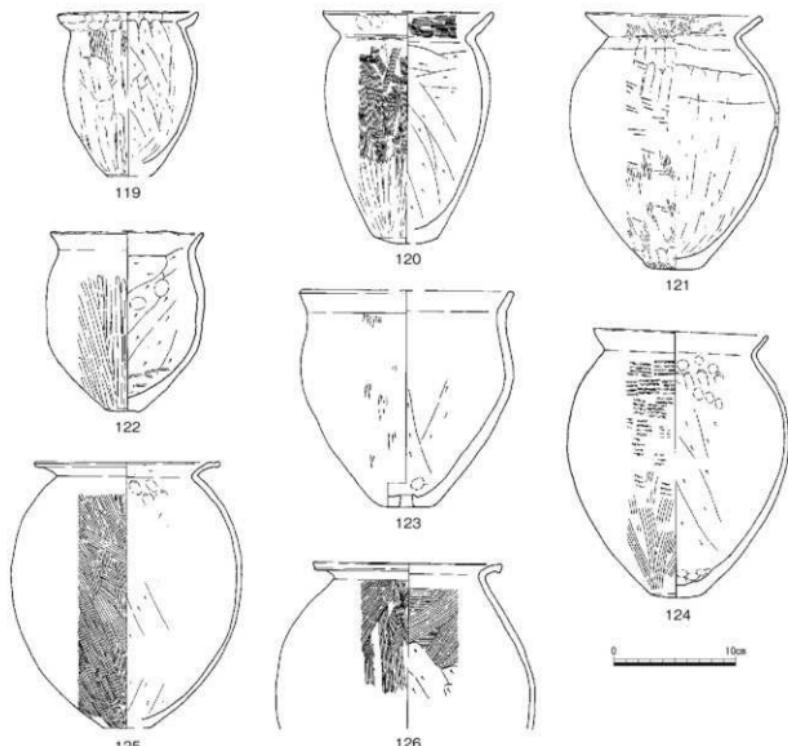
第30図 溝1出土遺物⑥ (1/4)



第31図 溝1出土遺物⑦ (1/4)



第32図 溝1出土遺物⑧ (1/4)

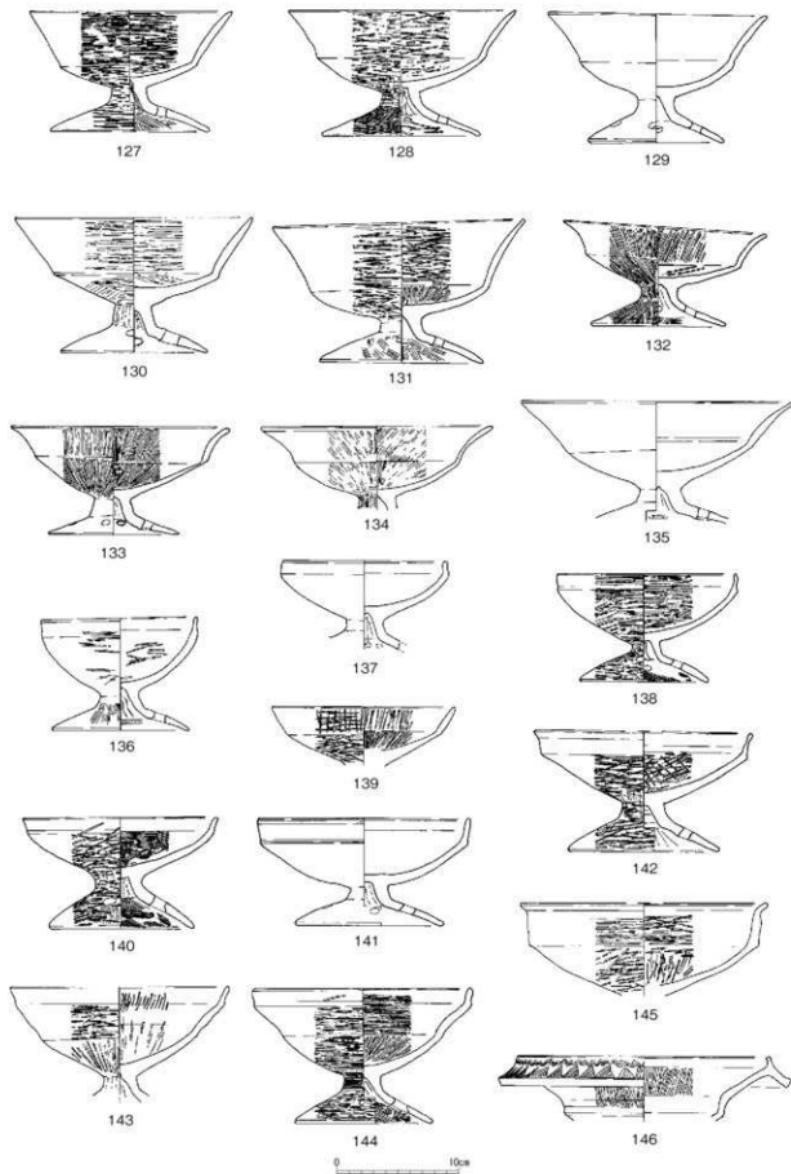


第33図 満1出土遺物⑨ (1/4)

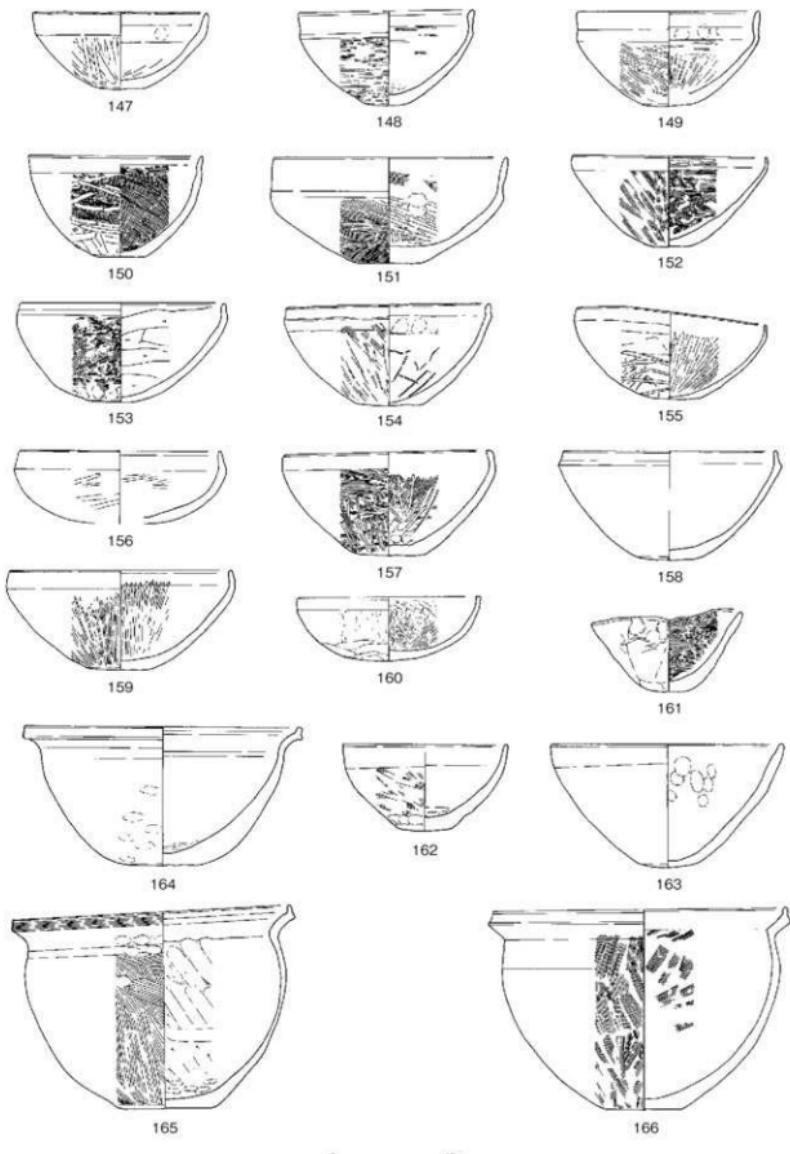
縁部に丸い端部をもつ。鉢179はひずみが大きい。鉢184は口縁部の加工・面取りを行い、片口部を作り出している。鉢185・186は外方に開く胴部から立ち上がる口縁部をもつ大型品である。なお、鉢150・151は完形、鉢147・154・157・162・172・174・175・178はほぼ完形であり、鉢148・149・163・181は被熱痕跡とスヌ、鉢166・173はスヌがそれぞれ認められる。また、鉢147・171・172・174・182は精製粘土を使用していると思われる。

台付鉢187～194は小さい上げ底で、逆ハ字状に開く胴部に丸く収めた口縁端部をもつ。台付鉢188・192はほぼ完形である。台付鉢195～197は上げ底で、逆ハ字状に開く胴部から上方に立ち上がる口縁部をもつ。台付鉢195はひずみが大きい。台付鉢198～200は小さい上げ底で、湾曲して立ち上がる胴部から口縁部が伸びる。台付鉢198は被熱痕跡が認められる。台付鉢201は上げ底で、湾曲する胴部から立ち上がる二重口縁をもつ。また、台付鉢190・201は精製粘土を使用していると思われる。

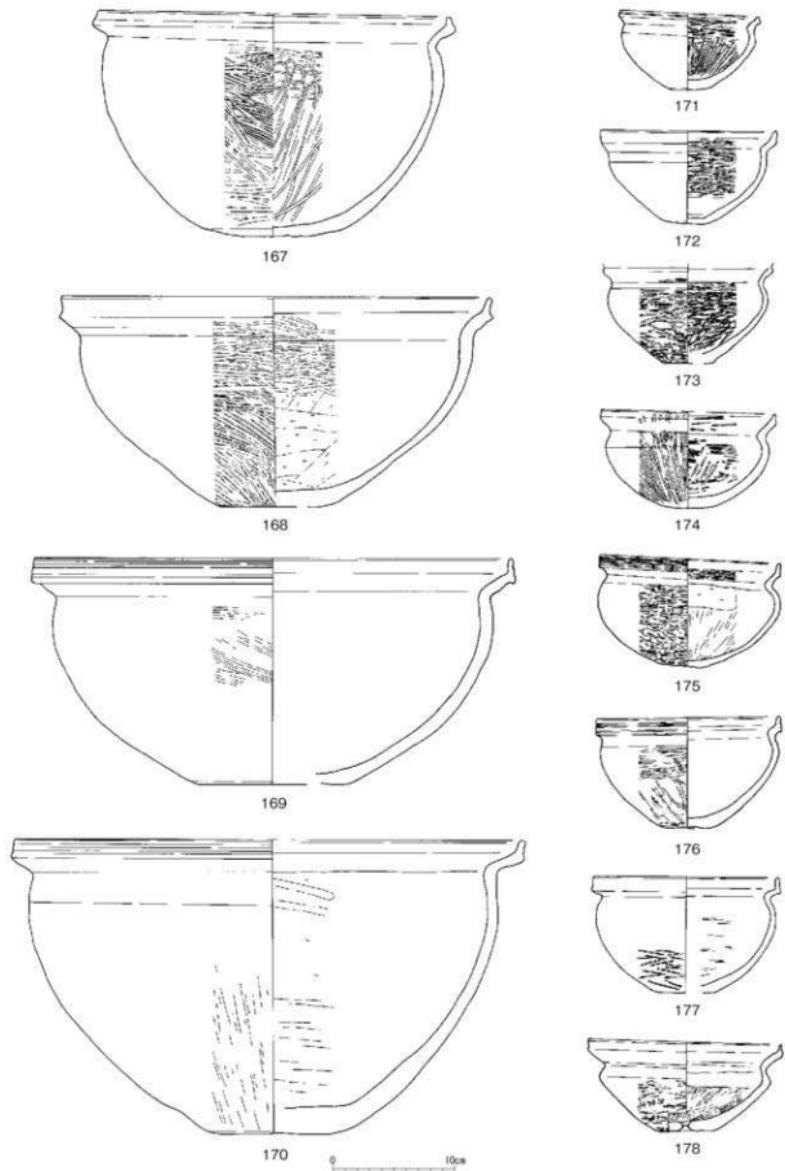
鉢203・205は手づくねであり、鉢204はほぼ完形のミニチュア土器である。鉢206は筒形で、胴部下半に鋸歯文・沈線文7条がみられる良品である。また、鉢204・206は精製粘土を使用していると思



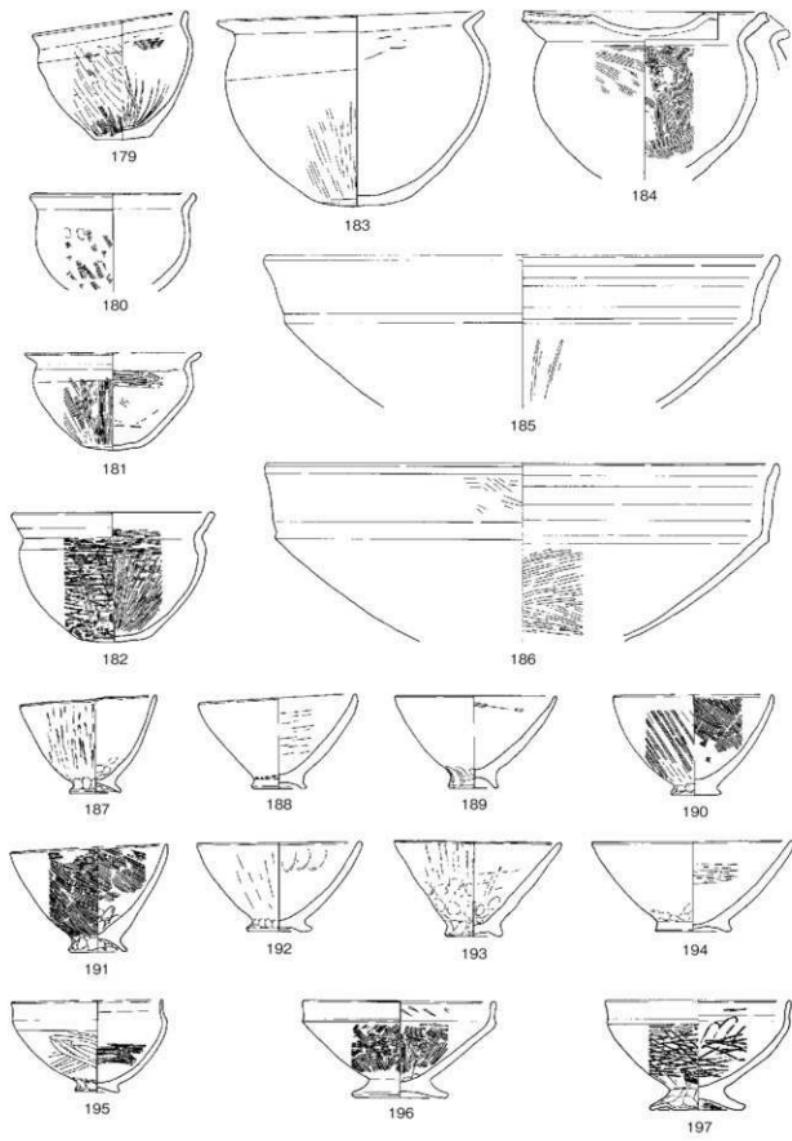
第34図 溝1出土遺物⑩ (1/4)



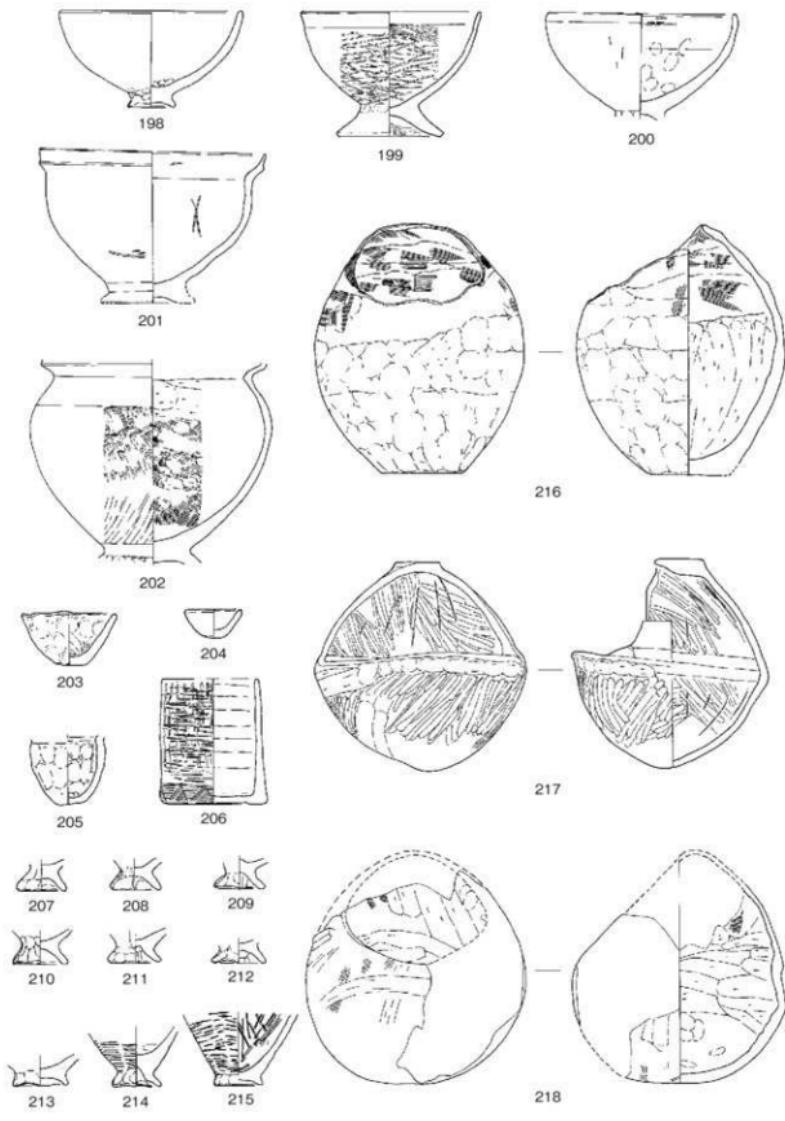
第35図 溝1出土遺物⑪ (1/4)



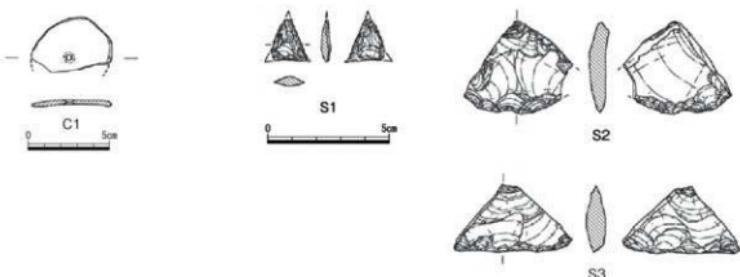
第36図 溝1出土遺物⑫ (1/4)



第37図 溝1出土遺物⑬ (1/4)



第38図 溝1出土遺物⑭ (1/4)



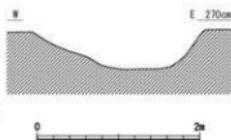
第39図 溝1出土遺物⑯ (1/2・1/3)

われる。製塙土器214・215はタタキメがみられる。また、製塙土器207～211、213・215には被熱痕跡が、製塙土器210はススも認められる。手焙り形土器216は底部から頂部までが一体化した形態であり、上部の片側に傾斜した楕円形の「窓」をもち、完形である。手焙り形土器217は2個体の鉢を重ねた形態であり、上部の片側に三角形の「窓」をもつ。頂部は平底状を呈する。手焙り形土器218も2個体の鉢を重ねた形態であり、上部の片側に傾斜した楕円形の「窓」をもつと思われる。胴部の中央付近に二段屈曲がみられる。これらの出土遺物から、時期は弥・後・Ⅲ～古・前・Ⅰと考えられる。

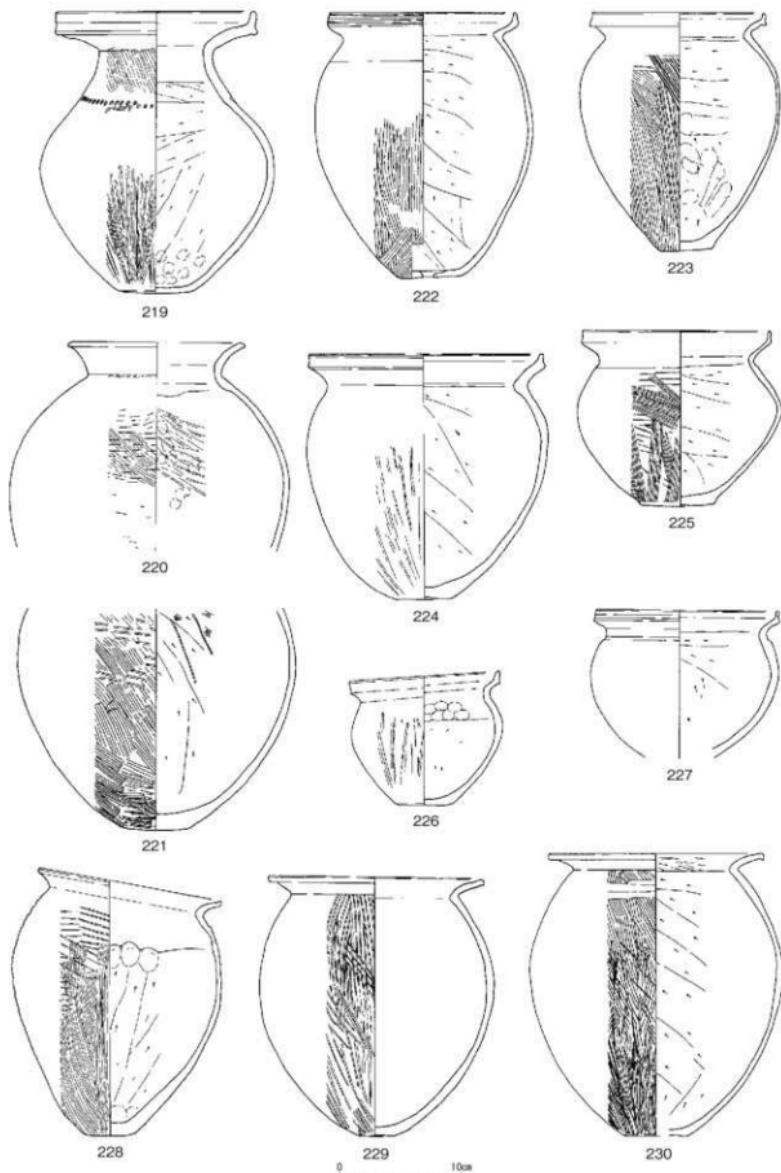
溝2 (第5・40～42図、図版4-2・15・16)

3 A区東側に位置する。流路は北西—南東方向である。断面形は逆台形で、規模は上端幅215cm、底面幅48cm、深さ48cm、床面標高は210cmを測る。位置関係と床面標高から、溝17と同一の可能性が考えられるが、調査所見や堅穴住居9との切り合い関係から判然としないところがある。

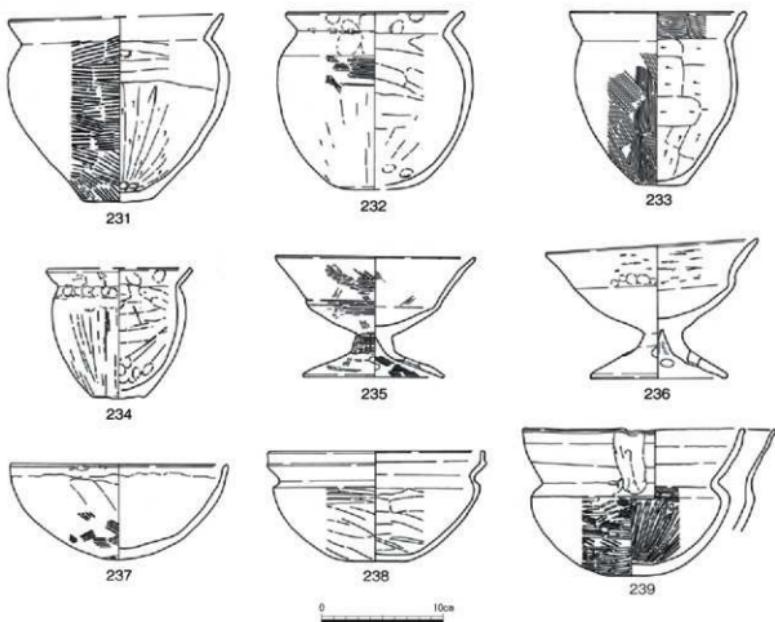
遺物は弥生土器の壺219～221、甕222～234、高杯235・236、鉢237～239が出土している。壺219は胴部から内傾する頸部をもち、ここから外方に開いて、口縁部は上方に立ち上がる。肩部に刺突文が認められ、ススがみられる。壺220は球体を呈する胴部から短く外反する口縁部をもち、壺221とともにタタキメがみられる。甕222～224は胴部から外方に開き、上方に拡張する口縁部をもつ。甕222は口縁部に凹線文が3条、底部には穿孔が認められる。また、被熱痕跡とススがみられる。甕225～227はやや胴張りの体部から短く外反して、上方に拡張する口縁部をもつ。甕225はほぼ完形で、タタキメがみられる。また、被熱痕跡とスス、剥離がみられる。甕226は小形品である。甕228は胴部から短く外反する口縁部をもち、タタキメがみられる。ひずみが大きい。甕229・230は胴部から短く屈曲して外方に伸びる口縁部をもち、甕229はほぼ完形である。甕231はやや胴張りの体部から短く屈曲した口縁部をもち、タタキメがみられる。甕232は球体を呈する胴部から短く屈曲した口縁部をもち、甕231とともに被熱痕跡とススがみられる。甕233は深鉢状を呈する形態をもつ。甕234は胴部から短く屈曲した口縁部をもつ小形品である。高杯235は杯部下半から逆ハ字状に開く、高杯236は大きく外反気味に開く口縁部をもち、いずれも精製粘土を使用していると思われ、脚部に円孔が4個みられる。鉢237は半球体を呈する胴部から伸びる口縁部をもつ。鉢238は平底で、胴張りの体部から上方に立ち上がる二重口縁をもち、被熱痕跡が認められる。



第40図 溝2 (1/60)



第41図 満2出土遺物① (1/4)

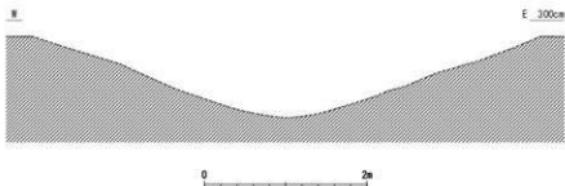


第42図 溝2出土遺物② (1/4)

鉢239は口頭部にタテ方向の注口部を1か所作り出した特異な形態をもつ。また、被熱痕跡とススがみられる。時期は弥・後・IVと考えられる。

溝3 (第5・43・44図、図版18)

3A区東側に位置し、溝2と並行する。流路は北西一南東方向である。断面形は楕形で、規模は上端幅621cm、底面幅88cm、深さ100cm、床面標高は180cmを測る。溝3は溝7と同一溝の可能性があり、床面標高から水流は北から南に向かっていたと推測される。遺物は弥生土器の壺240、鉄鎌M2の他、甕・高杯・鉢・製塙土器の破片等が出土している。壺240は胴部から短く内傾する頭部をもち、ここから外方に開いて、上方に大きく立ち上がる二重口縁をもつ。口縁部に鋸歯文、頸部に沈線文が15条、肩部に刺突文がみられる。時期は弥・後・IVと考えられる。



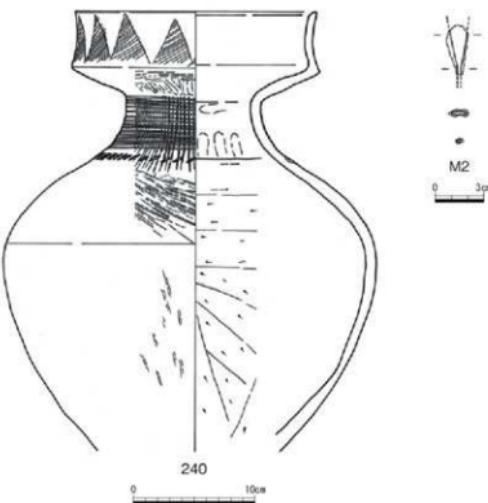
第43図 溝3 (1/60)

溝4（第5・45~47図、図版16）

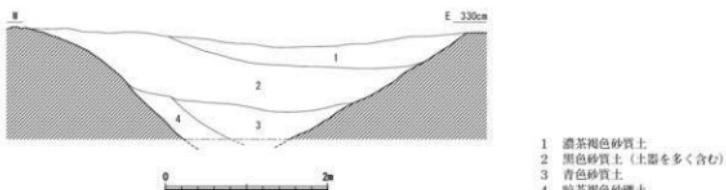
1A区中央付近に位置する。流路は北西—南東方向である。断面形は楕円形で、規模は上端幅534cm、深さ140cm以上、床面標高は185cm以下を測る。

遺物は弥生土器の壺241~249、甕253~256、高杯257~259、鉢263~265、台付鉢266、製塙土器267、及び土師器の甕250~252、高杯260~262の他、鉄製品の破片等が出土している。弥生土器の壺241は頸部から外方に開き、口縁部は上方に立ち上がる。壺242~244は胴部から短く内傾する頸部をもち、ここから外方に開いて、上方に大きく立ち上がる二重口縁をもつ。壺241・243の器面には赤色顔料が認められる。壺244

は口縁部に四線文状の施が3条みられる。壺245は球体の胴部から短く外反して、上方に立ち上がる口縁部をもつ短頸広口壺であり、口縁部に四線文が2条認められる。壺247は球体の胴部から外方に伸びる口縁部をもつ。壺248・249は長頸壺であり、壺248は頸部に沈線文11条が、肩部に刺突文が認められる。壺249は頸部に沈線文6条が、肩部に刺突文がみられる。甕253は胴部から短く屈曲する口縁部に、上方にわずかに拡張する端部をもつ。胴部に大きな凹みが認められ、底部には穿孔がみられる。また、被熱痕跡とススが認められる。甕254は端部を内傾させて上方に拡張させた口縁部に四線文が2条みられる。甕256はほぼ完形で、タキメがみられる。胴部から短く屈曲する口縁部をもち、端部は丸く收める。高杯257~259は杯部下半から逆ハ字状に開く口縁部をもつ。高杯257・258は脚部に円孔4個がみられ、高杯258には赤色顔料が認められる。高杯259は精製粘土を使用していると思われる。いずれの高杯も内外面に丁寧なヘラミガキがみられる。鉢264は湾曲する胴部から立ち上がる二重口縁をもち、精製粘土を使用していると思われる。鉢265は平底で、外方に伸びる胴部から、上方に立ち上がる口縁部をもつ。台付鉢266は小さい上げ底から逆ハ字状に開く胴部をもち、口

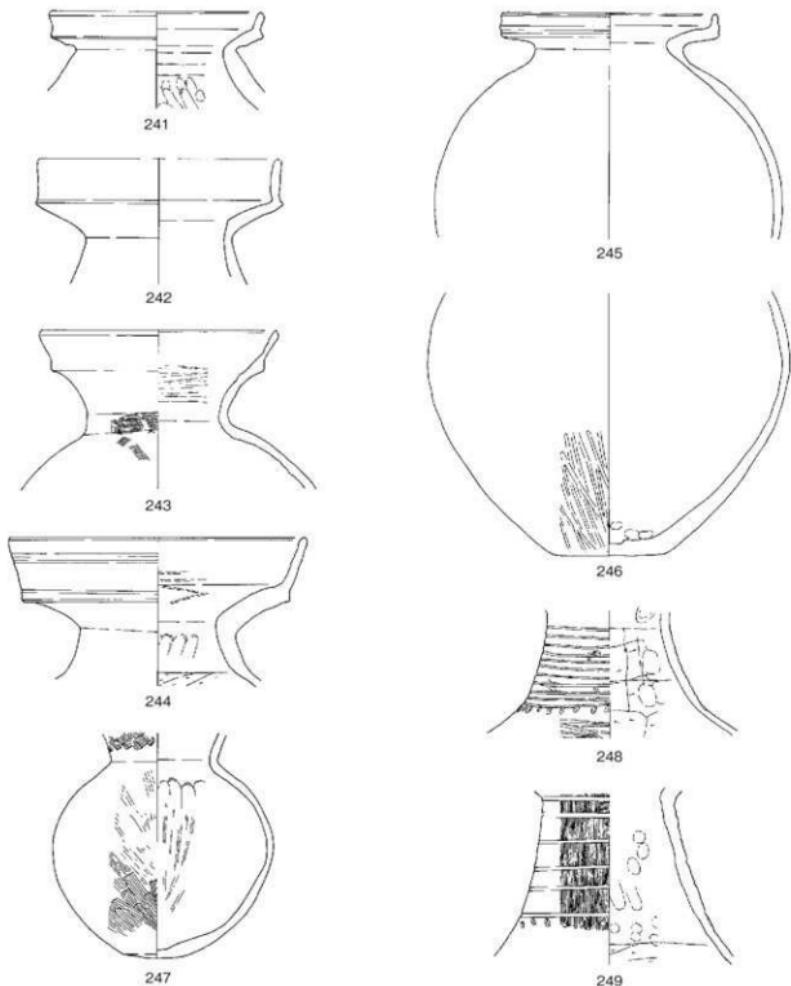


第44図 溝3出土遺物 (1/3・1/4)



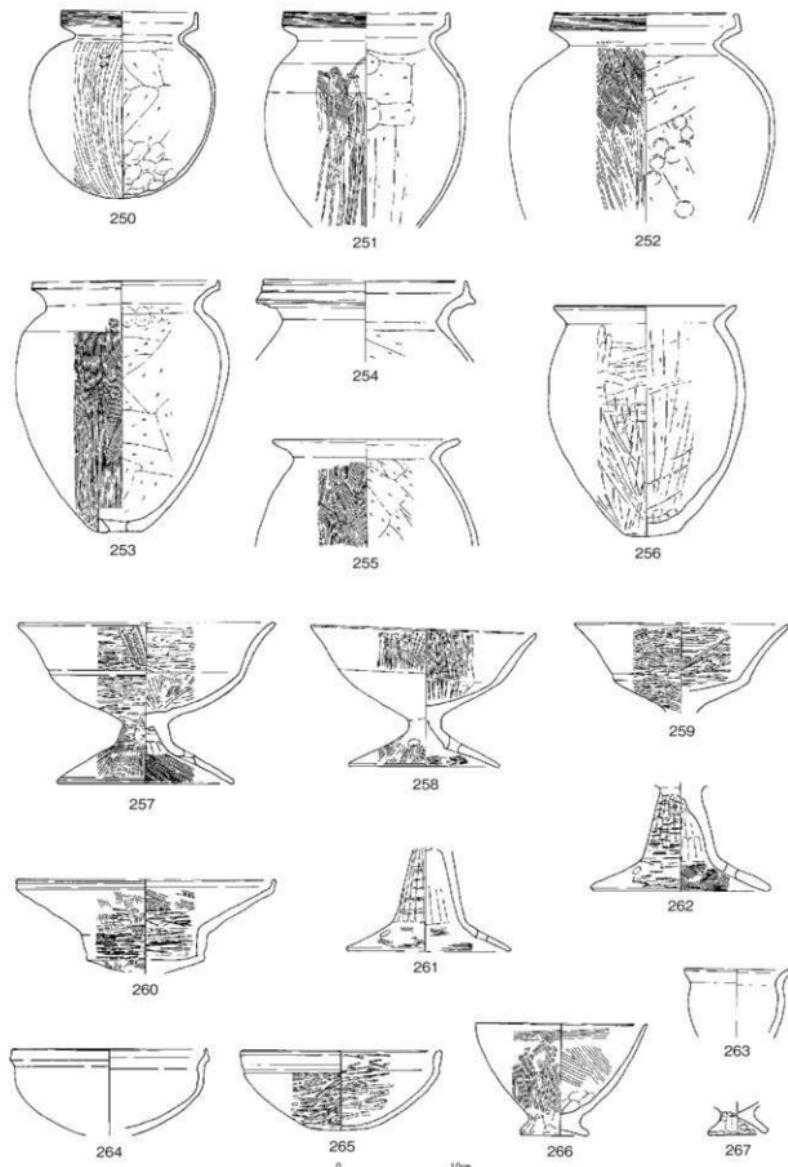
第45図 溝4 (1/60)

縁部は丸く収める。一方、土師器の甌250は球体の胴部から上方に立ち上がる二重口縁に沈線文8条が、肩部に刺突文がタテに2か所認められる。甌251は長胴の体部から上方に立ち上がる二重口縁に沈線文7条が、肩部に刺突文がヨコに2か所認められる。甌252は肩部が張った長胴の体部から上方に立ち上がる二重口縁に沈線文8条が認められる。高杯260は杯部下半から大きく外方に開く口縁部



0 10cm

第46図 溝4出土遺物① (1/4)



第47図 満4出土遺物② (1/4)

をもち、二重口縁に凹線文が2条みられる。高杯261・262の脚部は長脚で円孔が3個みられる。高杯260～262は精製粘土を使用していると思われる。時期は弥・後・Ⅲ～古・前・Ⅱと考えられる。

溝5（第5・48図）

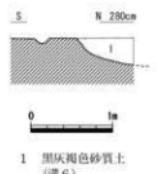
1B区中央付近に位置する。流路は北西—南東方向である。断面形は楕円形で、規模は上端幅18cm、底面幅4cm、深さ6cm、床面標高は245cmを測る。遺物は弥生土器の壺・甕・高杯・鉢の破片等が出土している。第48図 溝5・6（1/60）
時期は弥・後・Ⅳと推定される。

溝6（第5・48図）

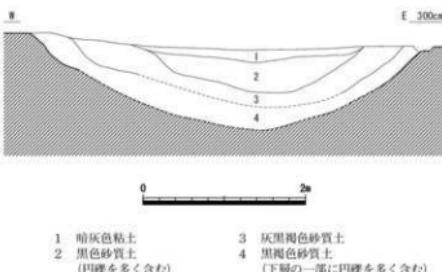
1B区中央付近に位置し、溝5と並行する。流路は北西—南東方向である。断面形は皿形と推測され、規模は上端幅70cm以上、深さ34cm以上、床面標高は226cm以下を測る。遺物は弥生土器の壺・甕・高杯・鉢の破片等が出土している。
調査所見では、溝6は溝1・8と同一溝とされる。これを踏まえれば、時期は弥・後・Ⅲ～古・前・Ⅰと推定される。

溝7（第5・49図）

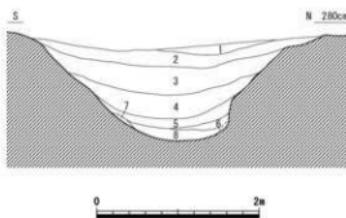
2A区北側に位置する。流路は北西—南東方向である。断面形は皿形と推測され、規模は上端幅480cm、底面幅110cm、深さ119cm以上、床面標高は167cm以下を



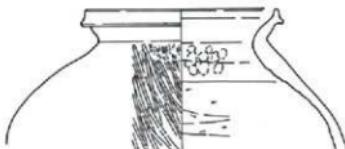
第48図 溝5・6（1/60）



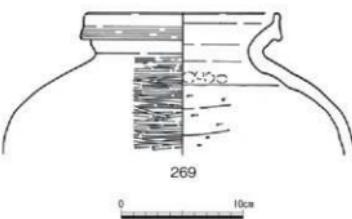
第49図 溝7（1/60）



- 1 淡黄褐色細砂質土
- 2 茶褐色砂質土
- 3 單褐色細砂質土
- 4 灰黑色砂質土
(土器・炭を多く含む)
- 5 淡灰褐色細砂質土
- 6 灰褐色細砂質土
- 7 灰褐色粘質土
- 8 灰色粘質土



268



269

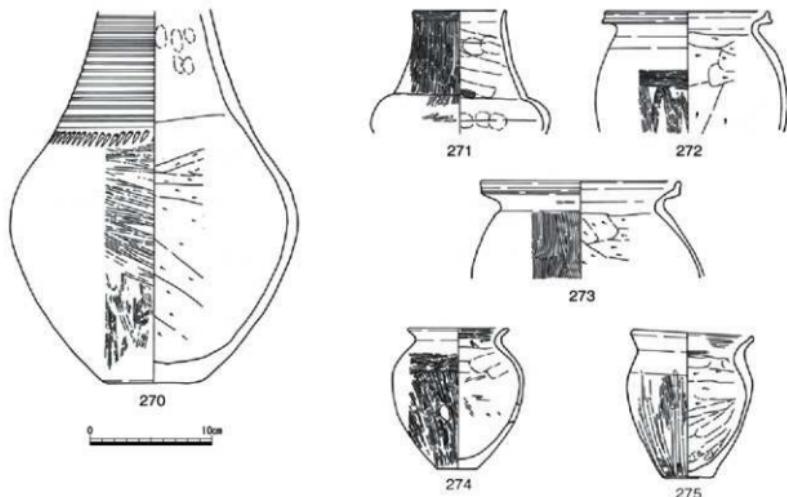
第50図 溝8（1/60）・出土遺物①（1/4）

測る。遺物は土師器の壺の破片等が出土している。遺構の位置関係から、溝7は溝3と同一溝の可能性がある。これを踏まえれば、時期は弥・後・IV～古・前・Iと推定される。

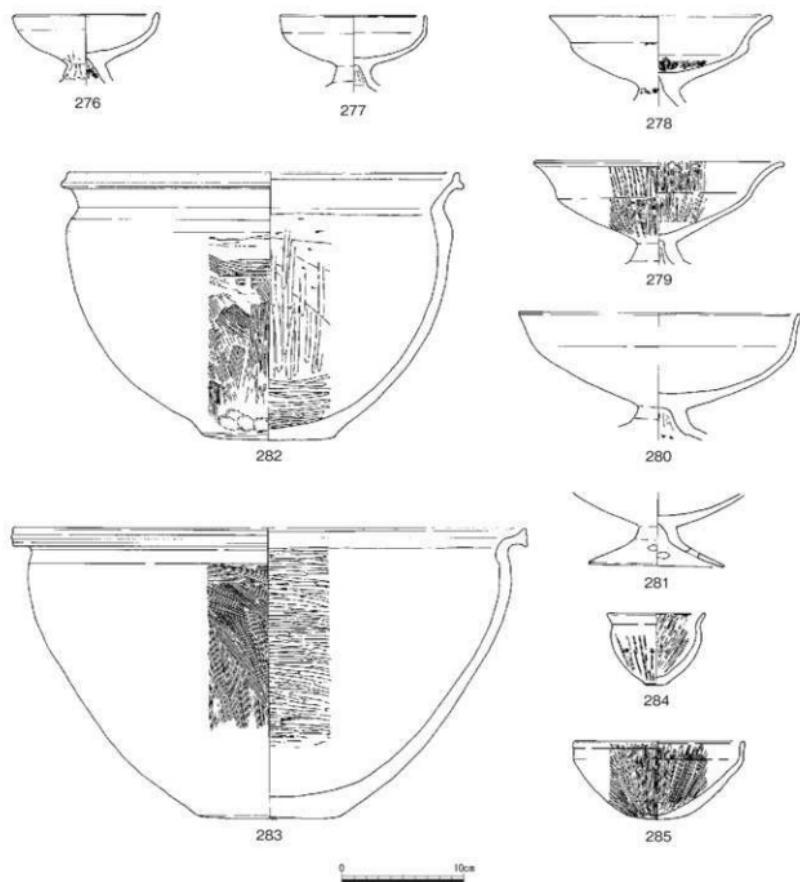
溝8（第5・50～52図、図版16）

2A区南側に位置する。流路は北西～南東方向である。断面形は逆台形で、規模は上端幅362cm、底面幅105cm、深さ128cm、床面標高は132cmを測る。調査所見に準じれば、溝8は溝1・6と同一溝とされる。

遺物は弥生土器の壺268～271、甕272～275、高杯276～281、鉢282～285の他、サヌカイト片や焼土塊等が出土している。壺268・269は胴部から短く外反して、上下に拡張・肥厚する口縁部をもつ短頸広口壺であり、壺269は口縁部に四線文3条が認められる。壺270は頸部に沈線文19条が、肩部に刺突文がみられる。壺271は胴部から内傾気味に立ち上がる口縁部をもち、精製粘土を使用していると思われる。甕272は胴部から短く屈曲して肥厚する口縁部をもつ。甕273は胴部から短く屈曲して上方に拡張する口縁部に四線文が2条程度みられる。甕274は小形品であり、胴部から短く外反する口縁部に丸く収めた端部をもち、胴部に穿孔が認められる。甕275も小形品であり、やや肩部が張った胴部から短く外反する口縁部に丸く収めた端部をもつ。高杯276は皿状を呈する杯部から外方に開く、高杯277は上方に立ち上がる口縁部をそれぞれもつ。高杯278・279は杯部下半から大きく外反して開く口縁部をもつ。高杯280は大形の杯部を有し、皿状を呈する杯部から外方に開く口縁部をもつ。高杯276・277・279・280・281はいずれも精製粘土を使用していると思われる。また、高杯281は脚部に円孔4個がみられる。鉢282・283は大形品である。平底から湾曲しながら立ち上がる胴部をもち、ここから短く外方に屈曲する口縁部に上下に拡張・肥厚する端部をもつ。鉢283は口縁部に四線文2条がみられる。鉢284は胴部から短く屈曲する口縁部に丸く収めた端部をもつ小形品である。鉢285は平



第51図 溝8出土遺物② (1/4)

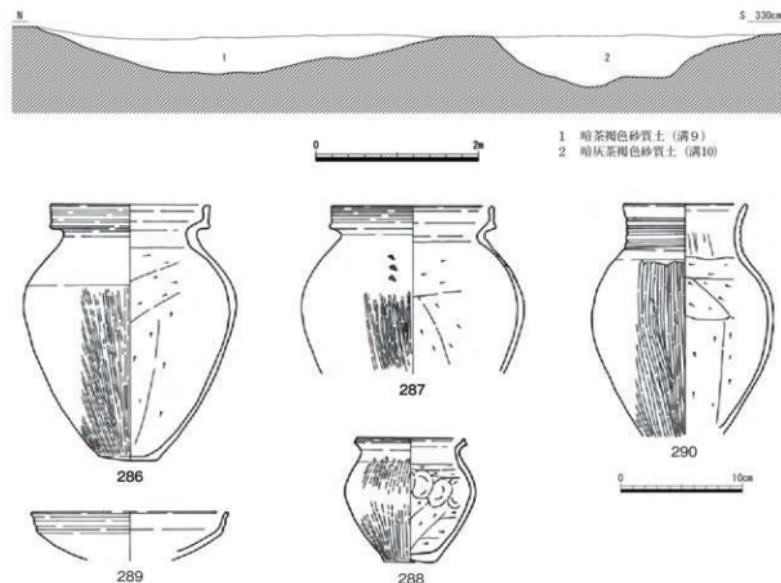


第52図 溝8出土遺物③ (1/4)

底で、外方に開く胴部から上方に立ち上がる口縁部をもつ。いずれも精製粘土を使用していると思われる。時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと考えられる。

溝9 (第5・53図)

1C区北側に位置する。流路は北東一南西方向である。断面形は皿形で、規模は上端幅502cm、底面幅110cm、深さ59cm、床面標高は266cmを測る。遺物は弥生土器の甕286～288、高杯289の他、壺・鉢の破片等が出土している。甕286は肩部が張った胴部から上方に立ち上がる二重口縁に回線文3条がみられる。甕287も二重口縁に回線文3条が、肩部に刺突文がタテに3か所認められる。また、器面に赤色顔料がみられる。甕288は小形品であり、口縁部に回線文2条が認められる。高杯289は杯部から外方に開く口縁部をもち、回線文2条が認められる。時期は弥・後・Ⅳと考えられる。



第53図 溝9・10(1/60)・出土遺物(1/4)

溝10(第5・53図)

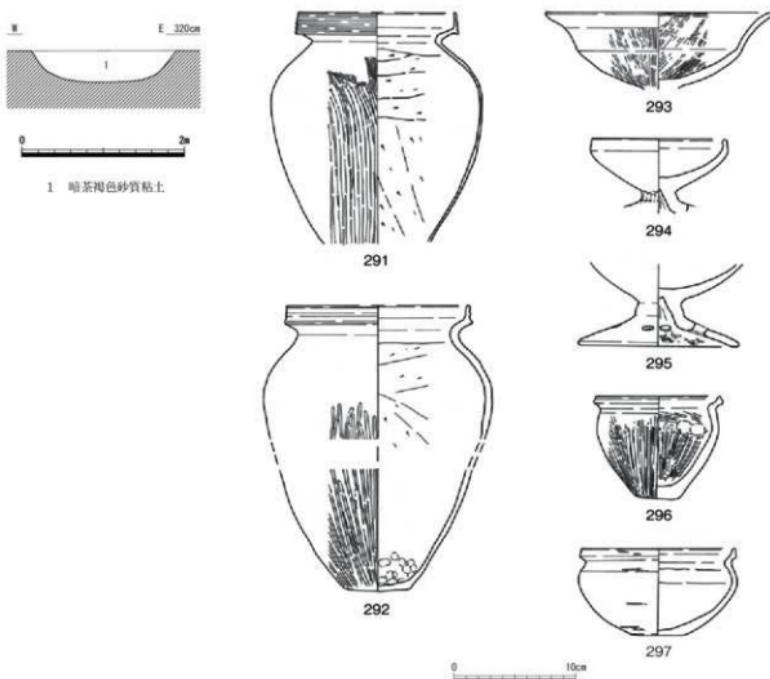
1C区中央付近に位置し、溝9と並行する。流路は北東—南西方向である。断面形は楕形で、規模は上端幅327cm、底面幅130cm、深さ62cm、床面標高は248cmを測る。遺物は弥生土器の壺290の他、甕、高杯、鉢の破片等が出土している。壺290は胴部から直立気味に立ち上がる頸部に丸く収めた口縁端部をもつ。頸部に沈線文5条(螺旋状)が認められる。また、被熱痕跡とススがみられる。時期は弥・後・Ⅲと考えられる。

溝11(第6・54図)

B区北側に位置する。流路は北—南方向である。残存状況は調査区境のため遺構東側は欠損している。断面形は皿形で、規模は上端幅177cm、底面幅85cm、深さ40cm、床面標高は260cmを測る。

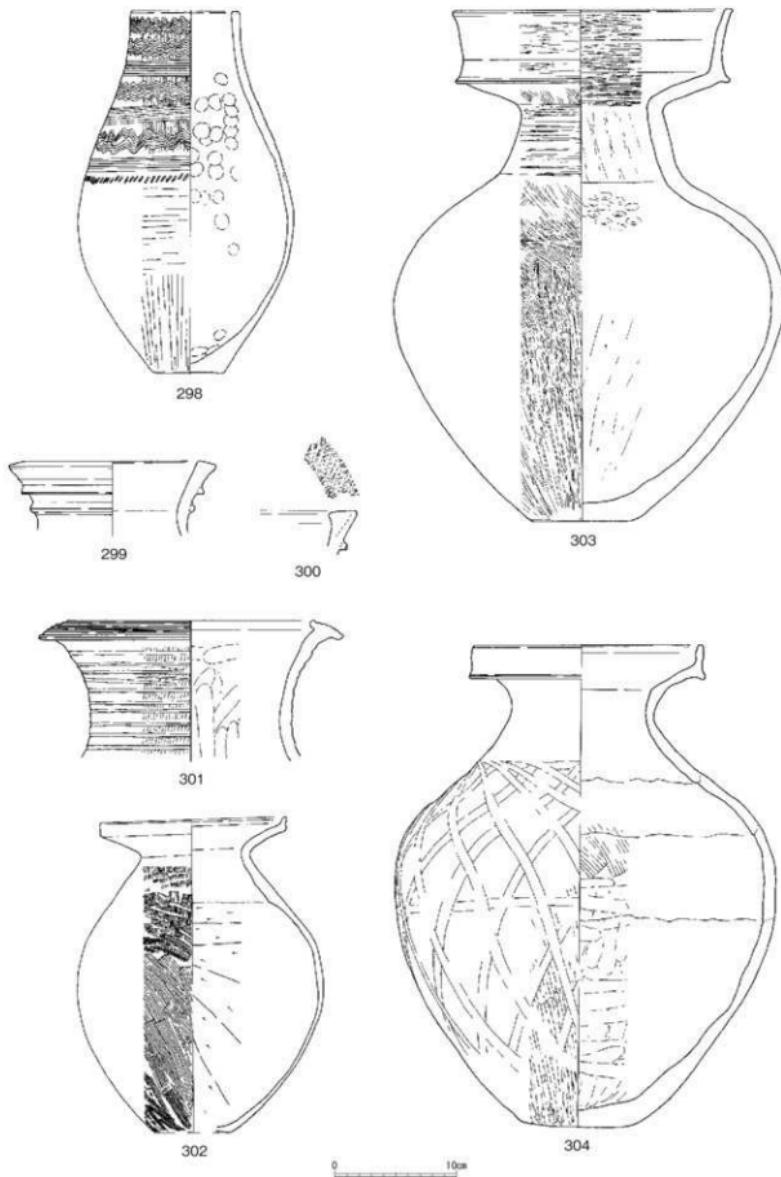
遺物は弥生土器の甕291・292、高杯293～295、鉢296・297の他、壺の破片等が出土している。甕291は胴部から上方に立ち上がる二重口縁に凹線文4条が、甕292は2条がそれぞれ認められる。なお、甕292の器高は図上復元のため判断としない。高杯293は杯部下半から大きく外反して開く口縁部をもつ。高杯294は杯部下半から内傾気味に口縁部が立ち上がる。いずれも精製粘土を使用していると思われ、高杯294は脚部に円孔がみられる。高杯295は脚部に円孔4個が認められる。鉢296は胴部から短く屈曲する口縁部をもつ小形品であり、口縁部に凹線文1条がみられる。鉢297は平底で、やや胴張りの体部から立ち上がる二重口縁をもつ。時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと考えられる。

遺構に伴わない遺物



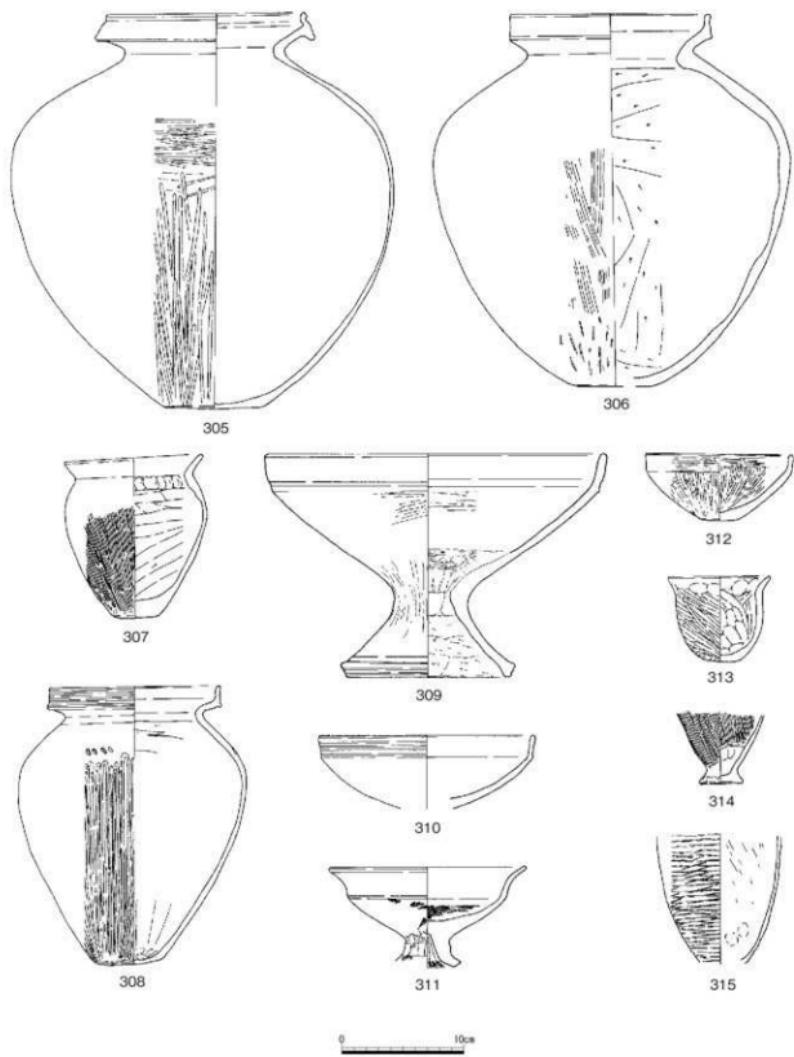
第54図 溝11 (1/60)・出土遺物 (1/4)

ここでは、古墳時代前期以前の遺構に伴わない遺物を報告する（第55・56図、図版17・18）。壺298は無頸壺であり、体部上半に沈線文・波状文が7～8条、肩部に刺突文が認められ、弥・中・Iと思われる。壺299は逆ハ字状に外反する口縁部に貼付突帯文が二段施されている。壺300は口縁部に貼付突帯文が施され、端部に斜格子文がみられる。時期は弥・中・IIと思われる。壺301は長頸壺であり、内傾気味に上下拉張した口縁部に凹線文6条、頸部に沈線文10条が認められ、弥・中・IIIと思われる。壺302は楕円体の胴部から外反する口縁部に上方に拡張する端部をもつ。壺303は胴張りの体部から内傾する頸部をもち、ここから外方に開いて、上方に大きく立ち上がる二重口縁をもつ。壺304は胴部から短く外反する頸部をもち、ここから外方に開いて、上方に立ち上がる二重口縁をもつ。表面にはカゴメの痕跡が認められる。なお、壺303・304は溝1に伴う可能性が高い。壺305は胴部から短く外反して上下に拡張する、壺306は上方に立ち上がる口縁部をもつ。いずれも短頸広口壺と類似するが、口径が最大胴部径に比べてやや小さいので壺と分類した。壺307は胴部から短く屈曲する口縁部をもつ小形品である。壺308は平底で、肩部が張った胴部から上方に立ち上がる二重口縁に凹線文が4条、肩部に刺突文がヨコに4か所認められる。高杯309は杯部下半から外傾する口縁部をもち、脚裾部に凹線文が2条認められる。また、円板充填の剥離痕跡がみられる。高杯310は杯部下半からやや外傾する口縁部に凹線文が5条認められる。高杯311は杯部下半から外反して開く口縁部をもち、脚部に



第55図 遺構に伴わない遺物① (1/4)

円孔が4個みられる。鉢312は平底で、外方に伸びる胴部から立ち上がる口縁部をもち、精製粘土を使用していると思われる。鉢313は手づくねの小形品である。鉢314は平底から逆ハ字状に開く胴部をもつ。製塙土器315はタタキメを明瞭に残す。以上は弥・後・II～IVを主体とする。



第56図 遺構に伴わない遺物② (1/4)

第3節 古墳時代中期以降の遺構・遺物

掘立柱建物

掘立柱建物1（第5・57図、図版4-3）

1A区中央付近に位置する。残存状況はP1~3の柱穴3本を検出しており、掘り方は円形である。規模は梁2間で、柱間寸法は梁150cm、梁行300cmを測り、棟方向はN 5° Eである。桁の詳細は不明である。遺物は図化し得ていないが、須恵器の杯・甕の破片等が出土している。出土遺物と調査所見に準じれば、時期は奈良時代と推測される。

掘立柱建物2（第5図）

2B区東側に位置する。残存状況は柱穴3本を検出しており、掘り方は円形である。埋土の詳細は不明である。規模は梁2間で、柱間寸法は梁150cm、梁行300cmを測り、棟方向はN 10° Wである。桁の詳細は不明である。柱穴の遺物は未確認である。調査所見に準じれば、時期は中世と推測される。

井戸

井戸1（第5図）

1A区中央付近に位置し、掘立柱建物1の東約1.2mに当たる。なお、断面形の形状や深さ、床面標高、及び遺構埋土の詳細は不明である。平面形はほぼ円形で、規模は長軸80cm、短軸60cmである。遺物は確認できていない。調査所見に準じれば、時期は不明とされるが、古墳時代中期以降と思われる。

炉

炉2（第6・58図）

B区南側に位置する。残存状況は南東側が側溝により欠損している。平面形は円形と推測され、断面形は皿形を呈する。規模は長軸59cm、深さ9cm、床面標高は301cmを測る。遺構に伴う遺物は出土していない。調査所見に準じれば、時期は不明とされるが、古墳時代中期以降と推測される。

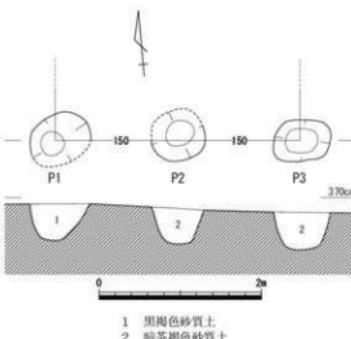
土坑

土坑2（第5・59図）

1A区西側に位置する。残存状況は完存している。遺構埋土の第1層では焼土塊を確認している。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈し、規模は長軸155cm、短軸92cm、深さ27cm、床面標高は305cmを測る。遺物は須恵器の杯身316、高杯317が出土している。時期は古墳時代後期と考えられる。

土坑3（第6・60図）

B区中央付近に位置する。残存状況は東隅が欠損している。平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を



第57図 掘立柱建物1 (1/60)

1 黒褐色砂質土
2 喀茶褐色砂質土

呈する。規模は長軸125cm、短軸123cm、深さ39cm、床面標高は281cmを測る。遺物は図化し得ていないが、土師器の椀・皿の破片等が出土している。時期は中世から近世と考えられる。

溝

溝12（第6・61図）

B区南側に位置する。流路は東一西方向である。断面形は皿形で、規模は上端幅40cm、底面幅15cm、深さ6cm、床面標高は308cmを測る。遺構に伴う遺物は出土していない。調査所見に準じれば、時期は古墳時代とされるが、少なくとも古墳時代中期以降と推測される。

溝13（第5・62図）

3A区東側に位置する。流路は北西一南東方向である。断面形は椀形で、規模は上端幅40cm、底面幅18cm、深さ8cm、床面標高は262cmを測る。遺物は確認できていない。調査所見に準じれば、時期は中世とされる。

溝14（第6・63図）

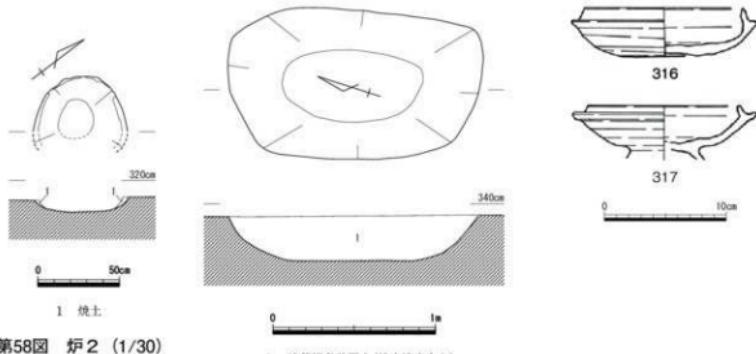
3B区西側に位置する。流路は北東一南西方向であるが、北東端で留まる。断面形は皿形で、規模は上端幅150cm、底面幅38cm、深さ45cm、床面標高は245cmを測る。遺物は土師器の椀318、皿319、鍋321、東播系捏鉢320や輪羽口C2の他、図化し得ていないが、土師器の甕、亀山焼の甕、青磁の碗の破片等が出土している。時期は中世と考えられる。

溝15（第5・64図）

1A区東側に位置する。流路は北西一南東方向である。遺構埋土は第1層の茶黄褐色砂質土に黄褐色砂質土のブロックが間層として入っている。断面形は逆台形で、規模は上端幅205cm、底面幅46cm、深さ59cm、床面標高は252cmを測る。遺物は確認できていない。調査所見に準じれば、時期は不明とされるが、少なくとも古墳時代中期以降と推測される。

溝16（第5・65図）

2A区東側に位置する。流路はやや蛇行気味の北東一南西方向であるが、南西端で土坑状に留まる。



第58図 炉2 (1/30)

1 塗土

第59図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

断面形は楕円形で、規模は上端幅149cm、底面幅42cm、深さ42cm、床面標高は245cmを測る。

遺物は土師器の椀322・323、鍋324、擂鉢325の他、図化し得ていな
いが、亀山焼の甕、須恵質の平瓦の
破片等が出土しており、南西端の土
坑状の窪みでは、獸骨が出土した。

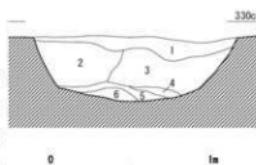
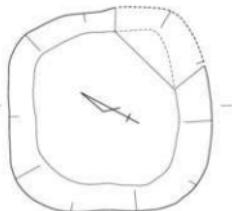
時期は中世と考えられる。

溝17（第5・66図）

A区中央付近に位置する。流路は北西—南東方向である。断面形は
楕円形で、規模は上端幅158cm、底面
幅82cm、深さ40cm、床面標高は210
cmを測る。調査所見に準じれば、時
期は古代と思われるが、位置関係と
床面標高から、溝2と同一の可能性
も考えられる。

溝18（第6・67図）

A区中央付近に位置する。流路は
北西—南東方向である。断面形は椭
円形で、規模は上端幅61cm、底面幅35
cm、深さ7cm、床面標高は289cmを



- 1 暗青灰色土
- 2 暗灰青色土 (暗茶黒褐色土を含む)
- 3 暗灰青色土 (暗茶黒褐色土を含む)
第2層より若干砂質土が少なめ
- 4 明茶褐色土 (灰青色土を若干含む)
- 5 暗灰青色粘質土 (砂質土含む)
- 6 灰青色土 (黄褐色土を含む)

第60図 土坑3 (1/30)



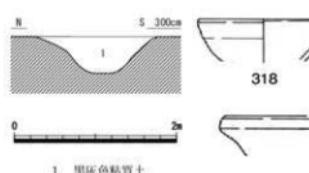
- 1 暗褐色土
(黑青色土を若干含む)

第61図 溝12 (1/60)



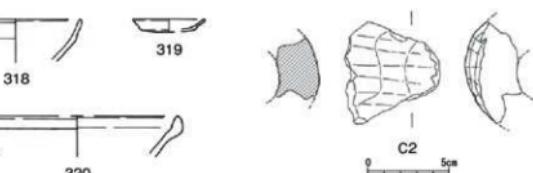
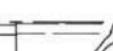
- 1 灰色粘土

第62図 溝13 (1/60)

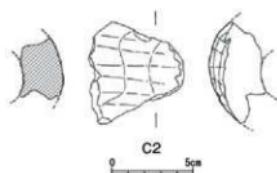


- 1 黑灰色粘質土

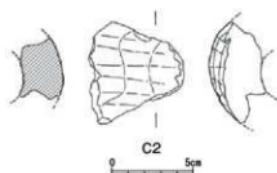
318



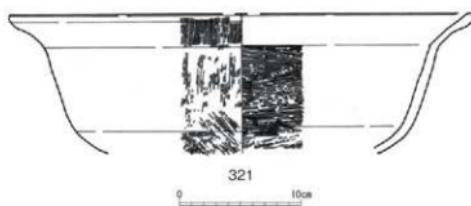
319



320



C2



321

10cm

第63図 溝14 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/4)

測る。遺物は確認できていない。調査所見に準じれば、時期は古墳時代とされるが、判然としない。

溝19（第6・68図）

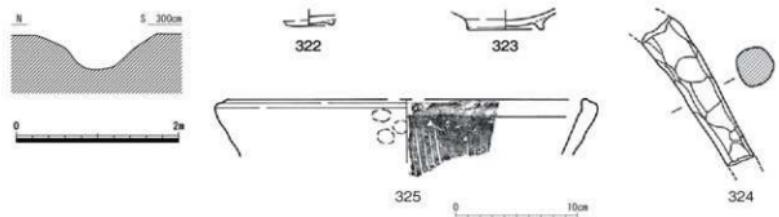
B区中央付近に位置する。流路は東一西方向である。断面形は皿形で、規模は上端幅90cm、底面幅40cm、深さ30cm、床面標高は282cmを測る。遺物は図化し得ていないが、須恵器の壺・甕、土師器の杯または椀・甕・カマドの破片等が出土している。調査所見に準じれば、時期は古墳時代とされるが、少なくとも古代以降と考えられる。

溝20（第6・68図）

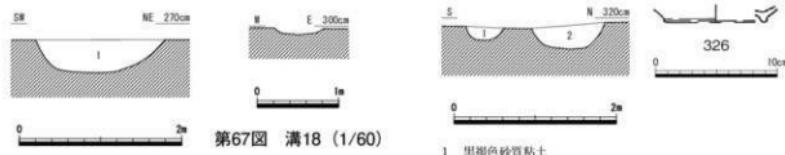
B区中央付近に位置する。流路は東一西方向である。断面形は皿形で、規模は上端幅45cm、底面幅20cm、深さ15cm、床面標高は293cmを測る。遺物は須恵器の高台杯身326が出土しており、図化し得ていないが、須恵器の壺・甕・高杯、土師器の杯または椀・カマドの破片等が出土している。調査所見に準じれば、時期は古墳時代とされるが、少なくとも古代以降と考えられる。

遺構に伴わない遺物

ここでは、古墳時代中期以降の遺構に伴わない遺物を報告する（第69図、図版18）。図化し得た遺物として、須恵器の杯蓋327、杯身328～330、高台杯身331、高杯332、壺333や土師器の高台椀334、小皿335・336、白磁の碗337、青磁の碗338、須恵器の軒平瓦339、平瓦340や土製円板C3、砥石S4・5がある。このうち、軒平瓦339は左第2単位の第1支葉が反転し、左第3単位が4本表現されて、その第2・3支葉が界線と繋がる均整唐草文をもった平城6663C型式系統である。



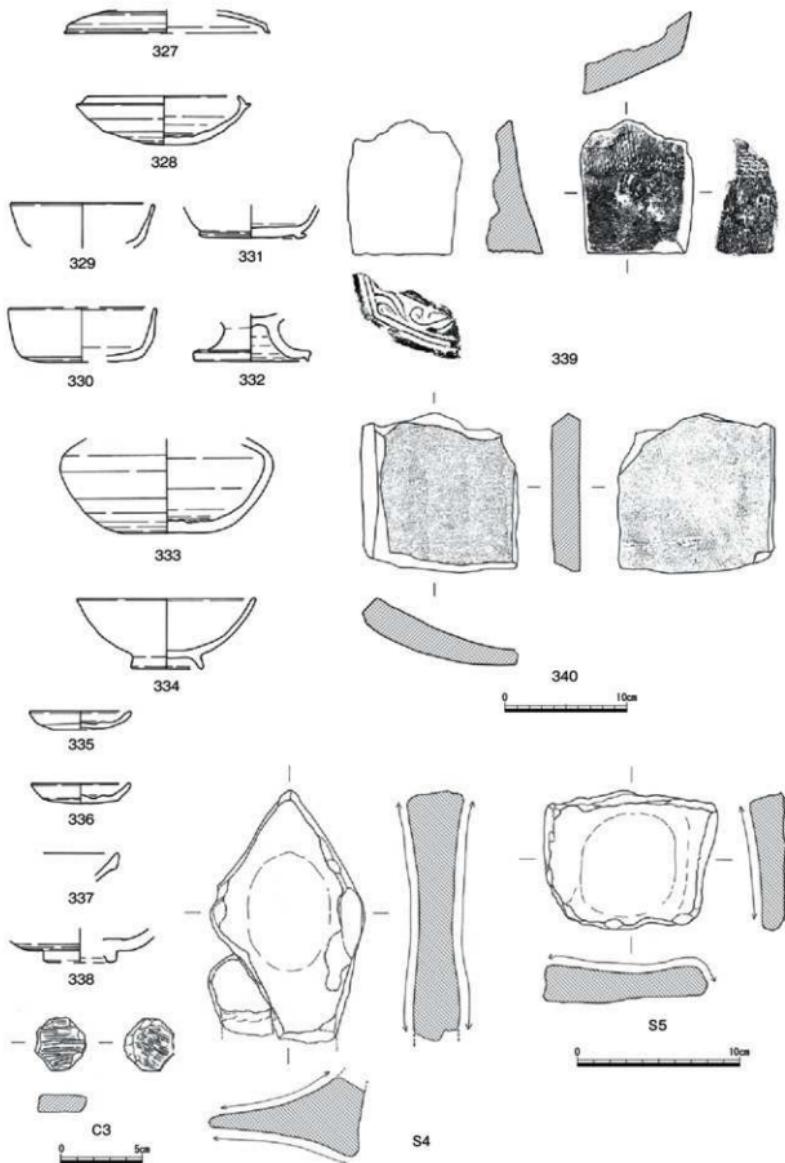
第65図 溝16（1/60）・出土遺物（1/4）



第66図 溝17（1/60）

- 1 黒褐色砂質粘土
(暗青灰色土を少量含む) (溝20)
- 2 喰茶褐色砂質粘土
(暗青灰色土を少量含む) (溝19)

第68図 溝19・20（1/60）・溝20出土遺物（1/4）



第69図 遺構に伴わない遺物③ (1/3・1/4)

第4節　まとめ

遺跡について

西加茂遺跡は弥・後・Ⅲから古・前・Ⅰの時期を主体に、足守川の自然堤防（微高地）上で営まれた集落跡であることが明らかになった。また、堅穴住居の高い遺構密度や集落の南縁辺を巡る大溝（溝1・6・8）からまとまって出土した土器により、この集落は大規模であったとみられる。そして、第1節で記したように、同遺跡の盛期は、最も近接する位置にある足守川加茂B遺跡⁽¹⁾の集落相と類似しており、両遺跡は同一のムラを構成していた可能性も考えられる。

足守川流域の弥生時代後期集落（高塚遺跡⁽²⁾、津寺遺跡⁽³⁾、加茂政所遺跡⁽⁴⁾、足守川加茂A・加茂B・矢部南向遺跡⁽⁵⁾）のあり方は、洪水等の自然環境の変化も考慮すべきであるが、流域一帯を統括する政治的な要因から集合体への何らかの移動の働きかけがなされたことを暗示しており、微高地（各遺跡・ムラ）間相互の再編状況は、いすればクニへの統合に繋がるとする見方がある⁽⁶⁾。西加茂遺跡の本格的な集落形成の開始は弥・後・Ⅲ以降であるが、この時期は足守川右岸丘陵に位置する楯築遺跡⁽⁷⁾（同遺跡南約750m）やこれに後続する鯉喰神社遺跡⁽⁸⁾（同遺跡南西約550m）の墳丘墓が築造された頃に当たる。のことから、同遺跡は首長繼承の新たな祭祀形態の出現を契機とした足守川流域の集落の大改編・統合⁽⁹⁾によって誕生した新集落と捉えることもできる。そして、弥・後・Ⅳ以降にみられる同集落の衰退は、当地ではスムーズな首長繼承が行われなかった可能性があり、こうしたことによつて連動して、さらなる集落の再編成（津寺遺跡への回帰）が起きたためと推察する。

遺物について

西加茂遺跡では、溝1を中心とする遺構や包含層から土器が大量に出土した。ただし、資料の一括性の面で評価が難しく、ここでは弥・後・Ⅲから古・前・Ⅰの幅で総体的な特徴について記す⁽¹⁰⁾。

壺は短く内傾する頸部から大きく立ち上がる二重口縁をもつ2・3・36・46～57・240・242～244・303・304と口縁部が立ち上がる、または上下に拡張・肥厚する30・58～61・219・302があり、わずかに長頸壺248・249・270もみられる。これらの口縁部には回線文・沈線文や斜格子文・鋸歯文を加飾したものがあり、頸部に沈線文、肩部に刺突文を施したものもある。このうち、盤状に開く口縁部をもつ51や下方に拡張された口縁端部をもつ53・54は特徴的な形態といえる。さらに、表面全体に赤色顔料が塗布された46やカゴメの痕跡がある304は注目される。一方、短頸広口壺21・66～69・245・268・269も一定量あり、それぞれの口縁部に回線文を施したものがある。この他、球体や楕円体の胴部をもつ短頸直口壺75・76や短く外反する口縁部をもつ220、直立した頸部に沈線文を施した290も少量認められる。小形品としては、直口または口縁部が内傾する35・77・78・271がある。台付壺では楕円体の胴部から内傾する口縁部をもち、脚部に円孔4個が伴う79・81がみられる。なお、8は玉葱形の胴部の上下に断面三角形の細い突帯が巡る小形の直口壺と推定され、集落内祭祀と墳墓祭祀の神具として未分化であったと可能性が推察される⁽¹¹⁾。

甕は大きく立ち上がる二重口縁にヨコナデを施している31・87～92・225～227がある。また、二重口縁に回線文を施す4・37・82～85・286・287・291・292・308があり、287・308は肩部に刺突

文がみられる。形態をみると、82~84・286・292・308は平底状、4はやや丸い底部を呈する。土師器としては、二重口縁に沈線文を施す38・86・250~252がみられ、86・250・251は肩部に刺突文が認められる。形態をみると、86・251・252は長胴、250は球体の体部を呈する。また、器壁は極めて薄くなる。こうした二重口縁に凹線文・沈線文を施すこれらの土器の差異は、古墳時代初頭に定型化するいわゆる「吉備型甕」の形成過程を現すものである。一方、この遺跡では「く」字状の口縁部をもつ甕も比較的多く認められ、上下に拡張・肥厚する口縁端部をもつ10・22・93~110・222~224があり、口縁部に凹線文を施したものもある。このうち、胴部からヨコ方向に短く屈曲する口縁部をもつ99は特徴的な形態といえる。また、拡張や肥厚しない、または丸い口縁端部をもつ5・9・24・111~126・228~234・256・274・275・307があり、口縁部が外方に長く開く112や外方に伸びる125・126・229・230は特徴的な形態といえる。体部の形態をみると、24・123は深鉢状、119・120は丸みの少ない長胴、122は下彫れた長胴、231はやや胴張り、232は球体の胴部を呈する等多種である。また、86・90・123・222・253には底部に穿孔がみられる。なお、小形品の87・100・226・234・274・275・288・307は形態的特徴から、また、短頸広口壺と類似する305・306は口径が最大胴部径に比べてやや小さいことから、ここでは甕として取り扱った。

高杯は杯部下半から大きく外反して聞く口縁部を有する11~14・25・26・33・34・40・132~135・278・279・293・311があり、主にタテ方向のヘラミガキを施している。一方、杯部下半から逆八字状に聞く口縁部を有する1・39・127~131・235・236・257~259があり、主に内外面にヨコ方向の丁寧なヘラミガキを施している。こうした両者の形態・調整の差異は、弥・後・Ⅲから弥・後・Ⅳの移行期で認められ、前者から後者に変化する。さらに、楕・皿状を呈する杯部から外方に聞く、または立ち上がる口縁部をもつ136~142・145・276・277・280・294があり、141は口縁部に凹線文がみられ、145は口縁部に屈曲した端部を、280は大形の杯部をもつ。さらに、杯部下半から立ち上がる口縁部に凹線文を施す17・289・310や楕状を呈する杯部から立ち上がる段状の二重口縁をもつ143・144がある。以上の高杯には、基本的に短脚の裾部に円孔4個が伴う。この他、口縁部に鋸歯文と波状文が施された装飾高杯の146が認められる。土師器としては、杯部下半から大きく外方に聞く口縁部をもち、二重口縁に凹線文がみられる260や長脚の裾部に円孔が3個伴う261・262がある。なお、今回出土した多くの高杯には精製粘土の使用がみられ、127・258には赤色顔料が認められる。

鉢は形態が多種であり、容量も差異が大きい。大形品としては、湾曲気味に立ち上がる胴部から短く外方に屈曲する口縁部に、上下に拡張・肥厚する端部をもつ164~170・282・283があり、口縁部に凹線文を施した165・169・170・283がある。また、外方に聞く胴部から立ち上がる口縁部をもつ185・186もみられる。中形品としては、外方にあるいは湾曲して聞く胴部から内傾、または立ち上がる口縁部をもつ18・19・42~44・147~159・265・285・312がみられ、凹線文を施した171・175・176、底部に穿孔をもつ178がある。さらに、湾曲する胴部から短く屈曲する口縁部に丸い端部をもつ179~183、外方に聞く胴部から口縁部が伸びる161~163、丸底で湾曲する胴部から口縁部が伸びる160、半球体を呈する胴部から口縁部が伸びる237が認められる。この他、大きく湾曲する胴部をもつ7、口縁部の加工・面取りを行い、片口部を作り出している184、口颈部にタテ方向の注口部をもつ239は特徴的な形態といえる。小形品としては、筒形で胴部下半に鋸歯文・沈線文が施された精製品の206、胴部から短く屈曲する口縁部をもつ284や凹線文を施した296、平底か

ら逆ハ字状に開く胴部をもつ314・手づくね土器の203・205・313、ミニチュア土器の27・204が認められる。その他の特徴として、7・237・239にはタタキメが認められ、また、一定量の中・小形品の鉢には精製粘土の使用がみられる。165には赤色顔料が認められる。台付鉢は球体を呈する壺形の胴部をもち、口縁部と脚端部に凹線文、脚部に円孔が5個伴う28がある。また、上げ底から逆ハ字状に開く胴部をもつ187～197・266があり、187～194・266は丸く収めた口縁端部、195～197は立ち上がる口縁部をもつ。さらに、198～200は上げ底から湾曲して立ち上がる胴部から口縁部が伸び、201は二重口縁をもつ。また、わずかに精製粘土を使用しているものがみられる。

手焙り形土器をみると、216は一体化した作りであり、上部の片側に傾斜した楕円形の「窓」をもつ。217・218は2個体の鉢を重ねた形態であり、上部の片側に三角形の「窓」をもつ。製塩土器は214・215・315にタタキメがみられる。各時期を通じて、器台は確認できなかった。

なお、主に煮沸具として使用された甕には形態の大小を問わず、被熱痕跡やススが認められるものが多い。その一方で、壺219・290や鉢6・15・148・149・163・166・173・181・238・239、台付鉢198等にもこうした痕跡がみられる。近年、「煤・焦げの産状」により「弥生土鍋」の炊飯過程の復元が試みられており¹²⁾、こうした甕以外の器種に残る痕跡の由来やその炊飯方法、あるいは炊飯以外の使用方法・目的の可能性も含めて、今後検討・評価する必要があると考える。

註

- (1) 「足守川加茂A遺跡 足守川加茂B遺跡 足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 岡山県教育委員会 1995
- (2) 「高塚遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」150 岡山県教育委員会 2000
- (3) 「津寺遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」90 岡山県教育委員会 1994
「津寺遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」98 岡山県教育委員会 1995
「津寺遺跡3」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」104 岡山県教育委員会 1996
「津寺遺跡4」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」116 岡山県教育委員会 1997
「津寺遺跡5」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」127 岡山県教育委員会 1998
「津寺三本木遺跡 津寺一軒屋遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」142 岡山県教育委員会 1999
- (4) 「加茂政所遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」138 岡山県教育委員会 1999
- (5) 註(1) 文獻
- (6) 江見正己「第3章高塚遺跡 第4節まとめ 1 弥生時代の集落変遷」「高塚遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」150 岡山県教育委員会 2000
- (7) 近藤義郎編「楯築弥生埴丘墓の研究」楯築刊行会 1992
- (8) 平野泰司・岸本道昭「蛭喰神社弥生埴丘墓の弧帶石と特殊器台・壺」「古代吉備」第22集 2000
- (9) 註(6) 文獻
- (10) 河合忍「IV.各地の弥生土器及び並行期土器群の研究 3 四国・中国」「考古調査ハンドブック12 弥生土器」ニューサイエンス社 2015
平井典子「吉備南部における弥生後期土器の実相」「古代吉備」第28集 2017
- (11) 宇垣匡雅「特殊器台祭祀の性格とその普及」「古代吉備」第27集 2016
- (12) 徳澤啓一・河合忍・石田為成「弥生土鍋の炊飯過程とスス・コゲの産状」「考古学リーダー9 土器研究の新視点—縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理—」大手前大学史学研究所 2007

表2 遺構一覧表

竪穴住居

遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (m ²)	底面標高 (cm)	中央穴・上戸 (cm)			上戸 (cm) (オット)	時期	備考
						平面形	長×短	深さ			
竪穴住居1	方形	280		263						弥・後・IV	壁体溝あり
竪穴住居2	方形	345		236						弥・後・IV	壁体溝あり
竪穴住居3	円形	(616)		(29.2)	209					弥・後・III～IV	壁体溝あり
竪穴住居4	円形	(500)		(19.6)	263				(104) × 50以上 × 35	弥・後・IV	
竪穴住居5	不整円形	(410)		(13.2)	252	楕円形				弥・後・III～IV	壁体溝あり
竪穴住居6	隅丸方形	(470)		(17.3)	230	楕円形	80 × 64	54	70以上 × 54 × 35	弥・後・III	
竪穴住居7	円形	(280)		(6.2)	282					弥・後・III～IV	炕上面、壁体溝あり
竪穴住居8	円形	(420)		(13.8)	230				108 × 57 × 50	弥・後・III	壁体溝あり
竪穴住居9	円形	(410)		(13.2)	235	楕円形	70以上 × 61	18		弥・後・III	壁体溝あり
竪穴住居10	円形	(340)		(9.1)	270					弥・後・III	上蓋頭まり、壁体溝あり
竪穴住居11	円形	(500)		—	270	楕円形	126 × 92	48		弥・後・IV	壁体溝あり
竪穴住居12	円形	(600)		(28.3)	264					弥・後・III～IV	
竪穴住居13	円形	(540)		(22.9)	240	楕円形	70以上 × 72	48		弥・後・IV～古・前・I	高床部あり
竪穴住居14	円形	(440)		(15.2)	255					弥・後・IV	

掘立柱建物

遺構名	規模 (間)	柱間寸法 (cm)		桁行 (cm)	梁行 (cm)	面積 (m ²)	棟方向	掘り方	時期
		桁	梁						
掘立柱建物1	— × 2			150		300	N 5° E	円	奈良時代
掘立柱建物2	— × 2			150		300	N 10° W	円	中世

井戸

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (cm)	時期
井戸1	円		80	60			古墳時代中期以降

炉

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (cm)	時期
炉1	楕円形		27	17		347	弥生時代後期
炉2	(円)	皿形	59		9	301	古墳時代中期以降

土坑

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (cm)	時期
土坑1	楕円形	逆台形	(80)		32	27	305
土坑2	楕円形	皿形	155		92	27	305
土坑3	隅丸方形	逆台形	125		123	39	281

溝

遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底端幅 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (cm)	時期	備考
溝1	(逆台形)	280以上		115以上	168以下	弥・後・III～古・前・I	溝6・8と同一か
溝2	逆台形	215	48	48	210	弥・後・IV	溝17と同一か
溝3	楕形	621	88	100	180	弥・後・IV	溝7と同一か

遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (cm)	時期	備考
溝4	楕形	534		140以上	185以下	弥・後・Ⅲ～古・前・Ⅱ	
溝5	楕形	18	4	6	245	弥・後・Ⅳ	
溝6	(皿形)	70以上		34以上	226以下	弥・後・Ⅲ～古・前・Ⅰ	溝1・8と同一か
溝7	(皿形)	480	110	119以上	167以下	弥・後・Ⅳ～古・前・Ⅰ	溝3と同一か
溝8	逆台形	362	105	128	132	弥・後・Ⅲ～Ⅳ	溝1・6と同一か
溝9	皿形	502	110	59	266	弥・後・Ⅳ	
溝10	楕形	327	130	62	248	弥・後・Ⅲ	
溝11	皿形	177	85	40	260	弥・後・Ⅲ～Ⅳ	
溝12	皿形	40	15	6	308	古墳時代中期以降?	
溝13	楕形	40	18	8	262	中世	
溝14	皿形	150	38	45	245	中世	
溝15	逆台形	205	46	59	252	古墳時代中期以降?	
溝16	楕形	149	42	42	245	中世	
溝17	皿形	158	82	40	210	古代?	溝2と同一か
溝18	皿形	61	35	7	289	古墳時代?	
溝19	皿形	90	40	30	282	古代以降	
溝20	皿形	45	20	15	293	古代以降	

「数値」は実測値または復元値、「(数値)」は不確実な復元値。「空欄」は実測・復元不可を示す。

表3 新旧遺構対照表

遺構名	旧遺構名	遺構名	旧遺構名	遺構名	旧遺構名
盤穴住居1	3 A区H 5	掘立柱建物1	1 A区建物	溝7	2 A区M 1
盤穴住居2	3 A区H 4 (新)	掘立柱建物2	2 B区建物	溝8	2 A区M 3
盤穴住居3	3 A区H 4 (古)	井戸1	1 A区井戸 ¹	溝9	1 C区溝1
盤穴住居4	3 A区H 3	炉1	1 A区炉 ¹	溝10	1 C区溝2
盤穴住居5	3 A区H 2	炉2	B区No.5炉 ²	溝11	B区No.4溝
盤穴住居6	3 A区H 1	土坑1	1 A区土坑2	溝12	B区No.6溝
盤穴住居7	3 B区H 2	土坑2	1 A区土坑1	溝13	3 A区M 3
盤穴住居8	3 B区H 1	土坑3	B区No.1土坑	溝14	3 B区溝1
盤穴住居9	2 A区H 2	溝1	3 A区X・斜面堆積	溝15	1 A区溝状遺構
盤穴住居10	2 A区H 1	溝2	3 A区M 2	溝16	2 A区中近世溝・中世M
盤穴住居11	A区No.1住	溝3	3 A区M 1	溝17	2 A区2
盤穴住居12	A区No.2住	溝4	1 A区大溝	溝18	A区No.4溝
盤穴住居13	A区No.3住	溝5	1 B区溝 (M 1)	溝19	B区No.2溝
盤穴住居14	A区No.6住	溝6	1 B区溝 (M 2)	溝20	B区No.3溝

表4 遺物観察表

土器

発掘番号	遺構名	種類	器種	基盤			上部	残存状態	備考
				寸法	直径	最大厚			
1	盤穴住居4	陶生土器	高杯	16.8		0.6	褐色 (3YR7/6)	2mm以下の砂粒	口縁部1/2残
2	盤穴住居4	陶生土器	壺	17.8		0.6	褐色 (3YR7/6)	2mm以下1/2残	2mm以下1/2残
3	盤穴住居4	陶生土器	壺	17.4		0.6	褐色 (3YR7/6)	3mm以下の砂粒	口縁部1/3残
4	盤穴住居4	陶生土器	壺	15.2	5.0	20.0	24.7 褐色 (3YR6/6)	2mm以下の砂粒	口縁部1/1残 ひざみん
5	盤穴住居4	陶生土器	壺	15.1		16.2	0.71 (7.3YR6/3)	1.5mm以下	口縁部1/3残 ××
6	盤穴住居4	陶生土器	壺	14.6		14.2	褐色 (3YR5/2)	1mm以下の砂粒	口縁部1/3残 明暗、黒斑、××
7	盤穴住居4	陶生土器	壺	22.6	5.5	29.6	23.01 細網状 (3YR4/4)	2mm以下の砂粒	底部1/1残 メタリック、黒斑
8	盤穴住居6	陶生土器	壺			16.6	0.6	褐色 (3YR6/6)	2mm以下の砂粒 斜面部分1/1残、表面斑紋、体側平行斜面?
9	盤穴住居6	陶生土器	壺	13.0		0.6	褐色 (3YR7/6)	2mm以下の砂粒	口縁部1/1残 ××
10	盤穴住居6	陶生土器	壺	13.9		17.7	0.65 白色 (2.5YR6/2)	2mm以下の砂粒 3mm以下の砂粒	口縁部1/3残 ××
11	盤穴住居6	陶生土器	高杯	15.0	10.6	8.1	褐色 (3YR6/6)	褐色粘土 1mm以下1/2残	褐色粘土 1mm以下1/2残 ×
12	盤穴住居6	陶生土器	高杯	15.2		0.6	褐色 (2.5YR6/6)	褐色粘土 1mm以下1/2残	褐色粘土 1mm以下1/2残 メタリック?

周薪番号	造営名	調査	基準	計画		立場	立場	荷主	荷主状態	参考
				計画	実績					
13	整穴鋤鋤6	拘生土器	高杯	16.6	11.6	10.1	黒色(SV86/6)	整穴鋤6	1mm以下/2箇所	脚部内孔4箇
14	整穴鋤鋤6	拘生土器	高杯	18.0	11.5	9.5	黒色(SV86/6)	整穴鋤6	1mm以下/2箇所	脚部内孔4箇
15	整穴鋤鋤6	拘生土器	鉢	(24.6)	22.0	(8.0)	にじむ・黒色(SV87/4)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	黒斑、△△
16	整穴鋤鋤7	拘生土器	台付壺		13.7	(3.5)	黒色(SV87/6)	整穴鋤7	1mm以下/2箇所	脚部内孔2箇
17	整穴鋤鋤7	拘生土器	高杯	17.0		(5.9)	にじむ・黒色(SV87/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	脚部内孔3箇
18	整穴鋤鋤7	拘生土器	鉢	13.5	14.4	(6.3)	黒色(SV86/6)	整穴鋤7	1mm以下/2箇所	1mm以下/4箇
19	整穴鋤鋤7	拘生土器	鉢	(15.3)	4.4	13.5	(5.6)	にじむ・黒色(SV86/6)	1mm以下/2箇所	1mm以下/2箇
20	整穴鋤鋤8	拘生土器	壺	18.2		(3.5)	黒色(SV87/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文3条、赤色斑料
21	整穴鋤鋤8	拘生土器	壺	15.9	8.6	20.4	24.4 黒色(SV87/6)	6mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	脚部内孔、黒斑、△△△△
22	整穴鋤鋤8	拘生土器	壺	18.6	6.0	21.7	22.3 明赤褐色(SV85/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	黒斑、△△△
23	整穴鋤鋤8	拘生土器	壺	13.1	14.3	(6.6)	黒色(SV87/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	黒斑、△△△
24	整穴鋤鋤8	拘生土器	壺	11.1	2.9	13.0	16.1	にじむ・黒色(SV87/6)	1mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇
25	整穴鋤鋤8	拘生土器	高杯	18.8		(5.5)	明赤褐色(SV85/6)	整穴鋤8	1mm以下/2箇所	1mm以下/4箇
26	整穴鋤鋤8	拘生土器	高杯	21.2		(6.4)	黒色(SV87/6)	整穴鋤8	1mm以下/2箇所	1mm以下/4箇
27	整穴鋤鋤8	拘生土器	鉢	6.6	2.2	3.5	黒色(PY88/2)	1mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1ニキアラ土器
28	整穴鋤鋤8	拘生土器	台付壺	15.2	12.8	18.4	19.3 黒色(SV87/6)	3mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文2条、脚部内孔5箇、脚部内孔2条、黒斑、△△△
29	整穴鋤鋤9	拘生土器	壺	10.5		(3.0)	にじむ・黒色(SV87/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	黒斑、△△△
30	整穴鋤鋤10	拘生土器	壺	18.8		(7.7)	黒色(SV86/6)	4.5mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文2条
31	整穴鋤鋤10	拘生土器	壺	15.5		(11.4)	黒色(SV86/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	黒斑、△△
32	整穴鋤鋤10	拘生土器	壺	15.7		(3.9)	浅黄褐色(SV86/4)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔
33	整穴鋤鋤10	拘生土器	高杯	15.6		(6.6)	黒色(SV86/6)	3mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	黒斑、△△△
34	整穴鋤鋤10	拘生土器	高杯	17.3		(6.0)	黒色(SV87/6)	整穴鋤10	1mm以下/の鉢形	黒斑
35	整穴鋤鋤13	拘生土器	壺	9.6		(7.5)	黒色(SV87/6)	整穴鋤13	1mm以下/の鉢形	5mm以下/の縫合
36	整穴鋤鋤13	拘生土器	壺	17.4		(8.3)	にじむ・黒色(SV87/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文2条、黒斑
37	整穴鋤鋤13	拘生土器	壺	(15.0)	21.4	(12.4)	黒色(2.5Y2/1)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文2条、黒斑、△△
38	整穴鋤鋤13	土罐	壺	14.6		(16.9)	にじむ・黒色(SV87/6)	3mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文2条、黒斑、△△△
39	整穴鋤鋤13	拘生土器	高杯	18.1		(6.6)	にじむ・黒色(SV87/6)	整穴鋤13	1mm以下/の鉢形	3mm以下/の縫合
40	整穴鋤鋤13	拘生土器	高杯	17.6		(7.5)	黒色(SV86/6)	整穴鋤13	1mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇
41	整穴鋤鋤13	拘生土器	高杯	12.6		(6.7)	明赤褐色(2.5YR5/6)	1mm以下/の鉢形	脚部内孔	△△△
42	整穴鋤鋤13	拘生土器	鉢	14.3	5.0	14.8	3.7 黒色(SV86/6)	1mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔4箇、△△△
43	整穴鋤鋤13	拘生土器	高杯	15.6	5.1	16.0	7.5 浅黄褐色(2.5Y7/3)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	黒斑
44	整穴鋤鋤13	拘生土器	鉢	17.5	5.2	18.6	8.4 にじむ・黒色(SV87/3)	2.5mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔5箇 (注記)1箇は定形
45	整穴鋤鋤14	拘生土器	壺	8.1		(13.1)	にじむ・黒色(SV86/6)	整穴鋤14	1mm以下/の鉢形	脚部内孔、△△△
46	満1	拘生土器	壺	18.7	6.1	34.0	43.3 (12.5) にじむ・黒色(SV86/6)	1mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔12～13箇 (脚部内孔7), 脚部内孔2条、脚部内孔、△△△△
47	満1	拘生土器	壺	19.0		(14.2)	黒色(SV86/6)	1mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔、△△△△
48	満1	拘生土器	壺	19.6		(8.1)	にじむ・黒色(SV87/3)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文2条、黒斑
49	満1	拘生土器	壺	(21.4)		(5.5)	黒色(2.5Y8/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文2条、赤色斑料
50	満1	拘生土器	壺	(23.0)		(11.0)	にじむ・黒色(SV87/4)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	脚部内孔
51	満1	拘生土器	壺	(24.6)		(13.8)	にじむ・黒色(SV86/6)	4mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	脚部次級文16条 (脚部内孔7), 脚部内孔2条、脚部内孔、△△△△
52	満1	拘生土器	壺	21.4		(18.3)	にじむ・黒色(SV87/3)	1mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文2条
53	満1	拘生土器	壺	26.4		(34.6)	にじむ・黒色(SV87/3)	1mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文2条
54	満1	拘生土器	壺	28.2		(8.3)	黒色(SV86/6)	4mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔
55	満1	拘生土器	壺	29.4		(9.2)	にじむ・黒色(SV86/6)	5mm以下/の縫合	1mm以下/2箇	1mm内孔格子文、脚部内孔2条、黒斑
56	満1	拘生土器	壺	21.8		(9.0)	黒色(SV87/6)	2.5mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔線文内斜格子文
57	満1	拘生土器	壺			(3.1)	黒色(SV86/6)	1.5mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔文2条、脚部内孔2条
58	満1	拘生土器	壺	29.0	8.7	35.6	42.6 にじむ・黒色(SV87/3)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔文2条、脚部内孔、△△△△
59	満1	拘生土器	壺	17.1	5.2	22.4	28.5 にじむ・黒色(SV87/4)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔文2条、脚部内孔、△△△△
60	満1	拘生土器	壺	22.0		36.7	(24.0) にじむ・黒色(SV86/6)	6mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔文2条
61	満1	拘生土器	壺	19.0		27.3	(26.2) にじむ・黒色(SV86/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	1mm内孔文2条、赤色斑料、黒斑
62	満1	拘生土器	壺			(37.5)	にじむ・黒色(SV87/4)	5mm以下/の縫合	1mm以下/2箇	1mm内孔文2条
63	満1	拘生土器	壺	30.9		(22.0) にじむ・黒色(SV86/6)	2mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	脚部次級文6条、脚部内孔文、脚部内孔文、黒斑	
64	満1	拘生土器	壺	17.0		(7.6) にじむ・黒色(SV87/4)	1mm以下/の鉢形	1mm以下/2箇	脚部次級文3条、脚部内孔文	

周薪番号	造橋名	種別	基準	計測値 (cm)		位置 外観	船上	荷役状態	参考	
				計測 位置	基準 位置					
65	満1	舟生土器	直	19.1	9.6	浅黄色(3YR8/4)	2m以下/の静か	右側部1/2段		
66	満1	舟生土器	直	18.4	(7.1)	橙色(5YR7/6)	2m以下/の静か	右側部1/2段	黒塗	
67	満1	舟生土器	直	19.2	29.4	(36.6)	に点・黄褐色 (10Y8/2)	3m以上/の静か	右側部1/6段	
68	満1	舟生土器	直	18.6	30.8	(38.0)	に点・黄褐色(5YR8/4)	1m以下/の静か	右側部1/2段	
69	満1	舟生土器	直	18.2	32.4	34.3	灰白色(3YR8/2)	2m以下/の静か	右側部1/1段	
70	満1	舟生土器	直	7.4	21.4	(39.2)	橙色(2.5YR8/6)	4m以下/の静か	左側部3/4段	
71	満1	舟生土器	直	7.1	29.2	(24.0)	に点・黄褐色 (10Y8/2)	2m以下/の静か	左側部1/3段	
72	満1	舟生土器	直	6.0	27.0	(39.0)	明赤褐色(5YR5/6)	4m以下/の静か	左側部1/1段	
73	満1	舟生土器	直	6.6	30.2	(31.4)	に点・黄褐色 (2.5YR5/4)	3m以下/の静か	左側部1/1段	
74	満1	舟生土器	直	9.0	34.5	(38.7)	に点・黄褐色 (2.5YR5/4)	1.5m以下の静か	左側部1/3段	
75	満1	舟生土器	直	9.8	23.3	(21.4)	に点・黄褐色 (2.5YR5/3)	4.5m以下の静か	右側部1/6段	
76	満1	舟生土器	直	10.9	5.8	32.8	26.6	に点・黄褐色 (2.5YR6/3)	2m以下/の静か	右側部1/1段
77	満1	舟生土器	直	(9.7)	10.3	(10.3)	橙色(2.5YR6/6)	爆裂割れ、2m以下/の静か	右側部1/7段	
78	満1	舟生土器	直	12.8	(11.1)	橙色(2.5YR6/6)	爆裂割れ、2m以下/の静か	右側部1/2段		
79	満1	舟生土器	右斜	9.0	13.8	(37.7)	橙色(5YR7/6)	1m以下/の静か	右側部1/1段	
80	満1	舟生土器	右斜		14.3	(35.7)	橙色(2.5YR8/6)	爆裂割れ、1	右側部1/1段	
81	満1	舟生土器	右斜		12.0	(16.5)	橙色(5YR6/6)	爆裂割れ、1	右側部1/4段	
82	満1	舟生土器	横	14.4	4.5	16.2	29.2	暗赤色(10YR5/5)	2m以下/の静か	右側部1/6段
83	満1	舟生土器	横	15.2	5.8	17.6	29.2	に点・黄褐色 (2.5YR7/4)	1m以下/の静か	右側部1/1段
84	満1	舟生土器	横	15.4	5.0	17.8	14.7	暗白色(10YR8/2)	2m以下/の静か	右側部1/1段
85	満1	舟生土器	横	17.3	19.6	(8.2)	に点・黄褐色 (2.5YR6/4)	3.5m以下の静か	右側部1/2段	
86	満1	土器部	横	14.2	4.6	20.8	22.8	暗白色(2.5Y7/7)	2m以下/の静か	右側部1/4段
87	満1	舟生土器	横	13.5	4.0	11.2	16.5	に点・黄褐色 (10YR7/2)	1m以下/の静か	右側部2/3段
88	満1	舟生土器	横	10.7	4.3	13.9	16.0	暗褐色(10YR7/2)	1.5m以下の静か	右側部1/1段
89	満1	舟生土器	横	13.3	3.7	16.2	19.5	浅褐色(7.5YR7/3)	1m以下/の静か	右側部1/1段
90	満1	舟生土器	横	14.2	5.1	20.6	22.8	明赤褐色(5YR7/2)	1m以下/の静か	右側部1/1段
91	満1	舟生土器	横	14.7	5.6	20.1	23.9	に点・黄褐色 (2.5Y7/3)	2m以下/の静か	右側部1/4段
92	満1	舟生土器	横	14.8		18.6	20.6	に点・黄褐色 (10YR7/2)	2m以下/の静か	右側部1/2段
93	満1	舟生土器	横	12.1	4.0	13.4	14.3	暗褐色(7.5YR7/4)	2.5m以下の静か	右側部1/1段
94	満1	舟生土器	横	12.2	3.7	11.9	15.5	浅褐色(2.5Y7/3)	2m以下/の静か	右側部1/2段
95	満1	舟生土器	横	15.6	5.2	16.5	19.7	に点・黄褐色 (10YR6/2)	1.5m以下の静か	右側部1/1段
96	満1	舟生土器	横	(10.3)	5.3	18.4	16.6	暗褐色(5YR6/6)	2m以下/の静か	右側部1/1段
97	満1	舟生土器	横	14.5	5.0	16.2	20.8	橙色(7.5YR6/6)	1.5m以下/の静か	右側部1/1段
98	満1	舟生土器	横	12.0	4.2	13.5	16.5	暗褐色(10YR6/2)	2m以下/の静か	右側部1/1段
99	満1	舟生土器	横	12.7	4.6	12.1	15.2	暗褐色(2.5Y6/4)	2m以下/の静か	右側部1/1段
100	満1	舟生土器	横	13.1	3.8	12.9	11.6	に点・黄褐色 (10YR7/2)	1m以下/の静か	右側部4/5段
101	満1	舟生土器	横	15.5		(6.3)	浅褐色(10YR8/2)	2m以下/の静か	右側部1/8段	
102	満1	舟生土器	横	14.6	4.2	16.6	20.3	暗白色(10YR6/2)	1m以下/の静か	右側部1/1段
103	満1	舟生土器	横	(12.2)	6.2	16.3	14.7	に点・黄褐色 (10YR7/2)	2m以下/の静か	右側部1/1段
104	満1	舟生土器	横	17.8	19.5	(11.5)	暗褐色(2.5Y6/2)	2m以下/の静か	右側部1/1段	
105	満1	舟生土器	横	15.8	5.0	19.3	25.7	に点・黄褐色 (2.5Y7/4)	2m以下/の静か	右側部1/3段
106	満1	舟生土器	横	16.6	4.8	20.3	23.5	浅褐色(2.5YR6/2)	2m以下/の静か	右側部1/1段
107	満1	舟生土器	横	15.8	4.0	14.5	12.1	に点・黄褐色 (10YR7/2)	1m以下/の静か	右側部1/3段
108	満1	舟生土器	横	15.3	5.2	18.6	22.3	に点・黄褐色 (2.5Y7/3)	1m以下/の静か	右側部1/1段
109	満1	舟生土器	横	15.1	7.6	22.6	26.6	暗褐色(2.5Y7/3)	2m以下/の静か	右側部1/4段
110	満1	舟生土器	横	13.1	4.6	16.8	26.6	暗褐色(10YR4/1)	2m以下/の静か	右側部1/1段
111	満1	舟生土器	横	12.2	3.9	12.6	13.7	に点・黄褐色 (10YR7/2)	1.5m以下の静か	右側部1/1段
112	満1	舟生土器	横	16.1	4.6	17.2	26.6	橙色(7.5YR6/8)	1m以下/の静か	右側部1/1段
113	満1	舟生土器	横	18.1	6.5	18.2	18.5	暗白色(10YR8/1)	1.5m以下/の静か	右側部1/1段
114	満1	舟生土器	横	(13.4)	4.2	16.2	18.0	浅褐色(2.5Y7/3)	2m以下/の静か	右側部1/1段
115	満1	舟生土器	横	14.8	4.7	20.2	20.0	に点・黄褐色 (10YR7/2)	2m以下/の静か	右側部1/1段
116	満1	舟生土器	横	15.9	4.5	19.0	23.4	浅黃色(2.5Y7/2)	1.5m以下/の静か	右側部1/1段

周番号	造橋名	河別	基材	計測値 (cm)			位置	船上	荷役状態	備考	
				100	101	最高					
117	溝1	舟生土器	實	12.2	4.6	13.6	12.4	汽渕色(2.5YR7/3)	1m以下の砂粒	船頭1/残	黒斑、薄熱、エヌ、ひずみ
118	溝1	舟生土器	實	11.9	5.9	16.0	16.1	汽渕色(10YR8/3)	2m以下の砂粒	船頭1/残	黒斑、エヌ
119	溝1	舟生土器	實	11.5	3.8	10.9	13.5	シジミ痕跡 (2.5YR5/2)	2.5m以下の砂粒	口頭部1/残	黒斑、エヌ
120	溝1	舟生土器	實	11.0	5.6	12.6	14.9	黒色(2.5YR2/1)	2m以下の砂粒	口頭部1/残	黒斑、エヌ
121	溝1	舟生土器	實	14.3	5.4	17.1	20.9	灰白色(3YR8/2)	1.5m以下の砂粒	船頭1/残 (注)定形	タマメ、船頭学孔、黒斑、薄熱、エヌ、ひずみ
122	溝1	舟生土器	實	11.3	2.5	12.3	14.9	灰渕色(3YR6/6)	1m以下の砂粒	口頭部1/3残	黒斑、薄熱、エヌ
123	溝1	舟生土器	實	11.7	4.5	17.6	17.7	暗色(2.5YR8/6)	2m以下Vの砂粒	船頭1/1残	船頭孔、黒斑
124	溝1	舟生土器	實	14.2	4.2	18.2	22.0	浅渕色(7.5YR6/1)	2m以下の砂粒	船頭1/1残	タマメ、黒斑、薄熱、エヌ、ひずみ
125	溝1	舟生土器	實	15.0	4.6	18.8	21.7	シジミ痕跡 (2.5YR7/4)	2m以下の砂粒	口頭部1/2残	黒斑
126	溝1	舟生土器	實	15.4		21.2	13.8	シジミ痕跡 (2.5YR7/4)	2m以下の砂粒	口頭部1/2残	X X
127	溝1	舟生土器	高杯	16.6	(12.0)		9.9	赤渕色(3YR4/4)	積載點上	口頭部1/2残	船頭内孔4個、赤色斑、ひずみ
128	溝1	舟生土器	高杯	16.6	12.7		16.4	暗色(3YR6/6)	積載點上、1.5m以下の砂粒 7mm程度の埋合む	口頭部1/2残	船頭内孔4個
129	溝1	舟生土器	高杯	18.0	10.7		16.7	暗色(2.5YR6/8)	積載點上	口頭部1/1残 記録	船頭内孔4個
130	溝1	舟生土器	高杯	19.3	11.8		11.1	暗色(5YR7/6)	積載點上 1m以下の砂粒	口頭部1/2残	船頭内孔4個
131	溝1	舟生土器	高杯	20.5	13.2		11.9	浅渕色(10YR7/2)	2m以下の砂粒	船頭1/1残	船頭内孔4個、黒斑、ロゼム
132	溝1	舟生土器	高杯	16.5	10.6		8.6	暗色(3YR6/6)	積載點上 1m以下の砂粒	口頭部1/3残	船頭内孔4個、ひずみ
133	溝1	舟生土器	高杯	17.9	10.7		8.8	赤色(10Y5/6)	2m以下の砂粒 4mm程度の埋合む	口頭部1/1残 (注)定形	船頭内孔4個、ひずみ
134	溝1	舟生土器	高杯	16.8			8.8	明赤渕色(5YR5/6)	積載點上	口頭部1/2残	黒斑
135	溝1	舟生土器	高杯	12.2			(16.0)	暗色(3YR6/6)	1m以下の砂粒	口頭部1/1残	船頭内孔4個
136	溝1	舟生土器	高杯	12.7	11.0		9.3	暗色(3YR6/6)	1m以下の砂粒	船頭1/2残	船頭内孔4個、ひずみ
137	溝1	舟生土器	高杯	13.3			(7.2)	暗色(2.5YR6/8)	積載點上 1m以下の砂粒	口頭部1/4残	黒斑
138	溝1	舟生土器	高杯	14.6	10.4		8.9	暗色(2.5YR6/6)	積載點上 4mm程度の埋合む	船頭1/2残	船頭内孔4個
139	溝1	舟生土器	高杯	14.8			(4.6)	明赤渕色(2.5YR5/6)	積載點上 1m以下の砂粒	口頭部1/2残	黒斑
140	溝1	舟生土器	高杯	15.8	11.5		9.2	暗色(3YR6/6)	1.5m以下の砂粒 6mm程度の埋合む	口頭部1/1残	船頭内孔4個、黒斑
141	溝1	舟生土器	高杯	17.2	11.7		8.8	暗色(3YR6/6)	1m以下の砂粒	口頭部1/3残 (注)定形	口頭内孔4個と2・3条、船頭内孔4個、ひずみ
142	溝1	舟生土器	高杯	(17.3)	12.1		10.0	暗色(2.5YR6/6)	4mm程度の埋合む	船頭1/1残	船頭内孔4個
143	溝1	舟生土器	高杯	17.8			(9.5)	明赤渕色(2.5YR5/6)	積載點上 1m以下の砂粒	口頭部1/4残	黒斑
144	溝1	舟生土器	高杯	17.6	11.0		11.2	暗色(3YR6/6)	積載點上 1m以下の砂粒	口頭部1/2残	船頭内孔4個、ひずみ
145	溝1	舟生土器	高杯	(20.0)			(7.6)	灰渕色(5YR4/2)	2m以下の砂粒	口頭部1/6残	黒斑
146	溝1	舟生土器	高杯	20.6			3.4	暗色(3YR6/6)	積載點上 1m以下の砂粒	口頭部1/2残	口頭側面丸く2・3条、船頭内孔4個、ひずみ
147	溝1	舟生土器	鉢	14.2	4.2	14.0	8.5	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	積載點上	船頭1/2残	黒斑
148	溝1	舟生土器	鉢	(14.1)	3.7	14.2	7.9	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	1m以下の砂粒	船頭1/1残	黒斑、薄熱、エヌ、ひずみ
149	溝1	舟生土器	鉢	14.8	4.0	15.0	7.9	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	2m以下の砂粒	船頭1/1残	黒斑、薄熱、エヌ
150	溝1	舟生土器	鉢	14.1	4.4	14.2	8.3	汽渕色(10YR8/4)	2m以下の砂粒	口頭部1/1残	黒斑、薄熱、エヌ
151	溝1	舟生土器	鉢	19.0	5.3	19.2	8.8	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	1m以下の砂粒	口頭部1/1残	黒斑
152	溝1	舟生土器	鉢	15.8	3.6	16.0	7.5	シジミ痕跡 (2.5YR6/3)	2.5m以下の砂粒	船頭1/1残	黒斑
153	溝1	舟生土器	鉢	16.6	5.0	17.4	8.1	暗色(2.5YR6/6)	2.5m以下の砂粒 7.5mm程度の埋合む	船頭1/1残	黒斑、ひずみ
154	溝1	舟生土器	鉢	14.6	5.4	17.0	5.4	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	1.5m以下の砂粒 (注)定形	船頭1/1残 (注)定形	ひずみ
155	溝1	舟生土器	鉢	15.3	3.8	15.9	7.5	灰白色(2.5YR5/6)	1m以下の砂粒	船頭1/1残	黒斑、ひずみ
156	溝1	舟生土器	鉢	16.3		17.4	(5.9)	暗赤渕色(2.5YR5/6)	1m以下の砂粒	口頭部1/2残	黒斑
157	溝1	舟生土器	鉢	16.5	5.8	17.4	8.7	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	2m以下の砂粒	口頭部1/6残	黒斑、ひずみ
158	溝1	舟生土器	鉢	17.2	5.3	18.2	9.0	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	1.5m以下の砂粒 4mm程度の埋合む	船頭1/1残	黒斑
159	溝1	舟生土器	鉢	17.9	5.3	18.8	8.2	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	2.5m以下の砂粒 7.5mm程度の埋合む	船頭1/4残	黒斑
160	溝1	舟生土器	鉢	14.2	3.4		5.3	黄渕色(10YR6/2)	2m以下の砂粒	口頭部1/1残	黒斑
161	溝1	舟生土器	鉢	12.3	3.6		8.8	シジミ痕跡 (2.5YR7/3)	1m以下の砂粒 2.5m以下の砂粒	船頭1/1残	ひずみ
162	溝1	舟生土器	鉢	13.3	4.3		7.1	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	1m以下の砂粒	船頭1/1残 (注)定形	黒斑
163	溝1	舟生土器	鉢	18.9	4.5		10.2	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	2m以下の砂粒	口頭部1/3残	黒斑、薄熱、エヌ
164	溝1	舟生土器	鉢	22.6	6.2	20.0	11.4	シジミ痕跡 (2.5YR7/2)	3m以下の砂粒	口頭1/1残	黒斑
165	溝1	舟生土器	鉢	22.7	8.2	21.4	16.6	シジミ痕跡 (2.5YR6/4)	2m以下の砂粒	船頭1/1残	口頭側面丸く3条、赤色斑、ひずみ
166	溝1	舟生土器	鉢	22.9	6.3	22.6	16.5	シジミ痕跡 (2.5YR6/4)	2m以下の砂粒	船頭1/1残	黒斑、エヌ、ひずみ
167	溝1	舟生土器	鉢	(22.6)	6.0	27.9	18.1	灰渕色(10YR5/2)	2m以下の砂粒	船頭1/1残	黒斑
168	溝1	舟生土器	鉢	35.2	9.3	35.7	17.1	シジミ痕跡 (2.5YR6/4)	2m以下の砂粒 4mm程度の埋合む	船頭1/1残	黒斑

周薪番号	造橋名	種別	基準	計測値 [cm]		計測	船上	荷役状態	備考		
				CB	WB						
169	満1	舟生土壠	鉢	39.0	12.0	36.0	17.5	△CB-△WB(△WB)/3	2m以下の砂粒 △CB部開礫文3条、黒斑 △CB部開礫文2条、黒斑		
170	満1	舟生土壠	鉢	(41.0)	10.8	38.4	24.2	△CB(△WB)/6	2m以下の砂粒 △CB部開礫文3条、黒斑		
171	満1	舟生土壠	鉢	11.3	2.7	11.0	6.6	△CB(△WB)/6	砂粒土 △CB部開礫文1条、黒斑、ひずみ		
172	満1	舟生土壠	鉢	14.3	3.5	13.0	7.7	△CB(△WB)/6	砂粒土 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒と碎石混在 △CB部の砂粒		
173	満1	舟生土壠	鉢	4.0	13.2	(8.2)	△CB-△WB(△WB)/2	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒と碎石混在 △CB部の砂粒			
174	満1	舟生土壠	鉢	(14.3)	4.8	13.4	8.2	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
175	満1	舟生土壠	鉢	14.8	3.4	15.0	8.9	△CB(△WB)/2	1m以下の砂粒 △CB部開礫文3条、黒斑、ひずみ		
176	満1	舟生土壠	鉢	14.9	4.2	14.6	9.2	△CB-△WB(△WB)/2	1m以下の砂粒 △CB部開礫文3条、黒斑、ひずみ		
177	満1	舟生土壠	鉢	15.0	5.6	14.7	9.5	△CB-△WB(△WB)/4	1m以下の砂粒 △CB部の砂粒		
178	満1	舟生土壠	鉢	15.9	4.8	14.2	7.3	△CB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒 △CB部開礫文3条、黒斑、ひずみ		
179	満1	舟生土壠	鉢	12.5	4.5	12.4	10.4	△CB-△WB(△WB)/4	2m以下の砂粒 △CB部開礫文3条、黒斑		
180	満1	舟生土壠	鉢	15.1		12.2	8.0	△CB-△WB(△WB)/4	2m以下の砂粒 △CB部開礫文3条、黒斑		
181	満1	舟生土壠	鉢	(13.2)	4.7	13.1	8.0	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部開礫文3条、黒斑、ひずみ		
182	満1	舟生土壠	鉢	16.3	5.3	15.2	10.8	△CB(△WB)/6	砂粒土 △CB部の砂粒		
183	満1	舟生土壠	鉢	21.5	6.0	21.6	16.0	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒と碎石混在 △CB部の砂粒		
184	満1	舟生土壠	鉢	19.7	18.7	(13.7)	10.4	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
185	満1	舟生土壠	鉢	(41.7)		39.0	(12.6)	△CB-△WB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
186	満1	舟生土壠	鉢	41.6		40.4	(34.6)	△CB-△WB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
187	満1	舟生土壠	白付鉢	11.1	4.0	8.0	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
188	満1	舟生土壠	白付鉢	12.7	4.5	7.7	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒と碎石混在 △CB部の砂粒			
189	満1	舟生土壠	白付鉢	13.1	3.8	7.6	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
190	満1	舟生土壠	白付鉢	(12.6)	3.8	8.2	△CB(△WB)/4	砂粒土 △CB部の砂粒			
191	満1	舟生土壠	白付鉢	12.7	4.4	8.8	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
192	満1	舟生土壠	白付鉢	13.3	5.0	7.4	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
193	満1	舟生土壠	白付鉢	13.6	4.4	7.9	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
194	満1	舟生土壠	白付鉢	16.4	6.1	7.5	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒と碎石混在 △CB部の砂粒			
195	満1	舟生土壠	白付鉢	12.2	3.4	12.7	7.6	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
196	満1	舟生土壠	白付鉢	15.5	7.2	15.8	8.0	△CB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
197	満1	舟生土壠	白付鉢	15.1	7.4	15.0	9.0	△CB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
198	満1	舟生土壠	白付鉢	14.7	3.6	7.9	△CB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
199	満1	舟生土壠	白付鉢	14.7	6.3	10.3	△CB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
200	満1	舟生土壠	白付鉢	(15.2)		9.7	△CB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
201	満1	舟生土壠	白付鉢	18.4	5.4	16.9	12.7	△CB(△WB)/6	砂粒土 △CB部の砂粒		
202	満1	舟生土壠	白付鉢			18.9	(17.0)	△CB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒と碎石混在 △CB部の砂粒		
203	満1	舟生土壠	鉢	7.5	2.4	4.5	△CB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
204	満1	舟生土壠	鉢	4.5	1.9	2.4	△CB(△WB)/6	砂粒土 △CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
205	満1	舟生土壠	鉢	2.3	6.3	(5.0)	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒			
206	満1	舟生土壠	鉢	(7.6)		10.3	△CB(△WB)/6	砂粒土 △CB部の砂粒			
207	満1	舟生土壠	鉢			3.7	(2.6)	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
208	満1	舟生土壠	鉢			4.0	(2.6)	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
209	満1	舟生土壠	鉢			5.5	(2.6)	△CB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
210	満1	舟生土壠	鉢			4.3	(3.0)	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
211	満1	舟生土壠	鉢			4.1	(2.0)	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
212	満1	舟生土壠	鉢			4.2	(2.1)	△CB-△WB(△WB)/4	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
213	満1	舟生土壠	鉢			4.4	(2.6)	△CB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
214	満1	舟生土壠	鉢			3.9	(5.0)	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
215	満1	舟生土壠	鉢			3.8	(5.7)	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
216	満1	舟生土壠	子母引形	10.5	6.4	17.2	26.5	△CB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒		
217	満1	舟生土壠	子母引形			14.6	3.4	17.4	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒	
218	満1	舟生土壠	子母引形			11.4	3.5	18.9	(16.0)	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒
219	満2	舟生土壠	鉢			16.1	6.0	18.6	23.0	△CB-△WB(△WB)/3	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒
220	満2	舟生土壠	鉢			13.6		22.8	(17.2)	△CB(△WB)/6	△CB部の砂粒 △CB部の砂粒

周番号	造橋名	種別	基準	計測値 (cm)		位置	船上	荷役状態	備考		
				計測	算入						
221	溝2	舟生土堀	重	5.9	22.6	(18.2) ○:△:○:△:○:△: (7.5)H7/4	2m以下の静鉄 5m以下の荷合む	船頭1/4段	タタキメ、黒鉄		
222	溝2	舟生土堀	重	15.0	5.0	17.8	23.8 ○:△:○:△: (7.5)H7/3	5m以下の静鉄	船頭1/4段 ○:△:○:△: (7.5)H7/4		
223	溝2	舟生土堀	重	14.1	4.3	16.4	19.6 ○:△:○:△: (7.5)H7/3	1m以下の静鉄	船頭1/4段	タタキメ、黒鉄、スズ	
224	溝2	舟生土堀	重	19.0	4.8	19.6	21.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/5	3m以下の静鉄	船頭1/4段	黒鉄、スズ	
225	溝2	舟生土堀	重	15.3	5.9	18.7	14.4 ○:△:○:△: (7.5)H6/4	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	タタキメ、黒鉄、スズ、鋼鉄、ひづみ	
226	溝2	舟生土堀	重	12.1	4.6	12.4	13.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/4	1m以下の静鉄	船頭1/4段	黒鉄、スズ、ひづみ	
227	溝2	舟生土堀	重	(14.8)		11.9	(12.1) ○:△:○:△: (7.5)H5/2	1m以下の静鉄	船頭1/2	黒鉄 ?	
228	溝2	舟生土堀	重	15.0	3.7	17.2	22.0 ○:△:○:△: (7.5)H7/4	2m以下の静鉄	船頭1/4段	タタキメ、黒鉄、スズ、ひづみ大	
229	溝2	舟生土堀	重	17.4	3.6	18.2	21.4 ○:△:○:△: (7.5)H7/4	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	黒鉄、スズ	
230	溝2	舟生土堀	重	16.3	3.0	20.6	23.3 ○:△:○:△: (7.5)H5/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	黒鉄、スズ	
231	溝2	舟生土堀	重	(17.5)	5.7	18.0	13.4 ○:△:○:△: (7.5)H5/2	3m以下の静鉄	船頭1/4段	タタキメ、鉄筋木支柱取扱、黒鉄、スズ、ひづみ	
232	溝2	舟生土堀	重	14.4	6.7	16.0	14.5 ○:△:○:△: (7.5)H5/2	1.5m以下の静鉄	船頭1/4段	タタキメ、黒鉄、スズ	
233	溝2	舟生土堀	重	14.2	3.8	13.2	14.2 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	1m以下の静鉄	船頭1/4段	黒鉄、スズ	
234	溝2	舟生土堀	重	(11.6)	4.2	10.9	20.6 ○:△:○:△: (7.5)H7/3	2m以下の静鉄	船頭1/4段	黒鉄、薄熱	
235	溝2	舟生土堀	高杯	16.2	11.5	16.9	9.9 ○:△:○:△: (7.5)H7/4	積載軸 1m以下の静鉄	船頭2/3段	船頭内孔4個	
236	溝2	舟生土堀	高杯	17.3	10.8	11.4	10.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/3	1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	船頭2/3段	
237	溝2	舟生土堀	井	17.7	1.6	7.8	9.2 ○:△:○:△: (7.5)H4/1	1.5m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	タタキメ、黒鉄	
238	溝2	舟生土堀	井	17.5	5.5	17.0	12.0 ○:△:○:△: (7.5)H7/2	2m以下の静鉄	船頭1/4段	黒鉄、薄熱	
239	溝2	舟生土堀	井	17.8	5.2	16.3	12.1 ○:△:○:△: (7.5)H7/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	タタキメ、日向もつ、黒鉄、薄熱、スズ	
240	溝3	舟生土堀	重	19.6	30.6	(16.1) ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄 4m以下の荷合む	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	黒鉄、鉄筋、耐候性、耐候性、耐候性、耐候性	
241	溝4	舟生土堀	重	17.2		(8.1)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄 4m以下の荷合む	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	赤色鋼	
242	溝4	舟生土堀	重	(19.6)		(16.0)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	赤色鋼	
243	溝4	舟生土堀	重	19.1		(13.2)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄 7m以下の荷合む	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	赤色鋼	
244	溝4	舟生土堀	重	24.0		(12.2)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
245	溝4	舟生土堀	重	17.2		(18.5)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
246	溝4	舟生土堀	重	16.0	29.6	(21.5)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H7/2	2m以下の静鉄	船頭1/2段	黒鉄	
247	溝4	舟生土堀	重	13.2	18.0	(12.4)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H7/2	2m以下の静鉄	船頭1/4段	ひづみ	
248	溝4	舟生土堀	重			(16.2)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	1m以下の静鉄	船頭3/5段	船頭改歴11条、耐候耐火、黒鉄	
249	溝4	舟生土堀	重			(14.2)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄	船頭3/5段	船頭改歴11条、耐候耐火	
250	溝4	土陣堀	重	11.0	2.0	15.1	15.3 ○:△:○:△: (7.5)H7/3	1m以下の荷合む	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
251	溝4	土陣堀	重	(13.4)		16.5	(17.7)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H7/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄
252	溝4	土陣堀	重	15.0		21.2	(17.2)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H7/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄
253	溝4	舟生土堀	重	15.2	4.2	17.3	20.5 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄 2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	船頭2/3段、船頭改歴11条、耐候耐火、黒鉄	
254	溝4	舟生土堀	重	16.5		(16.7)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄 4m以下の荷合む	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
255	溝4	舟生土堀	重	15.4		(8.0)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H5/3	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
256	溝4	舟生土堀	重	14.8	4.4	18.1	15.8 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	タタキメ	
257	溝4	舟生土堀	高杯	(21.0)	14.3		13.2 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	3m以下の静鉄	船頭1/4段	船頭内孔4個、黒鉄	
258	溝4	舟生土堀	高杯	16.4	12.0		11.6 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	4m以下の静鉄 1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	船頭内孔4個、赤色鋼、黒鉄	
259	溝4	舟生土堀	高杯	(17.3)		(7.2)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	4m以下の静鉄 1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
260	溝4	土陣堀	高杯	(21.1)		(7.2)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	4m以下の静鉄 1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
261	溝4	土陣堀	高杯	(13.2)		(8.4)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	4m以下の静鉄 1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
262	溝4	土陣堀	高杯	14.2		(8.0)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	4m以下の静鉄 1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
263	溝4	舟生土堀	井	8.4		7.9	(5.6) 16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	4m以下の静鉄 1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
264	溝4	舟生土堀	井	15.8		15.3	(7.1) 16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	4m以下の静鉄 1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
265	溝4	舟生土堀	井	16.2	5.4	16.2	6.5 ○:△:○:△: (7.5)H7/2	3m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	黒鉄	
266	溝4	舟生土堀	台付堀	13.9	5.2	9.2	9.2 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	3m以下の静鉄 1m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
267	溝4	舟生土堀	台付堀			(4.6)	(2.6) 16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	黒鉄	
268	溝8	舟生土堀	重	15.6		(11.9)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄 4m以下の荷合む	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
269	溝8	舟生土堀	重	15.4		(11.6)	16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄 4m以下の荷合む	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄 1m以下の静鉄	
270	溝8	舟生土堀	重	8.2	23.6	(20.4) ○:△:○:△: (7.5)H7/4	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	船頭改歴11条、耐候耐火、黒鉄		
271	溝8	舟生土堀	重	7.6		(14.7) 16.0 ○:△:○:△: (7.5)H7/4	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	1m以下の静鉄		
272	溝8	舟生土堀	重	15.3	15.7	(10.0) 16.0 ○:△:○:△: (7.5)H6/2	2m以下の静鉄	○:△:○:△: 1m以下の静鉄	黒鉄		

回収番号	遺物名	種類	器種	北緯度			南緯度	出土	残存状態	備考
				西経	東経	高さ				
273	満水	青白土器	壺	16.2			8.0 にA1-4傾倒 (10YR 4/2)	砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	1回収3/4回 1回収部断面2本+ひずみ
274	満8	青白土器	壺	8.0	3.4	10.7	11.5 にA1-4傾倒 (10YR 4/2)	砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	既掘1/3回 剥離学式、無理
275	満8	青白土器	壺	9.8	4.1	10.2	12.2 にA1-4傾倒 (5Y8R 7/3)	砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	既掘1/1回 既掘、ひずみ
276	満8	青白土器	高杯	11.8			5.7 砂利(5Y8R 6/1)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	1回収3/2回 1回収部断面2本
277	満8	青白土器	高杯	11.8			6.2 砂利(2.5YR 6/6)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	1回収3/2回 1回収部断面2本
278	満8	青白土器	高杯	18.0			7.5 明赤褐色(3.5YR 5/0)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	1回収3/4回 1回収部断面2本
279	満8	青白土器	高杯	20.2			6.4 浅褐色(10YR 8/3)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	1回収3/4回 1回収部断面2本
280	満8	青白土器	高杯	22.9			10.4 橙色(2.5YR 6/6)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	1回収3/2回 既掘、ひずみ
281	満8	青白土器	高杯	32.0	30.9		6.0 砂利(5Y8R 6/1)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1.5m以下の砂利	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1.5m以下の砂利	既掘1/1回 既掘部凹凸
282	満8	青白土器	壺	31.8	30.8	31.7	22.1 にA1-4傾倒 (10YR 4/2)	2m以下の砂利	既掘1/1回 既掘、ひずみ	
283	満8	青白土器	壺	(41.7)	11.6	39.6	34.0 橙色(7.5YR 7/6)	5.5m以下の砂利		1回収部断面2本、無理
284	満8	青白土器	壺	8.0	1.7	8.4	5.9 橙色(5Y8R 6/6)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	1回収3/2回 1回収部断面2本
285	満8	青白土器	壺	13.9	4.8	14.0	6.4 白色(10YR 8/2)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 2m以下の砂利	1m以下の砂利	既掘1/1回 既掘、既掘
286	満9	青白土器	壺	12.6	4.9	17.4	20.0 にA1-4傾倒 (7.5YR 7/4)	2m以下の砂利	既掘1/1回 既掘部断面2本、無理	
287	満9	青白土器	壺	13.0			18.0 にA1-4傾倒 (7.5YR 7/4)	2m以下の砂利 4.5m以下の砂利含む	2m以下の砂利	1回収3/2回 既掘部断面2本、無理、エア
288	満9	青白土器	壺	8.7	4.1	10.8	10.2 砂利(5Y8R 6/1)	3m以下の砂利	既掘1/1回 既掘部断面2本、エア	
289	満9	青白土器	高杯	15.6			3.9 砂利(5Y8R 6/1)	1m以下の砂利	1m以下の砂利	1回収3/2回 1回収部断面2本
290	満10	青白土器	壺	10.0			29.0 にA1-4傾倒 (5Y8R 6/1)	1m以下の砂利 4.5m以下の砂利含む	1m以下の砂利	既掘1/1回 既掘部断面2本、既掘、既掘、エア
291	満11	青白土器	壺	12.0			17.5 (7.5YR 7/4)	2m以下の砂利	既掘1/1回 既掘部断面2本、既掘、エア	
292	満11	青白土器	壺	14.0	5.5	18.6	22.4 にA1-4傾倒 (10YR 4/2)	2m以下の砂利	既掘1/1回 既掘部断面2本、既掘、既掘、既掘、既掘、既掘	
293	満11	青白土器	高杯	18.4			6.0 砂利(2.5YR 7/6)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	1m以下の砂利	1回収3/2回 既掘部凹凸
294	満11	青白土器	高杯	10.8			6.1 にA1-4傾倒 (5Y8R 6/1)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1.5m以下の砂利含む	1m以下の砂利	既掘部凹凸
295	満11	青白土器	高杯	12.9			6.0 砂利(5Y8R 6/1)	3m以下の砂利	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1)	既掘部凹凸 既掘部凹凸4個
296	満11	青白土器	壺	10.0	3.2	10.0	6.6 にA1-4傾倒 (7.5YR 7/4)	傾斜土 砂利(5Y8R 6/1) 1m以下の砂利	既掘1/1回 既掘部断面2本、既掘、ひずみ	
297	満11	青白土器	壺	12.4	4.4	13.0	7.3 砂利(5Y8R 6/1)	3m以下の砂利	既掘1/1回 既掘	
298	既合1-2	青白土器	壺	9.0	5.2	17.6	26.7 砂利(5Y8R 6/1)	1.5m以下の砂利	既掘1/1回 既掘部断面2本	既掘部断面2本、既掘、既掘、既掘、既掘
299	既合1-2	青白土器	壺	14.2			9.2 明赤褐色(2.5YR 6/5)	2m以下の砂利	1回収3/4回 1回収部断面2本	
300	既合1-2	青白土器	壺				3.0 (2.5YR 7/4)	2m以下の砂利	1回収3/4回 1回収部断面2本、既掘、既掘部断面2本	
301	既合1-2	青白土器	壺	20.0			31.5 明赤褐色(2.5YR 6/5)	2m以下の砂利	1回収3/2回 1回収部断面2本、既掘、既掘、既掘	
302	既合1-2	青白土器	壺	15.3	16.0	26.2	10.5 にA1-4傾倒 (10YR 4/2)	2m以下の砂利	1回収3/2回 既掘、既掘、既掘	
303	既合1-2	青白土器	壺	23.0	8.8	32.2	41.9 にA1-4傾倒 (10YR 4/2)	2m以下の砂利	既掘1/1回 既掘	既掘、既掘の可能性
304	既合1-2	青白土器	青白土器	18.7	8.7	31.2	39.7 浅褐色(2.5YR 6/5)	1.5m以下の砂利 2m以下の砂利含む	1m以下の砂利 2m以下の砂利含む	既掘1/1回 カケゴ、既掘、既掘、既掘の可能性
305	既合1-2	青白土器	青白土器	15.9	8.0	31.4	32.4 にA1-4傾倒 (7.5YR 7/4)	2m以下の砂利 4.5m以下の砂利含む	既掘1/1回 既掘	既掘、既掘の可能性
306	既合1-2	青白土器	青白土器	16.1	7.0	29.4	30.7 にA1-4傾倒 (10YR 4/2)	2m以下の砂利 4.5m以下の砂利含む	1m以下の砂利 既掘	既掘1/1回 既掘、既掘
307	既合1-2	青白土器	青白土器	11.2	3.6	11.7	13.4 (2.5YR 7/4)	1m以下の砂利	既掘1/1回 既掘	既掘、既掘の可能性
308	既合1-2	青白土器	青白土器	13.7	5.7	18.6	23.0 (2.5YR 7/4)	2m以下の砂利	既掘1/1回 既掘	既掘、既掘の可能性
309	既合1-2	青白土器	青白土器	27.5	11.9		18.5 砂利(5Y8R 6/1)	3.5m以下の砂利 4~6mm程度の砂利含む	1回収3/1回 既掘部断面2本	
310	既合1-2	青白土器	青白土器	17.5			6.0 砂利(5Y8R 6/1)	1m以下の砂利	1回収3/1回 既掘部断面2本	
311	既合1-2	青白土器	高杯	15.9			5.8 砂利(5Y8R 6/1)	1m以下の砂利	1回収3/1回 既掘部凹凸4個	
312	既合1-2	青白土器	壺	11.8	3.1	11.9	5.4 砂利(5Y8R 6/1)	傾斜土 1m以下の砂利	1m以下の砂利 1m以下の砂利	既掘1/2回
313	既合1-2	青白土器	壺	8.2	2.0	7.0	7.0 砂利(5Y8R 6/1)	2m以下の砂利	1m以下の砂利 既掘	手づくね、既掘
314	既合1-2	青白土器	青白土器				5.9 (10YR 4/2)	1m以下の砂利	既掘1/1回 既掘	
315	既合1-2	青白土器	青白土器				50.5 (10YR 4/2)	2m以下の砂利	既掘的 タキシメ、既掘	
316	土塁2	土塁器	杯身	13.0	5.1		4.1 砂利(5Y8R 6/1)	1m以下の砂利	1回収3/1回 既掘部断面2本	
317	土塁2	土塁器	高杯	12.3			4.4 砂利(2.5YR 6/6)	2m以下の砂利	1回収3/1回 既掘	
318	満14	土塁器	壺	10.6			3.5 白砂利(10YR 8/2)	1m以下の砂利	1回収3/1回 早急式土器	
319	満14	土塁器	小皿	5.8	2.6		1.2 にA1-4傾倒 (7.5YR 7/3)	2m以下の砂利	1回収3/1回 既掘ナゲ	
320	満14	土塁器	杯身	(16.4)		17.4	3.4 白砂利(5Y8R 6/1)	1m以下の砂利	1回収3/1回 未収集	
321	満14	土塁器	壺	(37.6)			31.4 黒色(10YR 1L 7/1)	2m以下の砂利	1回収3/1回 X X	
322	満16	土塁器	高杯	4.3			1.4 砂利(10YR 8/2)	2m以下の砂利	1回収3/1回 早急式土器	
323	満16	土塁器	高杯	6.2			1.7 にA1-4傾倒 (10YR 4/2)	1m以下の砂利	既掘1/2回 既掘、既掘土器	
324	満16	土塁器	壺				33.1 砂利(5Y8R 6/1)	2m以下の砂利	既掘的	

周番号	遺構名	器種	基準	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	底上	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
325	溝16	土師器	漆井	(29.5)			(4.0)	灰白色 (3BYR8/2)	3 mm以下の砂粒	口縁部分	
326	溝20	陶器皿	高白身身	(8.0)			(1.4)	灰白色 (N7/1)	1 mm以下の砂粒	軽度1/10例	
327	沿吉野・森間に伴わない遺物	陶器皿	杯	(16.7)			(1.9)	灰白色 (N8/1)	1 mm以下の砂粒	口縁部1/2例	
328	沿吉野・森間に伴わない遺物	陶器皿	身	12.3	2.6		(4.0)	灰白色 (N6/1)	2 mm以下の砂粒	口縁部1/2例	底部斜面へラテゴリ水調整
329	沿吉野・森間に伴わない遺物	陶器皿	身	13.6			(3.7)	灰白色 (N7/1)	1 mm以下の砂粒	口縁部1/5例	
330	沿吉野・森間に伴わない遺物	陶器皿	身	(22.0)			(5.0)	灰白色 (N8/1)	3 mm以下の砂粒	口縁部1/7例	
331	沿吉野・森間に伴わない遺物	陶器皿	高白身身	7.4			(2.0)	灰白色 (N7/1)	2 mm以下砂粒	底部1/3例	
332	沿吉野・森間に伴わない遺物	陶器皿	高身	9.2			(3.6)	灰白色 (2.5V7/1)	2 mm以下の砂粒	脚部1/1	
333	沿吉野・森間に伴わない遺物	陶器皿	身	6.6			(7.0)	灰白色 (N6/1)	2 mm以下の砂粒	底部1/1例	底部斜面へラテゴリ水ナダ
334	沿吉野・森間に伴わない遺物	土師器	高白身	14.3	5.7		3.8	灰白色 (3BYR8/2)	2 mm以下の砂粒	口縁部4/5例 注記: 完形	半島式土器
335	沿吉野・森間に伴わない遺物	土師器	小皿	8.2	3.7		1.6	灰白色 (3BYR8/2)	2 mm以下の砂粒	口縁部1/4例	底部へラオシ組
336	沿吉野・森間に伴わない遺物	土師器	小皿	8.1	6.2		1.7	灰白色 (2.5V6/1)	1 mm以下の砂粒	口縁部1/1例 注記: 完形	底部へラオシ組
337	沿吉野・森間に伴わない遺物	白磁	碗				(2.4)	灰白色 (2.5V9/2)	頸部	口縁部	
338	沿吉野・森間に伴わない遺物	青磁	瓶	(6.0)			(2.0)	瀬戸藍色 (10GY7/1.5)	頸部	底部1/8例	
339	沿吉野・森間に伴わない遺物	陶器質	平手丸					灰白色 (N6/1)	2 mm以下の砂粒 6 mm以下の砂粒	頸部	10.0×11.0×4.5cm、瓦当面、円筒横口 + ナギ、開口欠損
340	沿吉野・森間に伴わない遺物	陶器質	平丸					灰白色 (10Y8/1)	2 mm以下の砂粒 7 mm以下の砂粒	頸部	13.0×12.7×2.3cm、輪郭筋目タキ模様 + 開口欠損、後傾傾

土製品

周番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	底上	残存状況	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚						
C 1	溝1	土製円盤	49.5	(34.0)	3.0	(6.45)	灰白色 (3BYR8/2)	1 mm以下の砂粒	1/2残	名・後・量・古・前・I	土器器軸用 円孔
C 2	溝14	輪抜口	(38.6)	(62.6)	(25.0)	(61.26)	昭和初期 (N5/2)・昭和中期 (12.5V7/1)・昭和後期 (12.5V7/1)の複合化 + 未確認 (3BYR8/2)	1 mm以下の砂粒 4 mm以下の砂粒	両端欠損	中世	
C 3	遺構に伴わない遺物	土製円盤	32.0	31.5	11.0	12.31	昭和初期 (3BYR8/1)	1 mm以下の砂粒 2 mm以下の砂粒	完形	中世	備前焼軸用

石器

周番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	底上	残存状況	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚						
S 1	溝1	石鉋	(17.0)	(14.8)	(3.7)	(0.27)	サヌカイト	欠	春・後・Ⅲ・古・前・I	平基式	
S 2	溝1	スクレーパー	44.5	(37.7)	8.0	(15.23)	サヌカイト	欠	春・後・Ⅲ・古・前・I		
S 3	溝1	スクレーパー	47.6	27.3	9.3	11.16	サヌカイト	完形	春・後・Ⅲ・古・前・I		
S 4	遺構に伴わない遺物	砥石	(155.0)	(96.5)	(48.5)	(449.96)	織田花崗岩	欠	中世		
S 5	遺構に伴わない遺物	砥石	(85.0)	(170.0)	(23.0)	(353.24)	流紋岩	欠	中世		

※ 「数値」は実測値または復元値を表し、土器の「口径」と「底径」の「(数値)」は不確実な復元値、土器の「器高」及び土製品・石器・鉄器の「(数値)」は残存最大値、空欄は実測・復元不可を示す。

※ 鉄器はクリーニング後、含浸処理前の数値である。

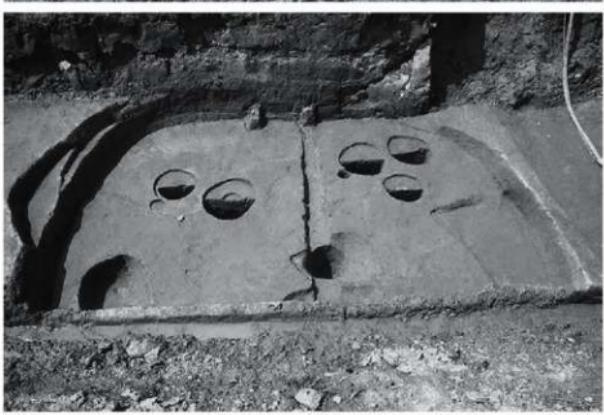
1 竪穴住居 3
(東から)



2 竪穴住居 5
(南から)



3 竪穴住居 6
(南から)



図版 2

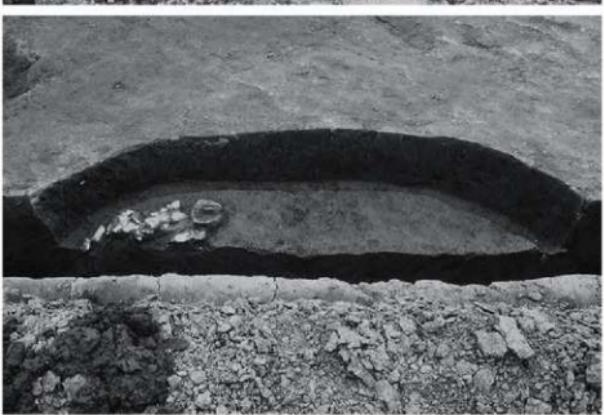
1 竪穴住居 7
(南から)



2 竪穴住居 8
(南から)



3 竪穴住居 10
(北西から)





図版 4

1 溝1
遺物出土状況
(南から)

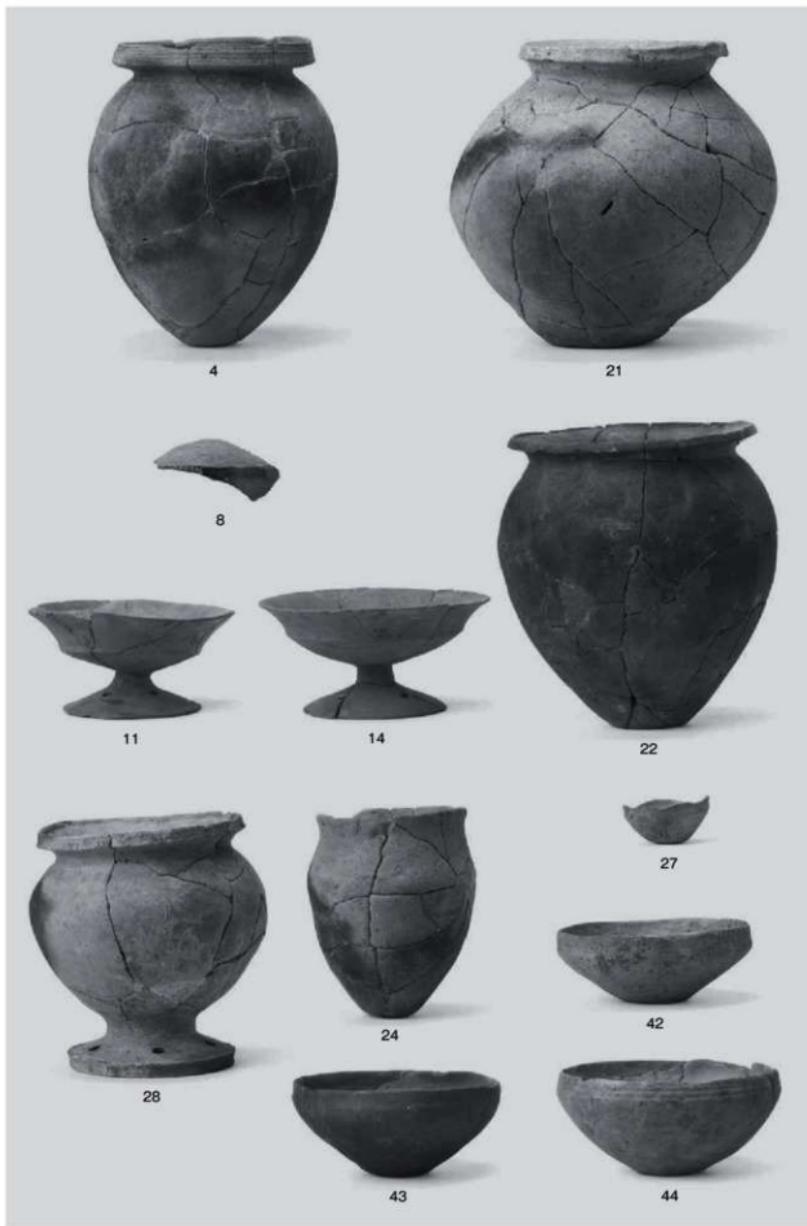


2 溝2
遺物出土状況
(北西から)



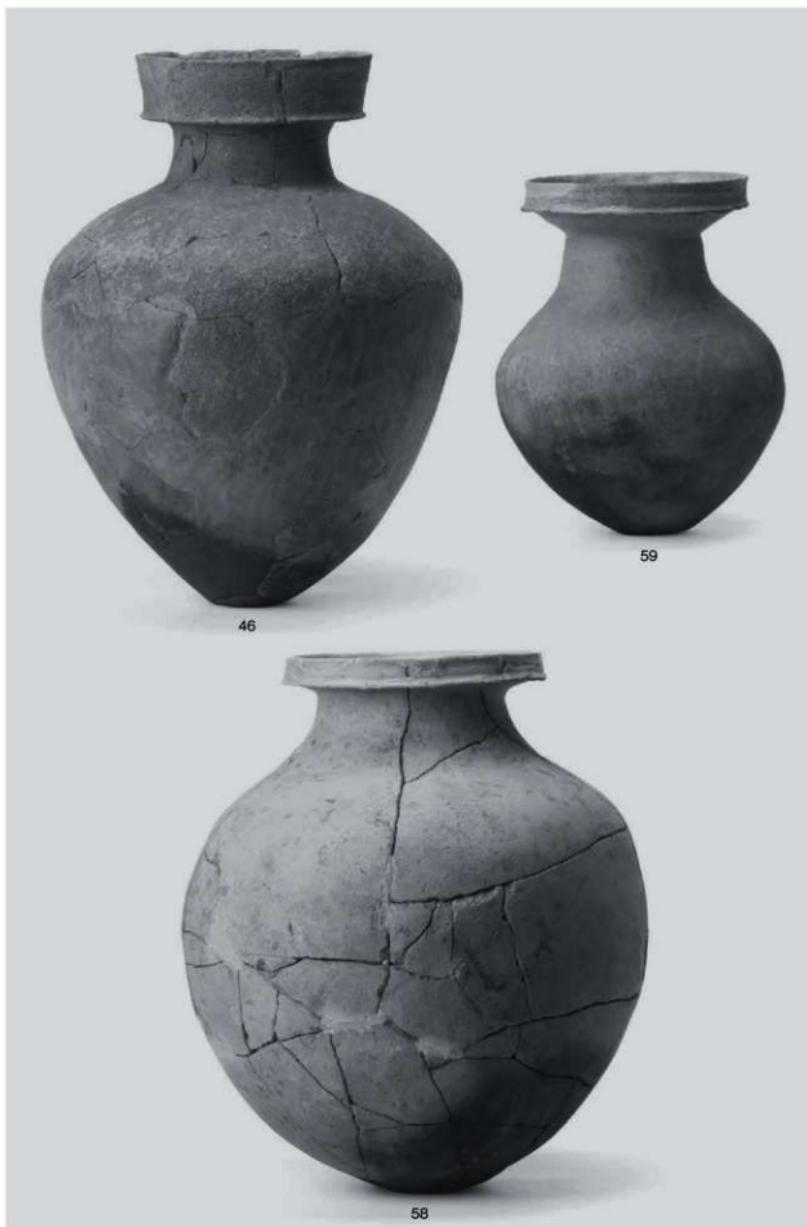
3 掘立柱建物 1
(南から)



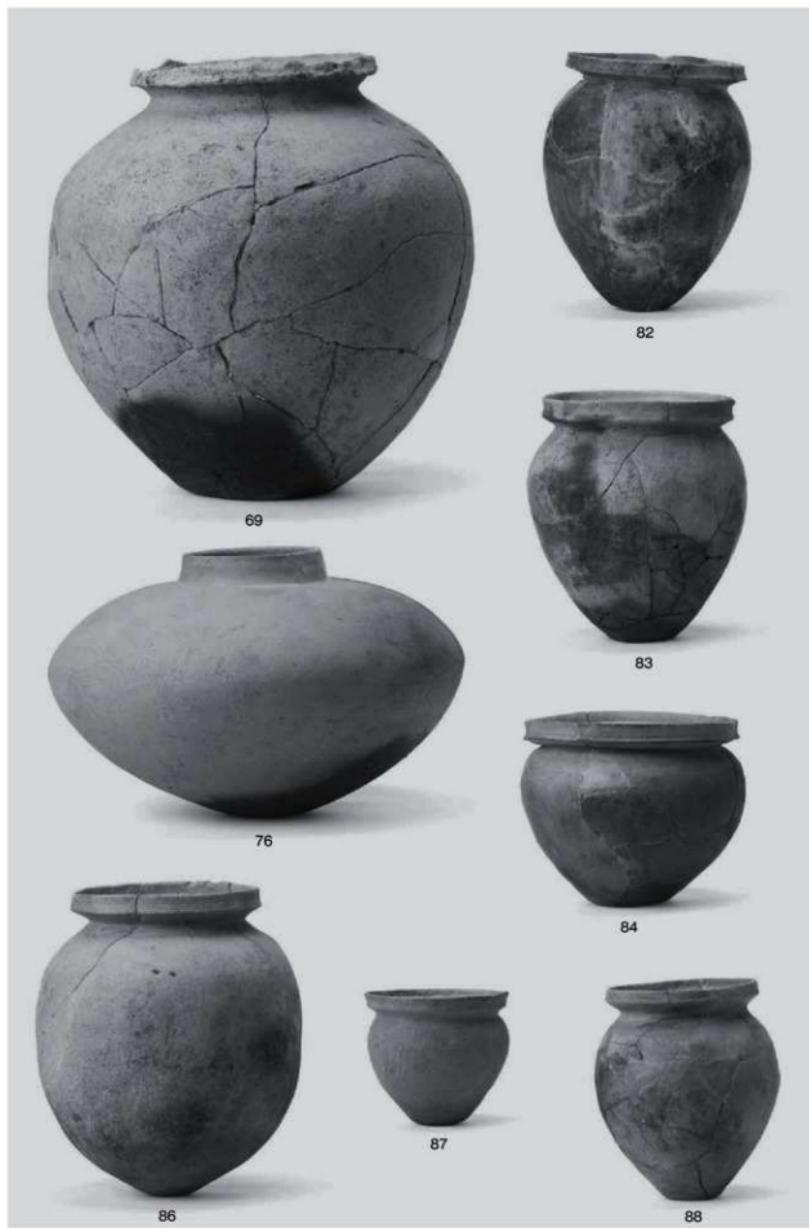


竪穴住居 4・6・8・13 出土遺物

図版 6

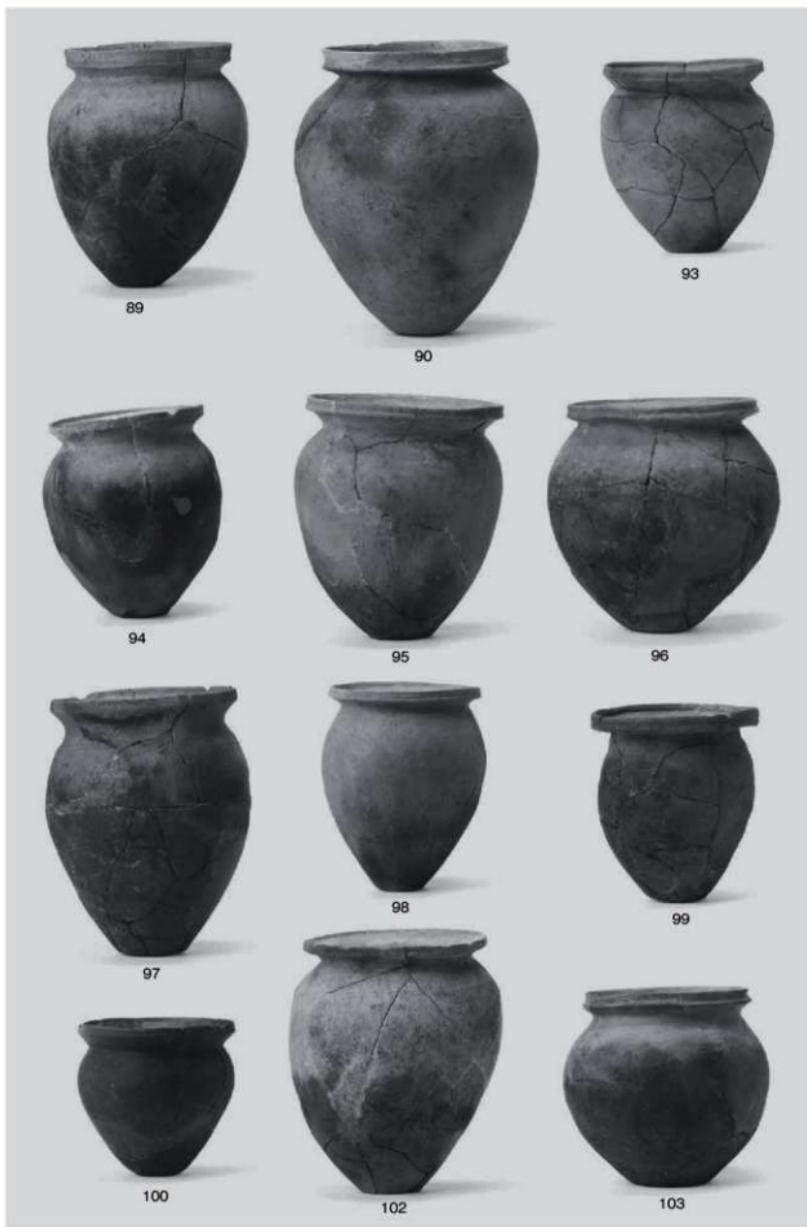


溝 1 出土遺物 1

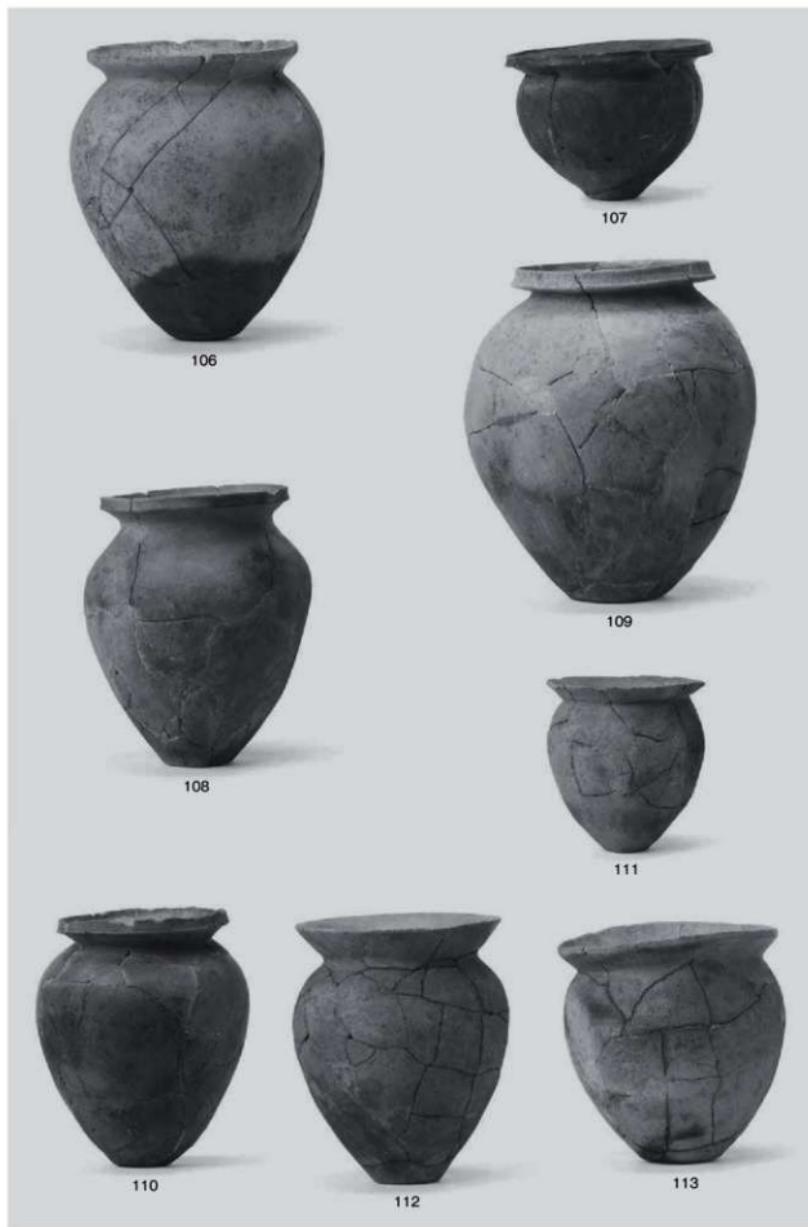


溝 1 出土遺物 2

図版 8

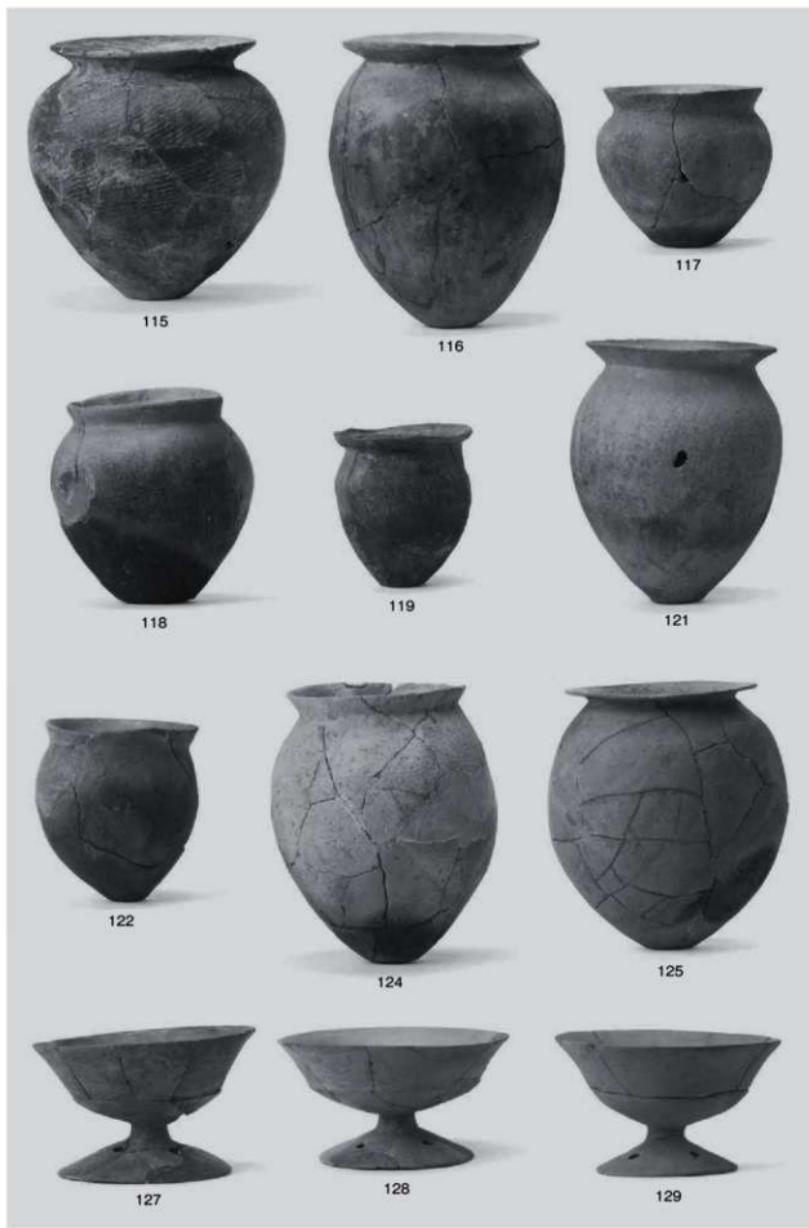


溝 1 出土遺物 3

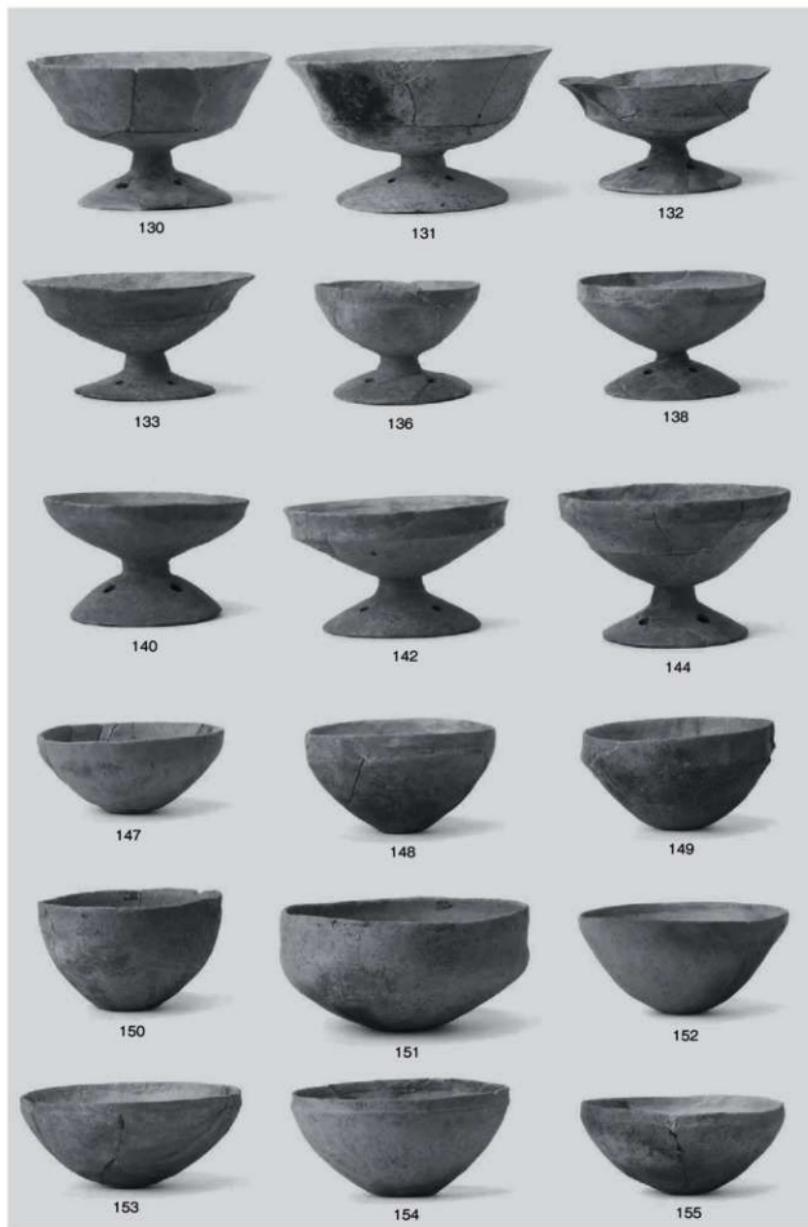


溝 1 出土遺物 4

図版 10



溝 1 出土遺物 5

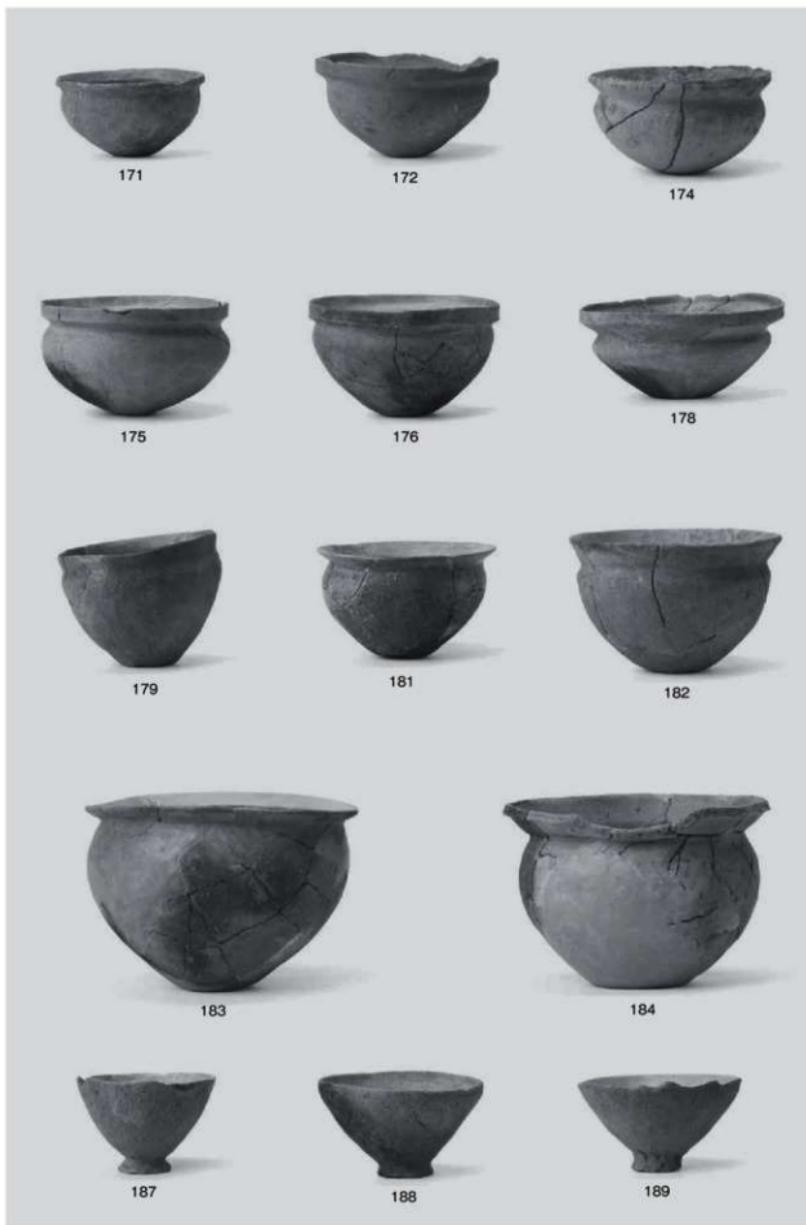


溝 1 出土遺物 6

図版 12



溝 1 出土遺物 7



溝 1 出土遺物 8

図版 14



191



192



194



196



197



198



199



203



204



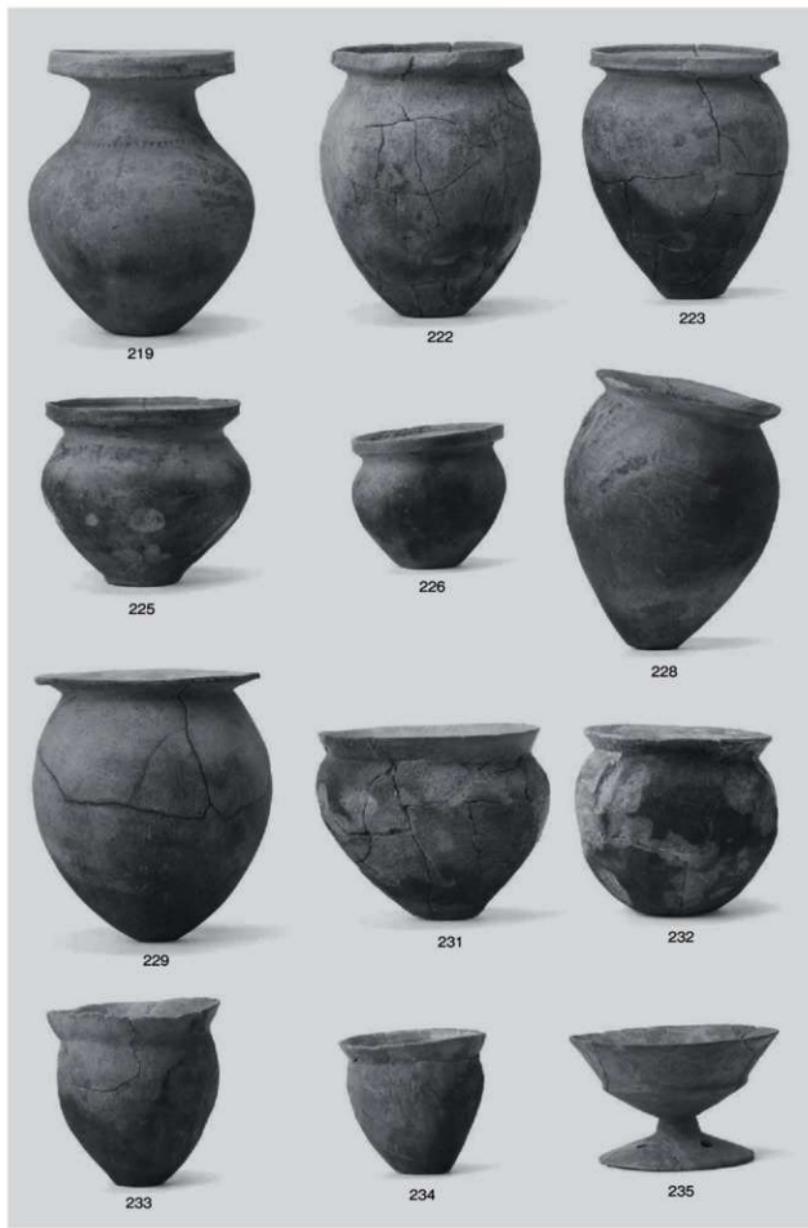
206



216

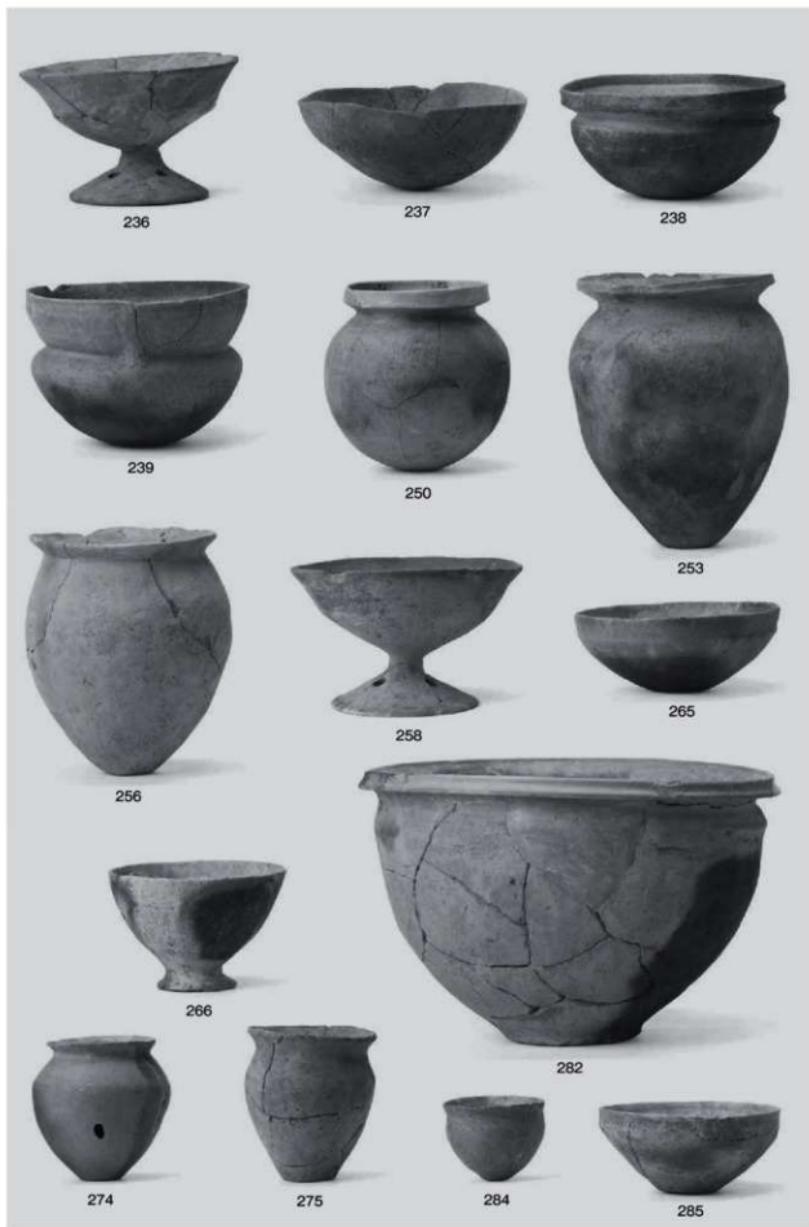


217



溝2出土遺物

図版 16



溝2・4・8出土遺物



298



303



302



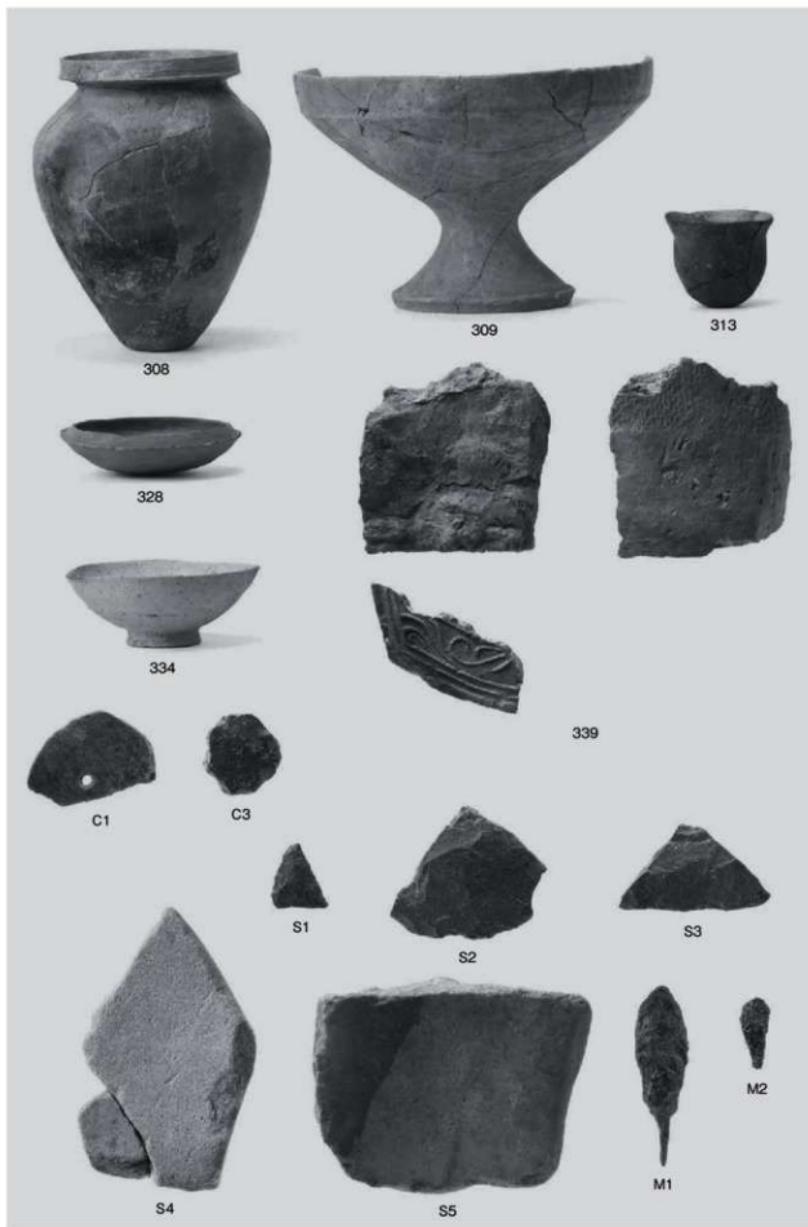
307



304

遺構に伴わない遺物 1

図版 18



遺構に伴わない遺物 2、土製品・石器・鉄器

報告書抄録

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 260

西 加 茂 遺 跡

一般県道清音真金線道路改良工事に伴う発掘調査

令和4年3月18日 印刷

令和4年3月18日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南1-1-5